

---

# 呪いの十円硬貨

黒川文博

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪いの十円硬貨

### 【Nコード】

N2453W

### 【作者名】

黒川文博

### 【あらすじ】

東都女子大二年生の中原咲子は、アルバイトで中学生向け進学塾の国語講師をしている。

ある日、板書で夢中になっていたときに、やる気のない生徒、飯星遥香たち三人が後ろの席でコックリさんをして遊んでいた。後片付けをしているときに、咲子はその痕跡に気づき、せっかく真面目に授業をしていたのにと憤慨する。

しかし、落ちていた十円玉に触れたとき、脳裏に不吉なイメージが広がった。咲子には軽い霊感があり、そこに込められた想念を感じ

取ることが出来たのだ。コックリさんで呼び出した霊がかなり悪質なものであったと咲子は直感した。

その日、遥香は家に戻らず、大騒ぎとなり母親の飯屋啓子は警察に捜索願を出す。

彼女には以前からストーカーの被害を受けたことがあるらしく日記からそれが判明し、刑事の聞き込みから人相の悪い若者が捜査上に浮上する。

そして、失踪から一週間後、彼女は遺体で荒川の河川敷に打ち上げられた。

—

進学塾での国語の授業が終わり、講師をしている咲子が黒板を消している、生徒が後ろの扉からぞろぞろと帰って行った。消し終わって、ふ、と、後ろの席を見ると、白い紙切れが置いてあるのが目についた。

何だろう？

気になったので、とことと席の間を通り、教室の後ろに行ってみると、白い紙の上にはサインペンで書かれた鳥居の図形と数字と平仮名が並べられてあった。よくあるコツクリさんの方陣の様であった。まさか、自分が授業をしていた四十分の間にこっそりこんなことをしていたのかと思うと、少し腹が立った。真面目に授業をしているつもりなのに、と。

机の下には十円玉が落ちていた。

拾おうとしてみがみ、ふれた瞬間、咲子の脳裏に不吉なイメージが広がった。イメージは何か具体的なものではなく、ただ抽象的に不吉、というものだ。普段から軽い靈感めいたものはあった。と、自分では思っている。

「何、これ？」

もう一度触ろうとしたが、いけない感じがしてやめた。もしかしたらコツクリさんでよくないモノを呼び出してしまったのかも知れない。そんな気がした。

明日になれば、掃除のおばさんがきれいに片付けてしまうだろう。そう思って放置し、教室の電気を消した。

教科書と出席簿を両手に抱えて、扉を閉めて職員室に戻ると、こ

こ英進塾の専任講師である大島と西海にしうみがお茶を飲んでいた。二人は大学生の時から講師のアルバイトをしてそのままここに就職している。大島が英語、西海が数学を担当していて、国語は普段は校長の塩野が担当していた。

最近になり年配である塩野の体調が悪くなり、国語を担当できる学生の求人があり咲子は大学の学生課を通じて応募して採用された。中学二年生と三年生を担当している。男子生徒には割と評判がいいようだが、女子生徒には受けが悪く、少し大人びた生徒は露骨に嫌悪感を示すときもある。

だから、かも知れないが、咲子の授業中に、後ろの席でコツクリさんなんかをしているのは一部のそうした女子生徒であることは確かめずとも想像はついた。

「中原先生、もう慣れたかい？」

大島が、気遣うような表情で訊いてきた。「何かあったの？」

彼は学生時代、ここでアルバイトしながら、アメリカンフットボール部でも活躍していたせいもあり、体育会系そのもののノリではあるが、結構後輩を気遣ってくれる。

「あ、いえ、……わたしの授業がつまらないのか、後ろの席で遊んでいる子がいたんです。後から気づいたんですが」

「ああ、中嶋たちでしょう。あの年頃の女子は同性の教師に反動的なことがありますからね」

咲子は正直なところ、教師志望の自分の進路に悩みを抱きつつあった。東都女子大に進学した当初から中学校の国語科教師になるべく、単位を取っているが、現実の中学生を見るとそうしたやる気を失せさせてしまう。今回、彼に、「中嶋たち」といわれても、顔と名前が一致しなかった。座席表を見てみると、確かに、あの席の辺りに、中嶋裕美果ゆみか、和田加奈子かなこ、飯星遥香いしほし・はるかがいた。大島の話では彼女たちは一年生の時から仲良しであり、いつもつるんでいたずらをしているということだった。ただし、あの年代の少女は、大島たち

の様な年上の異性にはこれ見よがしに反発したりはしない。

「具体的に何をしていたの？」

最前から黙って自分のノートを整理していた西海が口を挟んだ。

彼も学生時代からの塾講師経験者だが、スポーツマンではないことが大島とは違っていた。あくまでも理系のお兄さんである。

「それが、……コツクリさんって知ってます？」

「はあ？」

二人ともぼかんと口を開けた。

英進塾は中学一年生から三年生を対象とした、受験対策のための塾で、難関高校への入学者の多さを誇っている名門塾である。その塾の中で授業中にコツクリさんなどという幼稚な遊びに興じていることが理解できないというのが彼らの反応であった。

「コツクリさんって、あのキツネの霊を呼び出してご託宣を得るというオカルト系のおそびだろう？」

「そのコツクリさんです。方陣に使った紙と、コマになる十円玉が後ろの席に落ちていたんです」

咲子は事実のみを述べた。自分が十円玉に触れたときに感じた不吉な靈感のことは言わなかった。

「おいおい、そんなことしている子がいるのかい？ もう三年なのに、それに、授業中なんだろう？ 君は気づかなかったの？」

西海は責めるような口ぶりで言った。生徒になめられる以前に、こつした行為が授業中に行われていて気づかない方がおかしいと言わんばかりであった。確かに、板書に一生懸命になりすぎていた面も否定は出来ない。まだ、始めて一週間もたっていないし、生意気盛りの中学生になめられているし、教室全体に注意をまわす余裕もなかった。

「はい……でも、後になってみると、やっぱりわたしが悪かったかも」

「まあ、いいよ。そのうち慣れればわかるようになるさ。これからはなるだけ背中を見せないことだな」

「はい」

西海の皮肉にも素直にはいと首肯するしかなかった。

帰り際になり、塾の外に出ると、西海には友人がクルマで迎えに来ていた。白いセダンだった。車高は普通のものより少し低く、太いタイヤに換装され、大きな排気音を立てていた。

「君も乗っていくかい？」

咲子は少しだけ迷った。これから一人で電車で自宅に帰るのは、何となく不安だし、おっくうでもあった。クルマでどこかに行くついでに乗せてもらうのなら、迷惑にはならないだろうし別にいいかと思った。しかし、ドライバ―の男を見て、少し嫌な感じがした。波長が合わないというのだろうか。髪を金色に染め、派手な革のジヤンパーを着ていた。表情はたるみ、少しにやけた口元から黄色い歯が見えた。

「あの、やつぱりいいです。お友達なんですか？」

「ああ、学生時代のな。もつとも、彼はまだ学生なんだ。卒業できないでいる」

「おいおい、初対面の女性に変なこと言わないでくれよ。海外留学したんで卒業年度がずれこんだだけだ」

ドライバ―ズシートから低い声でそう言った。西海は彼のことを神谷と呼んだ。神谷はアメリカの大学に二年間行っていたらしい。もつとも、留年の本当の理由はそれだけではなさそうであった。身なりからしてあまり勉強熱心な学生ではなさそうであった。年は西海と同じ二十五、六歳くらいに見えた。

咲子が乗らないとわかると、彼はすうつと窓ガラスを閉じ、ライトを点けクルマを発進させ、夜闇の向こうへと行ってしまった。

英進塾は咲子の通う東都女子大学の最寄り駅である、JR中央本線西荻窪駅の駅前ビルにある。ビル前の道路で西海達と別れた後、歩いて駅に向かった。

駅の時計は九時十五分を示していた。

普段は保護者である兄の監督が厳しく、門限は早いほうだ。例外的に大学の幹旋であるアルバイトの塾講師だけは認めてくれ、授業のある月・水・金だけは十時までに帰ればよいということになっていた。

待っていると、すぐに電車が滑り込んできた。乗ろうとして携帯電話が鳴っているのに気づいた。このまま乗ってしまおうかと思っただが、なぜか電話に出てしまった。一本見送ってもすぐに次の便が来るから別にいいと思った。

「はい？」

「中原先生かね？ 塩野ですが」

「はい？」

電車の轟音と、雑踏で聞き取りにくかった。それに、普段掛かってくるのは友達からだけだったから、男性の声が誰なのか一瞬わからなかった。

「英進塾の塩野です」

「ああ、校長先生？ 失礼しました。何でしょう？」

咲子は送話口を左手で押さえながら、聞き取りにくい彼の声に応答した。そして、列車を待つ列から外れて、後部のベンチ付近まで移動した。塩野校長からの電話なら何か重要なことだと思ったからだ。

「生徒の飯星遥香の保護者から、まだ帰ってこないという連絡があったんだよ。彼女、今日は授業に出席しているね？」

「どうだったっけ？」

目の前を、こんなところで電話なんかするなよ、という目つきで通り過ぎる男性に気づき、咲子はさらに奥まった場所に移動した。確か、飯星遥香は、さっき大島が指摘した中嶋たちの仲間だった。あの三人があそのこの席でコックリさんをしていたのだ。

「ええ、確かに出席していたと思います」

そして、咲子が授業を八時四十分きっかりに終わり、黒板を消したり後始末をしている間にぞろぞろと帰って行ったのだった。自宅



はどこだか知らないが、ほとんどの女子生徒は保護者が交代で迎えに来たりしているようだった。

「彼女の保護者の方は迎えにいらっしやらなかったのですか？」

「それがよくわからないんだよ。友達の母親のクルマに乗せてもらうような約束だったのが、友達に聞いても先に帰ったということらしくて、他の誰かのクルマに相乗りしたのか、勝手に帰ったのか、

……とにかく、約束の時間に帰ってこないということらしい」

「あの、……わたしはどうしたらいいんでしょう？」

要領を得ない塩野の口上に段々と、彼の焦燥感が移ってきた様な気がした。

自分の授業がつまらなかつたせいで、彼女が家出をしたとしたら、……そんな自虐感も沸いてくる。

「ああ、中原先生は気にしないでくれ。たぶん、彼女たちの行き違いだろう。そのうち、見つかるさ。それこそ、もう子供じゃないんだし」

「はい」

視線を上げると、ちょうど上り電車が出た後だった。咲子は激増した疲労を感じながら、重い足取りで女性専用車両の並び口に、再び並び直した。

## 二

咲子は兄と二人で高円寺の住宅地の一戸建てに住んでいる。

両親は、咲子が中学一年生の時に交通事故で亡くなった。兄とは年齢が十歳も離れているため、彼が実質上の保護者、父親として振る舞い、咲子もそれに甘んじて過ごしている。事故の話を聞いたときにはにはわかには信じられず、父と母がこの世からいなくなったと

いう実感はまったくなかった。

通夜の時にも、葬儀の時にも遺体と面会する機会はあるものだが、交通事故の際に発生した火災のせいで損傷があまりにひどく、中学生だった咲子には見せられず、その結果、しばらくの間、両親の死を現実的に受け入れられずにいた。

電車の窓から吊り革につかまり、窓に映ったシートに腰掛ける中年女性を見ながら、咲子は七年前のことを思い出していた。

母の遺品であるコイン　趣味で集めていた　にふれたとき、母の声が聞こえたのだ。そんな気がしたただけだと、自分で自分に言い聞かせたが、あのときの声は確かに実在するものの声だった。正確に言うとそんなイメージが脳裏にひらめいただけのことだ。

ごめんね、咲子。

母は咲子を後に残して逝ってしまったことをわびた。

そのとき、初めて両親の死を現実のものとして受け入れた。自分の靈感に自信があった、というわけでもないが、感覚的に理解できたというのは大きかった。

高円寺駅から、なるべく照明の多い道を選んで十分ほどで自宅にたどり着いた。建坪二十五坪ほどのこじんまりした木造二階建ての家である。車庫はないがときどき、兄の友達がクルマで前の道路に乗り付けている。

今日は、シルバーのセダンが止まっていた。

「ただいま、遅くなっちゃった」

咲子は玄関から大きな声で、挨拶した。靴を見ると女性もののパンプスがあった。多分、勤め先の雑誌編集部と同僚だろうと思った。「おかえり」

台所に顔をのぞかせると、兄とともにショートカットの背の高い女性がいて、一緒にご飯を食べていた。中々の美人だ。

「こちら、同僚の佐伯静香さんだ。これ、妹の咲子」

「よろしくね」

女性はにつこりと笑って会釈し、咲子もあわててお辞儀した。テーブルの上には、ノートや雑多な資料類が散乱していて。どうやら、食事しながら仕事の話もしていたらしい。ちなみに、兄の担当はオカルト記事と心靈写真をメインに扱っている「芸術写真」という雑誌の記者である。ここにいる女性も多分、同じ仕事をしていると思われる。

咲子は手を洗い、上着を脱いでくると、改めて食卓に戻った。

「すみません、散らかっていて」

「ううん、いいのよ。押しかけたのはあたしだから」

明るく快活な態度でそう言った。

「何やってらっしゃるんですか？」

「えへへ、来月号の記事の打ち合わせなの。せっかく取材した記事を編集長に却下されちゃったのよね」

静香は兄の目を見ながら微笑んだ。仕事を却下されたのがむしろ嬉しいかのような態度だった。

「まあ、ニュースソースがありきたりすぎたからな。自殺者の出たアパートに夜な夜な出る幽霊の話だったんだ。俺から見ても馬鹿馬鹿しい」

兄は元々、理屈の通らないものは受け付けられない体質だった。迷信やおまじないなど絶対に信じない。それが、なぜ、佐伯静香という美人と一緒にオカルト雑誌の記者をしているかということ、一口で言うとうと左遷されたのだ。

兄、高史がビジネス専門誌をメインに扱っているライオン社に入ったのは、咲子が中学一年生の時だった。両親を事故で亡くす少し前のことである。東都大学経済学部を優秀な成績で卒業した兄は、本流である経済ジャーナル編集部に配属され将来を嘱望されていた。それが、両親の事故死により、妹の面倒を見なくてはならなくなり最初は仕事を無理して頑張っていたが、段々と、長期出張や残業を断らざるを得なくなってきた。

それで、段々と本流の仕事からそれて、雑仕事をやらされるよう

になった。

「芸術写真」は、元々はライオン社の刊行物ではなかった。

色んな出版社の合併統合を繰り返して、売れる雑誌だけ残り、売れない雑誌は次々に廃刊に追い込まれる中、ごく一部のファンに根強い需要のあるオカルト専門誌として生き残っていった。

生え抜きの記者がいる中、ライオン社の余剰人員の左遷先としても残ることになった。

佐伯静香はどちらかというところ、芸術写真の生え抜きの記者であるらしい。それで、兄は色々、彼女に指導してもらっている関係と言っていた。

「咲子ちゃん、何かいいアイデアないかな？ 現役の子大生なんだしさ」

静香はテーブルに肘をつき、両手の上にあごをのせ、にっこり微笑んだ。いいアイデアを期待されているような感じだったが、あいにくと咲子も話題には遅れ勝ちである。流行のファッションも知らないし、最近の女子大生が何に夢中になっているのかも興味がない。

「こいつは、少しずれてるからな」

兄は馬鹿にしたような言い方をした。

「そう言えば、今日中学生の女の子たちがコックリさんをしていましたよ」

自分の授業中とは言えなかった。

「コックリさん？ それは小学生レベルだな」と兄。

「待って、中原君。何かいいヒントになりそうよ」

「そうかい？」

期待満面の静香に対し、兄は疑心暗鬼になっていた。

「三人の女の子が、平仮名と数字を書いた方陣の上に十円玉を置いて、その上に人差し指を重ねて、念ずると、コックリさんという霊が降りてきてご託宣をもたらすというものです。……ってどうか、

「ご存じですよ、この程度のこと」

「うん、うん」

静香の表情は余計興味深げになった。

「それで、塾の女子中学生なんですけど、……こっさりやって、紙と十円玉をそのままにしてたんです。それっていけないですよね？」

「さあ、いけないかどうか聞かれてもねえ。何か悪いことでも起こったの？」

「あ、そう言えば、その直後に校長先生から電話が掛かってきて、

……お母様が迎えに行ったのにいなかったって、それだけなんですけど」

「そうよ。ちゃんと呼び出した霊にお帰りいただかないと祟ることもあるそうよ」

静香は元々オカルト大好き人間だ。だから、些細なことにも心霊現象を見つけて出そうとする性癖がある。こんな彼女が兄とうまくコンビを組んでいることが不思議でもあった。

「そうそう、中原君。今日、森野編集長に呼び出されてたの、何だったの？」

突然話題を変えるのも彼女の癖だ。

「半日応援派遣の話。打診だけだったけど」

「まあ、半日って、うちの仕事はしなくていいって言うの？」

「そういうわけでもないんだろうけど、森野さんのことだから先方の話を断りにくかったんじゃないか」

「ふうん」

横で聞いていた咲子としては、兄がそのまま運良く元の職場である経済ジャーナルの現場に戻れるのならそれに越したことはないと思っただ。何せ、彼が全然柄ではないオカルト雑誌の記者をしているのは自分のためだと信じ込んでいるから、そうすることで兄の人生を取り戻せるなら、少しでも自分の心の負い目が軽くなる、そう思っただ。

夜十二時前になり、咲子は風呂をすませ、タオルで髪を拭きながら、姿見の前に座った。

今日は色んなことがある一日だった。

アルバイトをはじめて三回目の授業。三年生の古文だった。板書に一生懸命になるばかりで、気がつけば教室の後ろの席でコックリさんをしている生徒がいた。

でもなぜ？

彼女たちは三年生の十月という大事な時期にさしかかっている。

この二学期の中間テストと期末テストで内申書の点数が決まってしまうのだ。もしかしたら、推薦入試が何かで進路が決まっているのかも知れないが、だとしたら、わざわざ進学塾に通う必要もないはずだ。

咲子は目の前に写った自分の姿を見て、何となく母を思い出した。

静寂を破っていきなり携帯電話の着信音が鳴り響いた。

ぎょっとした。出ようか出まいか迷った。こんな時間に掛けてくる友人もいないし、間違い電話しか考えられない。

液晶パネルを見ると、校長の塩野だった。出ないわけにはいかない。

「もしもし」

「中原先生、大変なことになりましたぞ」

「ああ、……飯星さんのことでしょうか？」

「行方不明になりました。保護者が警察に捜索願を出しました。友達のクルマにも同乗していないし、家にも帰っていないそうです。知っている限り、……」

後は聞いていなかった。

行方不明と言うからには、拉致されたか、家出したか何かだろう。だが、中学校の教師ならともかく、塾の一講師が口を出すことなどないと思った。

唯一手懸かりがあるとすれば、行方不明になる直前、教室の後ろでコックリさんをしていたということだ。が、そんなことを真面目に主張すればこっちの頭がおかしいと思われるに決まっている。

咲子の直感ではあの十円玉には凶悪な想念がこもっていた。おそらく、三人で託宣を得るために霊を呼び出したのが、たちの悪い霊で、しかも、お帰りいただくこともなく間違った終了の仕方をして、災厄を招いた可能性は考えられた。さもなければ、電流が流れたかのようなシヨックまでは感じなかったはずだ。

母の集めていたコインにもたまに、そういった想念が感じられるモノがあった。コインは元々流通を目的として鑄造された物である。人から人へと手渡される中で、一所に長く留め置かれていた物もあれば、左から右へとすぐに流れていく物もある。

母のコレクションの中で一番古い物は古代ローマ帝国時代のテイベリウス帝の肖像が入った、デナリウス銀貨であった。結構きれいな状態であったので、壺か何かに納められて長い期間保存されていた物と思われる。

咲子はそうしたコインを通じて世界史に興味を持つようになった。

「中原先生聞いていますか？」

「あ、はい」

突然、現実を引き戻され、咲子は何を聞かれていたのかわからなくなり、しどろもどろになった。

「わたしが心配しているのは、最近の彼女たちの行動が少しおかしいと感じていたことです。教師の前ではやけに素直だし、夜遅くまで勉強をしている様子だし、……しかし、その割に態度がやけにハイなのです。言っている意味はわかりますか？」

「あの、……」

「とにかくですね。明日になれば、警察関係者からの事情聴取を受けるかも知れません。塾の講師としてしっかりとした対応をお願いしたいのです。それに、もし、……もしもですが、何が手懸かりに

なるようなことがあれば、一刻も早くわたしの携帯に連絡して欲しいのですよ」

「わかりました」

咲子は意味がよくわからないまま通話ボタンを押して電話を切った。ふうつと、ため息をつき、ベッドに潜り込んだ。一日の疲れが急速に頭を覆いつくし、やがて深い眠りへと落ちていった。

### 三

翌朝、大学に出ようと玄関で靴を履こうとしていると、ドアチャイムが鳴り、二人連れの暗い色のスーツ姿の刑事が二人訪れた。

「あのう、……何でしょうか？」

「中原咲子さんですね？ 西荻窪の英進塾の講師をなさっております」

「ええ」

咲子は相手のつま先からてっぺんまでを見回した。がっしりした体格に、さっぱりと整えられた髪型、きれいな顔なのにどこか陰のある目つきと風貌。そして、男は背広の内ポケットから身分証を取り出し、咲子の目の高さに掲げた。警視庁の刑事で、名前は亀田と書いてあった。連れは自己紹介しなかったが、彼が山本という名前であることを手短かに述べた。

「昨晚、生徒である飯屋遥香さんが失踪したのです。未成年者誘拐の疑いがあるので、警視庁捜査一課も、所轄の吉祥寺署刑事課と合同で捜査に当たっています」

「えっ？ 誘拐？」

咲子は動悸が激しくなり、足ががくがくと震えだした。生まれてこの方、警察官と話をする機会もなかったし、いきなりの来訪が誘拐の捜査だったのだ、驚かない方が不思議だったし、何より、精神的に頼りにしている兄がすでに出勤した後で一人つきりで対処しな



ければならないと言うことが一番の心の重荷であった。

「それで、……伺いたいののは、誰が最後に彼女を見たのか？　と言うことなんです」

「最後に？」

「ええ、誘拐事件の時には重要な手懸かりとなります」

「昨日、三時間目、……塾のスケジュールですが、中学三年の国語の授業でした。八時四十分きっかりに終えて、黒板を消したり後片付けしている間に、後ろを見たらすでに、生徒の大部分は教室からいなくなっていました」

「ふうん、……つまり、飯星さんがいたと確信を持って言えるのは？」

「その、八時四十分だと思います。授業には全員出席したので」

「その八時四十分というのは、……念のためですが、チャイムか何か鳴るのですか？」

「はい、教室のスピーカーから小さな音が出ます」

「そうですか。では、彼女は誰かと一緒に帰っていましたか？」

「そこまではわかりません」

「では、……」

亀田刑事はぽんぽんと質問の矢を降らせた。咲子はとつさに、記憶をたどり、思いつくままに答えを述べていった。時間にして五分钟左右だろうか、途中から猛烈に頭脳が疲労感を帯びてきた。人間の脳はこうした、質問回答に慣れていないと、途中で行き詰まったりするものだ。

刑事の質問はむしろ、咲子を疲労させるために、するのではないかと思われるほどに矢継ぎ早だった。

「彼女と一緒にいた生徒に心当たりはありませんか？」

「えーと」

咲子は、英語講師の大島に言われたとおり、中島裕美果と和田加奈子の名前を挙げておいた。三人でコックリさんをしていたのだ。その後帰ったとしたら、当然一緒にいただろうと思われた。

「中島裕美果に和田加奈子ね、……そう」

亀田は手帳に書き込みながらも、不審そうな目で咲子を見つめた。余りに強い視線を感じ、咲子は目を伏せてしまった。

「中島と和田は、中島の母親の迎えの車で一緒に帰っている。塾の玄関前で別れたそうだ」

「あ、そうだったんですか？」

「あなたが彼女たちが仲良しだと思った理由は？」

再度問い詰められる立場になってしまった。

彼女たちが仲良し三人組だという、確証はなかった。

「すみません。わたしも一週間前からアルバイトで講師をしているだけで、そんなに生徒達の情報には詳しくないんです。ただ、わたしの授業中後ろの方で遊んでいたのに気づいただけです」

「なるほどねえ」

刑事は信用してなさそうな顔で手帳を閉じた。

「また何か気づいたことがあれば、わたしか、山本に電話をしてください。名刺に携帯番号を記入しておきます」

「どうも、……」

彼らが帰った後、咲子は体中の力が抜けた思いがした。もう一度、熱いシャワーを浴びたい、そんな気分だったが、今日は午前中、必須科目の講義があったので、戸締まりをして急いで駅へと向かった。

十二時半、大学生協に併設されているカフェテリアで昼食を取りながら、咲子は友人の近藤朋香に文句をたれていた。普段は無口で引っ込み思案な方で、友人の数も少なく、朋香が唯一、中等部時代からの友人だった。彼女も咲子に似て、引っ込み思案なところがあつたのも教室の隅っこにいるという点でお互いに惹かれるものがあったのかも知れない。

「それで、その生徒さんってどんな子だったの？」

「実はよく知らなかったりする」

「えー？ 咲子ってば、アルバイトとはいえ、担任だったんでしょ

う？」

「だって、しょうがないよ。やる気のある子は、前の席でちゃんと質問とかしてくるけど、やる気のない子は、後ろの席で遊んでいるだけなんだもん。その中の一グループと、他の先生に教えてもらうまでは存在すら知らなかったよ」

「ふーん。じゃあ、あたしたちも教授たちにそう思われているかもよ」

朋香の指摘に咲子はぎくりとした。確かに、積極的に質問なんか考えたこともなかったし、講義は一番後ろの席辺りで受け、教授と目を合わさないようにじっとしていた。もしも咲子が下校途中に誰かに拉致されても、知らないねえと言われてしまつとなると悲しいものがあつた。

風がぴゅーっと吹き高木の葉ががさがたと揺れた。秋も終わりに近づき、青い空も何となく寒々しい。こんな季節に誘拐されて、どこか倉庫にでも閉じこめられているかと思うと、やはり、生徒の身が案じられる。

「あのさ、朋香、コツクリさんってやったことある？」

「何それ？」

「知らなきゃいいんだけど、ほら、平仮名や数字を書いた紙に、十円玉を乗せて、その上に参加者が指を置いて念じるの。誰か好きな人の名前とか、そうすると、十円玉が動いて、教えてくれるの」

「ああ、ウイジャ盤ね、日本にもあつたんだね」

「ウイジャ盤？」

ウイジャ盤とは木の板にアルファベットと数字が書かれ、穴の開いた木の用具に参加者が指を乗せて移動させ、穴に現れる文字を読み取ってご託宣とするコツクリさんの西洋版のことであると朋香の話から想像できた。

「朋香、海外帰国子女だったっけ？」

「小学校はアメリカの私立に通ってたわ。お父さんがメーカーの営

業マンだったから六年生までシアトルにいたの。教育方針で何故か日本人学校には行かずに現地の学校だったの」

「それで、帰ってから、女子大付属の中等部にしたの？」

「ミツシヨン系だったからかな。自分でも深く考えたことなかったな」

朋香はそう言い、きゃはと笑い声を上げた。

彼女の説明では、向こうにもウィジャ盤というコックリさんのような遊びがあるらしい。もっとも何かの霊が降りてくるという「噂」レベルのものがあるのは一致していた。

「それでさ、その子たち、わたしの授業中にコックリさんをやった後、紙もコインもそのままにして帰ったらしいの。それっていけないことよね」

「そうよね、降りてきた霊にお礼を述べて、お帰り頂いてそれから終わりにしないと災いをもたらすこともあるとかいうからね。でも、……刑事さんにそんなことというと、頭がおかしいんじゃないかと思われちゃうよ」

朋香はくりっとした目をきよろきよろさせながら、咲子をからかうようなまなざしで見つめた。

「わかってるわよ」

咲子は半分残ったランチを残すことにし、ホットココアを口にした。

普段から食が細い方だが、昨日の今日で、すっかり食欲がなくなっってしまった。

靈感のことは朋香にも話したことはなく、従って、コックリさんの十円玉を触ったときに感じた、悪意のこもった霊の存在のことは話せない。

「何事もなくみつければいいね」

「そうだね」

朋香のトレイを見ると、キノコのソースのハンバーグのキノコの部分だけ残してきれいに食べられていた。結構好き嫌いの多い子だ。

それにしても、どこに行ったのだろう？ 咲子はココアの馥郁とした香りを鼻腔一杯に感じながら考えた。仲良し三人組であるのは、多分間違いはないはずだ。どうして、中嶋の母親のクルマに同乗しなかったのだろう。疑問点はいっぱいあった。

2・応援派遣（前書き）

2	2	2	2	2
0	0	0	0	0
1	1	1	1	1
1	1	1	1	1
・	・	・	・	・
0	0	0	0	0
9	9	9	9	8
・	・	・	・	・
0	0	0	0	3
3	3	2	1	1
第5節掲載	第4節掲載	第3節掲載	第2節掲載	第1節掲載

## 2・応援派遣

—

十月二十日、中原高史は妹のコツクリさんの話を思い出しながら、職場に顔を出した。

「おはようございます」

「おう」

編集長の森野が野太い声で返事した。彼がここ「芸術写真」の昔からの主であり、かたくなまでにオカルト路線を守っている主流派であった。何があっても動じることなく、タバコの煙を噴かしながら、自分の立場を頑として譲らない。

ふと、見ると佐伯静香が高史より先に入社していた。いつもなら、自動車通勤である彼女は渋滞をさけ、フレックスタイム制度を活用して九時半に出てくる。

彼女は高史の姿を認めると嬉しそうに手を振った。

「これってば、昨日の咲子ちゃんの話じゃない？」

朝刊紙の三面に女子中学生失踪事件の第一報が出ていた。まさか、コツクリさんの祟りで本当に人が一人失踪してしまうことなんてあるのだろうか、少しだけ興味を持った。

「ねえ、本当にこんなことってあるのかな？」

「さあ、……もし、本当に失踪したとしても、単なる偶然だと思えますよ」

「いや、絶対にコツクリさんの祟りよ。間違いないわ」

静香の目は輝いていた。こういうときの彼女は魅力的だった。

「何の話だ？」

気がつくとも森野が二人の後ろに立っていた。手には封筒を一枚持っている。

「いや、ごっくりさんをして、呼び出した霊を怒らせてしまって、そうしたら、本当に失踪してしまっただんですよ」

普段なら、すぐに調べて記事にしるというはずの森野は静香を無視した。

「中原、少し話がある」

そう言い、部屋の隅っこに置いてあるソファのところまで連れて行った。

「うちの、売り上げが厳しいのは知っているな？」

「え、あ、はあ」

「しばらく、経済一部の経済ジャーナルで応援派遣が欲しいそうだ。お前行ってくれるか？ 元いた場所だし、適任だろう。半日だけだ」「はあ？」

ライオン社の中でも主力誌である経済ジャーナルなら、応募者が多そうだが、それでも、誰でもいいわけでもないらしい。声がかかったと言うことは高史もそれなりに評価されているということのようだ。しかし、元いた職場というのが少し引掛かった。

「君なら、資料の配置や何もかも、一から教える必要がないだろうというのが向こうの言い分だ。君の給料の半分を経済一部で見てもらえるということだ」

少しがっかりの言い方だが、何にしても管理職である編集長の命令なら、行かないわけにもいかない。素直に、わかりましたと返事した。早速今日の午後からの作業開始である。

午前十時になり、来月号の記事の期限が押していらいらしている静香が高史を呼びに来た。

「半日派遣だと言っても、半分はうちの人間なんだからね」

厳しいことを言う。

「わかってますよ。それで、コックリさんの記事でやりますか？」

「うーん、少し迷っているのよ。というのはね、……」

静香の説明によると、インターネットで少し調べたのだが、コック



クリさんの歴史というのが意外と新しく、江戸時代末期にアメリカ船員により伝えられたテーブル回し（テーブルターニング）というのが発祥で、文字を当てていく現代の方式のものは一九七〇年代に大流行した時代にどこからか出てきたのが最初だという。

そんなに歴史も伝統もないとなると、呼び出す霊というのも眉唾っぽい。

「眉唾って、……静香さんが言い出したんじゃないですか」

「でね、その日本に伝わる前はっていうと、アメリカで、その前はヨーロッパの中世までさかのぼれるらしいの」

「ふうん、なるほどねえ」

高史は相づちを打ちつつも、意識はすでに午後から赴かねばならない三階の経済ジャーナル編集部のこと一杯になっていた。

「ちよっと、聞いているの？」

「あ、ああ、……」

「とにかく、中世ヨーロッパはいいにしても、日本に伝わってからのことくらいは調べましょう。いいわね」

「おどろおどろしく？」

高史が茶化すと、静香はむっとした顔になり、ばしっと背中をたたいた。

## 二

昼食を近くのコンビニエンスストアで買って来た弁当ですませた高史は、午後一時になる前に、三階にある経済ジャーナル編集部に顔を出した。ここは、ライオン社屈指の売り上げを誇る経済誌を生み出している中枢部分であり、高史も左遷される前はここに三年ほどいたことがあった。懐かしさ半分、恨みも半分である。

「よお、久しぶりだな」

知っている顔もいた。元の上司である丸山育夫だった。当時は主任だったが、今は編集長になっている。もつとも、会社の出入り口に近い、一階にある芸術写真にいます、あらゆる部署の人間とはしよつちゆう顔を合わせるのだが、この人間は用のない人には挨拶をしないという冷めた風潮があった。だから、丸山も高史が応援派遣でこつちに来たのではないと挨拶をしても無視されていたところだ。

「このたびは、こちらでお世話になることになりました。よろしくお願ひします」

「いやいや、こちらこそ、忙しいのに無理を言つて手伝つてもらふことになつて悪いね。他の人だと、それこそ、一から教えなくてはならんのだが、君ならある程度使えるから、こつちも期待しているよ」

丸山は本心がどうかしらないが、そう言つて高史を歓迎してくれた。

やがて、一時ちようどになり、がやがやと仕事の始まる音がしてきた。特に決まつた始業時間というのはなかつたが、ほとんどのグループは午後一時に昼礼をしていた。昼一番なら、フレックス出勤者もミーティングに参加出来るからである。

丸山は高史を連れて、一人の主任の下に案内した。

「こちら、北米担当の杉山君だ。彼の下でしばらく業務を手伝つてもらふ」

「よろしく、杉山陸雄です」

彼は贅肉のない体格に浅黒く日に焼けた肌をしていた。おそらくスポーツマンに違いないと思つた。高史がいたとき、彼は他のグループの主任をしていたように記憶している。

「お役に立てるかどうかわかりませんが、よろしくお願ひします」

高史は慇懃に一礼した。

席は杉山の向かいで、すでに、資料の詰まつたキングファイルが山積みされていた。これをどうすればよいかなど、いちいち聞か

くていいのが、高史を呼んだ理由だったのだろう。とにかく膨大な量だった。

呆然としてキングファイルをばらばらとめくっていると、杉山がすぐに戻ってきた。

「今やっている作業をかいつまんで説明しよう。ちょっと来てくれ」「はい」

杉山は薄い紙ファイルを手にして、グループのデスクの島の隣にある会議テーブルに高史を連れて行った。

「アメリカに拠点を置く投資銀行が、アジアから資金を調達しようとしている。その全貌を間接的資料から明らかにしていけたらと、思うんだ」

彼は、簡単そうに言ったのけた。

「投資ファンドといますと？」

「まだよくわかっていない。アジアで言うと、シンガポールに本社があるルネサスコ ポレーションがそのうちのひとつだと言うことが、今のところ唯一の手懸かりなんだ。ここを経由してアメリカ国内に投資資金が流れ込んでいる」

「はあー」

どうやら、あの資料の山はその事実をつきとめるための証拠らしい。高史はこうした地道な作業はあまり得意ではない。わからないふりをして逃げ出したかった。

「資料は世界中の通信社からの情報と、当社の独自取材でつきとめたものだ。君は英語は得意だったね？」

「あ、いや」

「まあ、とにかく一度、今ある資料に目を通しておいでくれ。ごくわずかな一行記事が大きな動きの予兆を示す場合が多々あるのがこの世界だ。頑張ってくれ」

「はあ」

高史は、杉山の手元にあるファイルを見、ほとんどが英語による通信社の記事の切り抜きであることに目がくらんだ。英語など、大

学の教養部時代からタッチしたことはなく、入社時に強制的に受験させられた英検やTOEICの成績も散々だった。

芸術写真の自分の机の引き出しに、広辞苑の機能しか使っていない電子辞書があるのを思い出した。確か英和辞典もついていたはずだった。もつとも、ビジネス英語まではカバーしていないかも知れないから、足りなければ誰かに借りなければならぬ。

### 三

「きゃははははは」

静香は高史のぼやく声を聞き、高らかな笑い声を上げた。「コックリさんの次は投資ファンドで英語漬けって、大変ね。中原君も」  
「笑わないで下さいよ」

額の汗を拭き、コーヒーでも飲もうと、芸術写真編集部の流しの横に置いてあるコーヒーメーカーの所まで歩いていった。ポットからマグカップに注ぐと炒りたてのコーヒーのいい香りがした。時計を見ると、六時半だった。午後一時からほぼ五時間英単語とにらめっこしていた計算になる。だが、ようやく、大学時代の勘が取り戻せるまでになつていた。

「それで、その、……ルネッサンスだっけ、何をしているの？」

「ルネサスコーポレーションです。主にアジアの投資家のコンサルティング業務をしていて、どこにどれだけだけ投資したら有利かとかいう情報をアドバイスし、手数料をとる商売をしている会社のようです」

「へえ、集めるってどのくらい？」

「ここ数ヶ月でざつと百億ドル単位の金が動いていましたよ。通信社の発表だけでそれだから、実際に動いている金はもっと大きいんじゃないかな」

「百億ドル？ えーと、一兆円！」

静香は素っ頓狂な声を上げた。無理もない。

「それが、あるアメリカのベンチャービジネスだか何だかよくわからない組織に流れ込んでいます。さらに調べることが増えましてよ」

「へえ、すごいんだ」

金額には驚いた静香だったが、ベンチャービジネスそのものには気を留めなかった。

「それで、静香さんの方は、コックリさんの調べはつきまじったか？」

「ああ、……気にしてくれてたんだ」

「半分は芸術写真の記者だと言っていたのは静香さんではないですか」

「うん、……あの行方不明になった生徒さんの学校がわかったわ。

杉並区立善福寺中学校三年一組飯星遥香十五歳。親は鉄工所を経営しているわ」

「よくそこまで、あ、咲子に聞いたんですか？」

「そうよ」

高史としては少し不機嫌にならざるを得なかった。ただでさえ、妹がこないかがわしいといっってはなんだが、オカルト雑誌にかかわるのを嫌っていた。その上、記事の作成に妹を情報源にするなどあり得ないことだったのだ。

「アメリカではウィジャ盤という同じような遊びがあるそうよ」

「……それで、静香さんは、やはりコックリさんと女子中学生の失踪とが結びついていると考えている、いや、その線で記事にしようと考えているわけですね」

「そうよ」

静香の話では塾にまでこっそり忍び込んだそうだが、残念ながらコックリさんに使った方陣や十円玉はすでに掃除されてなくなっていたと言ったことだった。英進塾では午前中の九時から十一時までの間に日常清掃の委託をされていて、掃除のおばさんが毎日きれいに掃除をしているそうだった。

「では、仲良し三人組の残りの生徒にも話を聞くんですか？」

「うん、そのつもり」

静香はすました顔でそう宣言した。高史としては妹を出来る限り巻き込みたくない。

「先方の迷惑にならないように、くれぐれも気をつけてくださいよ」

「失礼ね。こっちも記者ですから」

そう言っつて、自分の席にコーヒを持って行ってしまった。

#### 四

水曜日の午後八時四十分のチャイムが鳴った後、咲子は中嶋裕美果と和田加奈子呼び止めた。どちらも、背丈は高く、身長百五十センチの咲子より十センチばかり大きい。少し圧倒されながらも彼女たちに声を掛けた。

「飯星さんのことで少し気になることがあるの。あなたたち、コックリさんをしてたわよね？」

「さあ？」

中嶋はとぼけた。和田は目をそらした。

「本当に気になるから聞いているの。悪い霊を呼び出したら、本当に祟ることってあるんだから。あんたたち後始末を何にもしなかったでしょう？ この間の国語の授業中にこっそりやってたんでしょう？」

「本当ですか？」

和田が口を割った。中嶋は何も言っつたと目で合図しているが、やはり、不安げな面持ちは隠せない。

「話してみて、ね」

「さあね、それに、遥香がいなくなったのもあたしたちのせいじゃないし」

そう、吐き捨てるような台詞を吐いた。そして、咲子を威圧する

ように一歩前に出、そのはずみに机がばたと倒れた。あまりの勢いに小柄な咲子はひるんでしまい、その隙に彼女たちは行ってしまった。咲子もびっくりしたが、彼女たちも自身の振る舞いに動揺していたようだった。和田加奈子は教室を出るまで何度も後ろを振り返った。

後に残ったのは咲子と、もう一人の男子生徒だけになった。

「あ、ごめんね、あなたは早く帰りなさい」

そう、声を掛けたが、男子生徒はじつとつつむき、何か迷っているようだった。

「知ってる。おれ」

「え？ 何を？」

普段目立たない生徒だった。しかも、あまりやる気のないグループのようで席も後ろの前列目だ。

「あいつらがコックリさんやって、とんでもない結果になったこと」

「知っているの？」

「教えてやろうか？」

「あ、うん。教えて」

「昨日、あいつら三人が授業中にコックリさんをやって、飯星が中嶋の好きなやつの名前を当てさせたんだ」

当てさせたというのは、降りてきた霊に、十円玉の位置で啓示させたということだろう。

「そして、……結末は実らないと出た。そうしたら、機嫌の悪くなつた中嶋は飯星の死ぬ日を当てさせた」

「まさか？」

「それが昨日の日付だった。それから、急にあいつら慌てだして、呼び出したコックリさんを放置したまま帰っちゃった。だから、飯星は中嶋と別々に帰ったんだろう」

「あなた、それずつと見てたの？」

「ずつとってわけじゃないさ。でも、暇な授業で漫画も読み終わつたし、他にすることなかったしな」

思わず、高校受験はどうするつもりなのと言おうとしてやめた。せつかくの情報源だ。

「呼び出した霊の名前とか言っただけでなかった？」

これはコックリさんの最初に質問する場面が多い。

「アヤノ、とか、サヤカ、とか、そんな女の名前だった気がする。霊って悪さするのか？」

「呼び出した霊の種類にもよるわ。でも、あなたは拘わらない方がいいわ」

「何だよ、せつかく教えてやったのに」

彼は軽く鞆の先を咲子の腰にぶつけて出て行った。その瞬間、彼の飯星遥香への好意めいた感情が伝わってきた。彼、彼女のことが好きだったんだ。だから、ずっと、同じ塾に通い同じクラスで興味のない授業を受けていたんだ。

咲子は急いで教卓のクラス名簿を調べた。

男の子の名前は青野裕ゆたか、荻窪中学の三年生で飯星とは違う学校の生徒だった。多分、一年生くらいの時に知り合い、彼女目当てで辞めずに続けているという感じがした。

念のため、クラス名簿でアヤノ、サヤカという名前を探してみた。今時のはやりの名前のように、該当する生徒は何人かいるが、生きている人が出てきたりはしないので、あまり参考にはならないだろう。でも、忘れないように手帳にメモしておいた。

## 五

飯星啓子は夫と中々連絡が取れないことにいらいらしていた。

一昨日の夜、娘の遥香と連絡が取れなくなり、警察に捜索願を出す羽目になってしまったのだが、本当にそれでよかったのか、もし、誘拐だとして犯人から接触がある前に警察に全てを話してしまっただけよかったのか迷いに迷っていた。



夫の丈太郎は今、ベトナムのホー・チ・ミン市に会社が借りているアパートに詰めている。携帯電話が通じるはずなのだが、いつもベトナム人の従業員が代わりに出てきては話がちつとも通じず、切られてしまう。

十年前に飯星鉄工所は大田区にある工場を縮小し、営業所機能だけ残し、ホー・チ・ミン市郊外の田畑を買い上げ、百ヘクタールほどの大規模な敷地に工場を建設していた。従業員のほとんどはこちらに移動し、会社で借り上げてあるアパートに住まわせている。もっとも、そこにいる日本人従業員は三十人ほどで、全体の一角に過ぎない。現場作業をする人員は現地でベトナム人を雇用していた。

ぶるるる。

部屋の電話が鳴る度に、啓子は心臓がきゅっと締め付けられるような思いがした。

今のところ、娘の行方に関するものではなく、くだらないセールスの電話ばかりだった。早く切ろうと思っても、そう言うときに限って中々放してはくれない。

無視していても、電話は鳴りやまなかった。

「もしもし、飯星でございますが」

受話器を持つ右手がぶるぶると震えているのが自分でもわかった。

「捜査一課の亀田です。その後、お嬢さんとはまだ連絡が取れませんか？」

「ああ、刑事さん」

夫の父が都議会議員の支援者であるので、割と警察がこまめに動いてくれていると思い、それだけは少し安心していた。

「もう、まるまる四十八時間が経過します。誘拐にしろ家出にせよ、そろそろ何らかの接触がある頃合いです。もし、……もしお許しいただけるなら、一度お嬢さんの部屋を調べさせていただきたいのですが」

「え？」

「これは、念のためです。もし何らかの事件に巻き込まれていた場

合、何かの端緒を残している場合が多いのです」

「はあ」

こちらは、被害者ではないのかという意識が強かった。部屋を刑事に調べられるのは、犯罪者側の立場だという認識だった。

刑事は近くから携帯電話で掛けてきたらしく、了解するとすぐに訪れた。

「どうもすみません。クルマで来ると目立つので近くに置いて歩いて来ました。我々が来たことを外部から感づかれないよう、カーテンを引いておいてください」

上がり込んだのは、最初に対応してくれた、亀田刑事と山本という刑事だった。

遥香は一人娘で、二階の南側に部屋があった。

中学生の娘の部屋に刑事を入れることに抵抗はあったが、彼女の安全には代えられない。

「どうぞ」

窓に面した窓に、勉強机があり反対の壁側にベッドが置いてあった。手前にはクローゼットと鏡台があり、クローゼットには中学校の制服のブレザーとスカートが掛かっていた。

亀田は慣れた手つきで白手袋をして机の上から順に調べ始めた。

ポストカードや封筒類、学校のテストやプリント、連絡書の類。ざっと見て、手がかりがないとわかると、啓子の方をちらりと見て、引き出しを開ける許可を求めた。

「ちょっとお待ち下さい」

多分、大したものが入っていないと思うのだが、先に中を確認した。

そして、一番上の引き出しには鍵が掛かっていた。

「開けてもよろしいか？」

亀田は少し遠慮がちに尋ねた。

「は、……はい」

開けていいものかどうか、もし開けるにしても母親である自分が先に見てからでないと、もし、人に見せるべきものでないものまで人目にさらすのは忍びない。啓子はその場に硬直したまま数秒が過ぎた。

亀田もどうしたものか、躊躇したまま突っ立っている。もう一人の刑事は相変わらず、本棚の本の間に何か挟んでいないかなどを調べ回っていた。

「GPSの反応は四十八時間前に止まってしまっていて他に手がかりがないですよ。いや、むしろ、何らかの事件に巻き込まれたと見た方が確かでしょう」

「それほどおっしゃるなら」

とうとう、刑事の言い分に負けてしまい、首を縦に振った。

亀田は背広のポケットから慣れた手つきで万能ナイフを取り出し、マイナドライバーを引き出した。そして、鍵穴に突っ込んでこじった。もちろん簡単に解錠できるような代物ではない。彼も四苦八苦しただげく、がしやりと開いたのは十五分ほどたってからだ。引き出しの中には、日記帳や文房具、便せんなどが雑多に入っていた。刑事はまっすぐに日記帳に手を伸ばした。あっと、啓子が小さく叫んだ。

「先にご覧になって下さい」

「あ、ありがとうございます」

啓子は渡された遥香の日記帳を繰った。三年生になってから一昨日までの分が書かれていた。好きな男の子の一日の動きが細かく書き込まれているのが微笑ましい。だが、これは事件とは無関係だろう。大まかにページを進めた。

今月になってから、不審な男につけられてるといような記述が一カ所だけあった。

「刑事さん、これ」

「見てもいいですね」

「ええ」

丸いまんがみたいな文字だった。「最近変なヤツにつけられた」と、一力所だけあった。

「ストーリーみたいなき感じでしょうか？ ご家庭では何かおっしゃっていましたか？」

「そういえば、……」

確かに、家の玄関まで走って入ってきて、気味が悪い思いをしたとか聞いたことがあった。でも、それは一回だけですぐに止まったみたいだった。しかし、母親としては、それはそれだけですんだことと、軽くかわしてしまったことが悔やまれた。啓子は普段、家業である飯屋鉄工所株式会社の専務取締役として、夫の仕事の日本での営業業務を手伝っていて、忙しいときには娘のことは放つたらかしくなりがちだった。

「おい、山本は付近の家に聞き込みをしてくれ。十月初旬から一昨日までに不審者がこの家を監視していなかったかどうかだ」

「わかりました」

若い刑事はすぐに部屋を飛び出し、身軽に階段をとんとんと飛ばし降りをして降りていった。

「それで、奥さん、電話などには不審な点はありませんでしたか？」

「中学生になつて携帯電話を買い与えてから、娘宛の電話は本人しか出ないようになりましたから、わたしにはわかりかねます」

啓子は机の上の携帯電話の充電スタンドを見つめながら言った。

娘がいたときにはずっとメールばかりしていたものだった。

「刑事さん、GPSの反応がないということは、壊されたんですか？」

「電波の届かないところにいる可能性は考えられますが、この四十八時間一切反応がないことからその可能性もあると思います」

しばらくして、若い刑事が戻ってきた。

「亀田さん。向かいのマンションの二階の住民なんですが、ここ一ヶ月以上、八時頃になると不審な男がタバコをすいながら誰かを待

ち伏せているような所をみたことがあるという情報を寄せてくれました」

彼は亀田に手帳を見せながら報告した。手帳には人相風体のイラストもあったようだ。

「それで、その男は一昨日からは姿が見えないんだな？」

「ここ二、三日は見ていないそうです。被疑者と見ていいでしょうか」

「それが確かな情報ならな、誤認逮捕にならないよう注意して所轄に連絡しよう」

「はい」

きびきびした動きの刑事たちを見て、啓子は少し心強くなった。何とかいい方向に解決してくれるのではないか、そんな気がした。夫とは、関係がすっかり冷え切っており、本当に株式会社の社長と専務の関係に等しくなってしまうている。娘の遥香だけが唯一の絆となっているのだ。

3・南方展開（前書き）

2011・10・03	第2節一部修正
2011・09・05	第2、3節掲載
2011・09・04	第1節掲載

### 3・南方展開

—

朝七時前、咲子はコーヒーを沸かしながら、朝の出勤準備をしている兄を待っていた。台所テーブルの上には、昨日の夜遅くまで調べ物をしていたらしく、透明のクリアファイルに綴じ込まれた英文の記事の数々がちりばめられていた。

咲子は国文科だが、英語は英検二級を持っている腕前だ。こんな記事の内容くらいは読み取れた。

「お兄ちゃん。飯星鉄工所って知っているの？」

「ああん？」

まだ、寝起きの不機嫌そうな顔で返事した。知っているともいえないとも言っ顔だった。

「このファイルの記事の中に、ベトナムに進出した日本企業として注目されてるよ」

「ああ、これは見ちゃいかん。オカルトも駄目だがな」

「でも、見ちゃったんだもん。それに、この間行方不明になった生徒さん、ここの社長の娘さんなんだよ」

「ちっ」

兄は軽く舌打ちした。重要な仕事の資料を台所のテーブルなんかに出しっぱなしにしたことを後悔してるようだった。

「教えてよ、ねえ」

兄はそれには答えず、咲子が用意したマグカップのコーヒーを一口飲んだ。そして、ため息をついた。

「元々は、今の社長のお父さんの飯星健太郎氏が昭和の高度成長期に始めた小さな鉄工所だ。それが、今の社長の丈太郎氏に引き継がれ、大きくなつた。折しも、バブル崩壊後の景気低迷時代に、製造

コストの低い東南アジアに拠点を移している。それが今の株式会社飯星鉄工所だ。リニアモーターカーの線路用コイル部品の製造でシェアはトップクラスだ」

「それってベトナムにあるの？」

「工場はベトナムのホー・チ・ミン市にある。日本では大田区に本社兼営業所がある」

「え、じゃあ？」

「日本にも営業所があり、従業員がいて、労働組合だってちゃんとある。立派な会社だ」

「じゃあ、遥香ちゃんが誘拐されたとしたら、身代金目的と考えていいのね？」

咲子は青野が言っていた、コックリさんによる死の予告宣告のことが頭の中にあつた。彼女の実家が裕福で身代金目的で誘拐されたのだとしたら、その身に危害が及ぶ可能性は低いと考えられた。

「待て、待て、株式会社の資産は個人資産じゃないぞ。いくら社長だからと言って、自由に出来る物じゃない。むしろ株主の資産に目を向けるべきだ。……主要株主は大空銀行と東海リニア鉄道で、飯星氏自身の資産はどれくらいあるのか知らないが、普通のお金持ちに毛が生えた程度だと思っぞ」

「そうなんだ。でも、だったら、どうして彼女が誘拐されたの？」

「そんなこと、俺は知らない。むしろ、恋愛がらみのストーリーカーじゃないのか」

兄貴はそう言い捨てて、トーストを一気にほおばり、さめたコーヒードで流し込んでむせた。そして、目の前のファイル類を黒の革靴に詰め込み、出勤の準備をした。いつもは七時半に家を出る。

そして、今日も時間通り玄関を出て行った。咲子はその後ろ姿を見送った。

どうして、飯星遥香を狙ったのだろう？

その理由が金銭的な物でないとしたら、兄の言っとおり恋愛がら



み、いや、怨恨と言うことも考えられる。彼女は大人びていて、きれいな顔をしていた。コックリさんの死の予告を信じるわけではなかったが、嫌な予感はしていたのだ。それに何より自分の靈感に、少しだけがある意味自信を持っていた。あとき触れた十円玉からは確かに不吉なイメージが伝わってきたのだ。ならば、彼女は今、どこで何をしているのだろうか。

咲子は、大学の講義をサボり、午前中、飯星の母親に連絡を取った。

相変わらず、会社の仕事の方は忙しいのだが、娘の失踪で今はそれどころではなくなっているという。

十時の約束で、荻窪にある飯星の自宅にお邪魔した。

土地は八十坪ほどで、洋風の外観で咲子の家の倍ほどもありそうな大きな家だった。兄は裕福とは限らないと言っていたが、家だけ見ると十分裕福そうに見える。チャイムを鳴らすと、母親が玄関まで出てきてくれた。

「まあ、先生、どうぞお上がりになってください」

「失礼します。お嬢さんの行方はまだわからないのですか？」

「ええ、……何事もなければいいのですが」

母親はそういい、目頭をハンカチで押さえた。

咲子は庭に面した十二畳ほどの応接間に通され、ソファに腰掛けた。しばらくすると、母親が紅茶を入れて持ってきてくれた。咲子はお礼を述べた。

「あの、……少し聞いたんですが、飯星さんの会社はベトナムに進出したそうですね？」

「ええ、経費節減のために、と、主人が十年前に計画して移転したんです」

「従業員の方が大勢いたと思うんですけど、どうなされたのですか？」

「ほとんどそのまま、製造指導員という形で、現地工場に配置転換

しています。もつとも、小さな組合が、先代の時からあって、少数ながら抵抗している人がいますけど」

「小さな組合？」

「労組です」

「ああ、……なるほど」

たとえ小さな組合でも、労働三権が行使できる。配置移転など、個人的な労働条件の変化に対しては抵抗することが考えられた。「みなさん、ベトナムに移住することに対しては抵抗がなかったんですか？」

「いいえ、かなりの従業員がやめました。三割ほどでしょうか」

それでも、ベトナムには三十人ほどの日本人スタッフがいると兄は言っていた。元々の飯星鉄工には五十人ほどの規模だと言うことがわかる。

「ベトナムでは三百人ほどの規模でお仕事をなさっていると聞いたのですか」

「はい、ほとんどは現地雇用の人間です」

母親はそう言ったが、今は仕事のことにはあまり関心が向いていないようだった。咲子の本題もベトナムではない。「実は、景気低迷時に製造コストを下げるために海外に拠点を移す話が流行りましたよね。うちもその一例なんです。わたしは、あんまり乗り気じゃなくて。でしょう？　いくら会社の売り上げが立って利益を上げても、ベトナム政府に税金が入りますが、日本には何の得にもなりませんよね」

「ええ」

咲子は、この母親が意外と経済に詳しいことに驚くと共に、会社の経営に深く関わっていることを認識した。「それで、お嬢さんの進路なんですけど、来年受験することになってましたよね？」

「それも、心配の種なんです」

「あの、お嬢さんの机とか見せてもらってもいいですか？」

そう言うと、母親の眉がぴくりと動いた。

「警察の方が、一度調べています。不審者につけられていたことがあったようです」

ぴしゃりとした言い方だった。

「不審者？ 知っている人間ですか？」

「いいえ」

「そうですか」

咲子が出された紅茶のカップに手を触れた。そのときに母親の思念が指先を通して伝わって来、急に彼女が不機嫌になったのを感じ取った。

もしかしたら、何か触れられたくないことがあるのかも知れないと、思った。

「……ストーカー、ですか？」

「は？」

咲子が無気なく口にした言葉に母親は過剰に反応した。

「考えたくもないのですが、一度だけそういった気味の悪い目にあつたことがあるようです」

「それは、いつ頃のことですか？」

「警察の人の言うことには、この一ヶ月の間、不審人物が近所に来たそうです」

やはり、身代金目的ではなくストーカー被害だったのかと、思う反面、少しだけ腑に落ちなかった。コックリさんの死の予告をした時間帯には、まだ、犯人と接触していなかったからだ。あの時間、ストーカーは塾の外か、この家の付近で徘徊していたことになる。コックリさんには未来予知が出来るのかそれともただなのでたらめを示したのか気になった。

でも、もしかしたら、本当に、彼女に危機が訪れたのだろうか？

## 二

十月の長雨が続いた一週間後、テレビニュースを見ていた咲子は

我が目と耳を疑った。

荒川の河川敷で飯星遥香の死体が見つかった。遺体にはロープのようなものが絡まっていて、石にくくりつけられて川に沈められたものが増水した流れの中で打ち上げられたものと推定された。遺体の損傷はひどく、司法解剖の歯形照合によって身元が判明したらしい。

「おいおい、これお前の所の生徒じゃないのか？」

兄は不機嫌な顔で、食後のお茶を飲んでいる咲子に言った。

「うそ、……でしょ」

嘘であつて欲しかった。だが、アナウンサーの断定的なニュースは警察の捜査のしつかりとした裏付けを感じさせた。もはや、一週間前から失踪していた飯星遥香本人に間違いはなかった。

咲子は塾と飯星啓子に電話した。

母親に聞いたところ、まだ、司法解剖や検査でしばらくの間、遺体は調べられるらしい。

それだけ聞き、飯星邸に飛んでいった。

家全体が静まりかえっていた。あれほど立派だった門扉も、洋風のおしゃれな家屋もかわいい庭も、遥香が死んだ今となっては、全てが空々しかった。

咲子がチャイムを鳴らすと、母親の啓子が出てきたが、もはや声にも生気がなく、はいつてらしてと答えるのが精一杯だった。咲子が門扉の頑丈な取っ手に手を掛けたとき、遥香のさまよう靈気を感じた。彼女はこの家に帰りたがっている。かわいそうにという感傷的な気分が心の大部分を占めていた。

「どうぞ」

啓子がスリッパを出してくれた。ずっと電話で朗報が届くのを待っていたかのように、電話台の前には椅子が置かれ、その上にはマットが敷かれていた。

「掛かってきたのは、警察の方ばかりですの」

そつ心細げにつぶやいた。

「そうですね」

咲子も遥香がもう帰ってこないとわかって以上、掛けるべき言葉が見つからなかった。「このたびは、大変なことになり、ご愁傷様でございました」

取って付けたように、口にしてしまった。

母親は一瞬、何を言われたのかわからず、ぽかんとし、そして三秒後、ああ、と言う声を出し、「どうも恐れ入ります」と返事した。

啓子の説明では、死亡時期は失踪直後のことだったらしい。コックリさんの予言通りだ。

「誘拐されてすぐに殺され、川に遺棄されたと説明を受けています」

「犯人の目的は何だったんでしょう？」

「警察ではストーカー説が強いみたいです。……ただ、……」

「ただ？」

「わたくしとしては、会社の経営を巡るトラブルにあの子を巻き込んでしまったんじゃないかと、それだけが悔やんでも悔やみきれなくて」

咲子はベトナムの工場に行かずに辞めてしまった三割方の従業員というのを思い出した。会社の処遇に不満を持ち、遥香を拉致し、殺めてしまった可能性も十分に考えられる。

「でも、……」やはり、掛けるべき言葉が見つからない。

咲子を前にして啓子は遥香の思い出話を延々と続けた。

昔から聞き分けがよくて、いい子で、……そんな話から事件の糸口など見つかるはずはなかった。

夕方になり、警視庁捜査一課の刑事が犯人を断定したらしいと言った情報が飛び込んできた。二十代の男の写真を、向かいのマンションの二階の住民に見せたというのだ。

「髪を金色に染めて、にやけたヤツでしたよ」

その家のご主人は六十代半ばの元会社員だ。啓子とは近所づきあいがあるらしく、わざわざ親切に教えに来てくれた。咲子はそれを聞き、いつだったか、塾の前まで白いセダンの改造車で西海先生たちを迎えに来た神谷という大学生を思い出した。

しかし、神谷ではなさそうだった。ご主人から聞く彼の風体は違ったものだったからだ。

「その、ベトナム移転反対派の中にそういった人はいなかったんですか？」

啓子の方をちらりと見たが、彼女も心当たりはなさそうだった。

「会社の方針に反対なこと以外は至ってまじめな人ばかりでしたから」

「そうですか。じゃあ、警察が言うとおりストーカーだったということでしょうか」

「多分、そうだと思います」

そう言いながら、とうとう泣き崩れた。咲子は肩を抱きかかえた肩に触れたとき、彼女の思念めいたものが伝わった。不安。

ストーカー男はよこしまな心で娘を拉致したに違いない。そうして、犯した上で殺害したのだ。大事な娘の身体が汚された。そうした不穏当な気持ち伝わって来、また、咲子も同様の心配を抱いた。思念の波長がシンクロしたとも言っのだろうか。

彼女のすらりとした白い四肢を思い浮かべた。

背が高く、細身の美少女の肉体がおぞましいストーカー男によって汚される。それを想像すると咲子にも耐え難いものがあつた。

### 三

事件の重大さの割に、容疑者はすぐに捕まった。

地元警察の聞き込みの成果もあつたのかも知れない。NHKの夜のニュースで流れているのを咲子を見た。

容疑者は帝北大学経済学部四年生、安達靖、二十二歳と報道された。黒の革ジャンを着込み、逮捕時にはそれを頭からかぶり顔を隠していた。住民の言っていた金髪ではなく、黒髪で七三に分けていた。逃亡のために黒く染め直したのかも知れなかった。それにして警察の捜査は手際がいいものだと思っただ。

警察の発表では、以前から彼女に対しストーカー行為を繰り返して、十月二十日午後八時に実際に車で拉致し、睡眠薬を飲ませて暴行しようとしたところ、アレルギー性ショック症状を起こさせ死に至らしめた。そして、犯行を隠すために、翌日の深夜に遺体をコンクリートブロックに縄で固定して、荒川に遺棄した。と、推定していた。本人は全面的に犯行を否認していた。

「おいおい、物騒な時代になったものだな」と、横でテレビをのぞいていた兄が言った。

「わたしも、……信じられない。でも、睡眠薬でショック死なんてあるの？」

「さあ、……でも、昔は自殺の手段に睡眠薬というのが定番だったな。あれは神経を麻痺させるのか、今回の場合とちよつと違つかもな」

「本当にあの人が犯人なのかな？」

咲子は何となく疑問を抱いた。金髪で黒の革ジャンの人相の悪い男なら、あの夜、西海達と一緒にいた神谷もそうだからだ。いや、中央本線沿いの町を探せばもつとたくさん該当者がいるだろう。

「何だよ、知った風なことを言っただ」

「別にそう言う訳じゃないけど」

「もう今日は遅い。俺は先に寝るけど、お前も早く寝ろよ」

「おやすみなさい」

咲子は兄の背中を見送ると、その場でテレビのスイッチを消した。夕食の後片付けはすんだから本当に後は寝るだけだったが、大学の課題があった。まあ、これはノートしたことをまとめてレポート用

紙に写すだけだから大した作業ではない。とはいえ、眠くなつてくると途端に作業効率が悪くなる。

時計を見ると十一時だった。もう一頑張りせねばと思った。

二階に上がり、机のランプを付け、ノートを引っ張り出した。国文科の講義は縦書きが多いので、咲子は罫線のない白紙のノートに縦書きして板書している。そして、何の気なしに数字と平仮名を書き込んでみた。そして、十円玉を財布の中から取りだしノートの上に置いた。

「コツクリさん、コツクリさんいらっしゃいましたら、出てきて下さいませ」

自分で唱えてみて、あつと思った。

声を出して唱和しなければならぬのだ。三人が横三列に並ぶのは可能だとしても他の生徒に気づかれずに儀式を行うのは不可能だ。現に青野裕はその横の席で彼女たちの占った内容についても細かい点にいたるまで証言してくれた。

それにしても、自分の授業中によくも、そんなことが出来たものだ。いくら板書に夢中だったとはいえ。

青野の話では中嶋裕美果が飯星遥香の死ぬ日を当てさせ、それがその当日だったという。ずばりの中したわけだった。こういうことって本当にあり得るのだろうか。もし、コツクリさんが単なる集団催眠めいた遊びだったら、死の予告までは出来ないはずだ。

咲子は、こうしたことに詳しい人を紹介してもらおうと静香にこっそりメールを送ってみた。兄が自分がオカルトめいたことに首を突っ込むのを非常に嫌っている、と知っていたからだ。

返事はすぐに返ってきた。咲子の携帯電話が鳴った。

「明日、編集部にいらっしゃいよ。契約霊能力者の先生が来るからさ。午後からだから中原君にも感づかれないよ」

「え、いいんですか？」

それに、契約霊能力者って何なのだろう？ という好奇心が先にとった。



「高山光雲先生っていうの。新宿に本部がある新興宗教の教祖なんだけど、心霊写真の鑑定や、除霊などを専門に行っているの。ほら、うちの雑誌、心霊写真コーナーがあるじゃない。その関係の仕事が多いのよ」

「へえ、すごいんですね」

「結構、危ない霊も多いからね。ほら、本物の心霊写真って霊障を起こすっていうじゃない？ 預かった編集部でも害がないように除霊してもらおうのよ」

「はあ」

得意げに話す静香の話を、話半分に聞き、コックリさんのことを尋ねた。

「コックリさん自体は扱ったことないけど、降霊術みたいなのは扱ったことあるよ。一度、先生に聞いてみたらいいよ」

「そうですか」

「こっちの場所わかるかな？」

「ええ、兄に届け物するのに何回か伺ったことがありますから」

確か、西新宿の東口から歩いて十分くらいの場所だった。ライオンビルは五階建てで、芸術写真の部署は、入って一階西側にある。「じゃあ、明日の二時頃待ってるね」

快活な声で電話を切った。

次の日、大学に午前中だけ出ると、朋香と昼食を取ったあと、そのまま校門をくぐり、電車に乗った。芸術写真編集部に着いたのは少し早めの午後一時半だった。早めに来たと思ったら、すでに、静香たちは仕事を始めていた。

「すみません、遅くなって」

「ううん、いいのよ。別に決まった時間なんてないんだから」

「そういい、目の前に積もった写真をより分けていた。」

「これって、いわゆる心霊写真なんですか？」

「そういうのもあるし、そうでないのもあるし、……まあ、うちの

カメラマンの蓮見君にいわせると全部レンズとフィルムのトリックで説明がつくってこのよ」

静香はそう言い、ちらりと向こうの方の机に座っている青年を見た。どうやら、そのカメラマンらしい。芸術写真には付録のDVDがついているらしく、そのビデオカメラを回したり、編集したりという仕事を主に彼がやっているということだった。

しばらくすると、高山光雲がやって来た。

新興宗教の教祖というから、仰々しい格好を想像していたら、案に相違して、普通のサラリーマンの様な格好をしていた。びしっとしたグレイの背広に明るい色のネクタイ、白髪に銀縁のめがね。そう、首から大きな数珠を提げていることをのぞけば普通だった。その珠は黒く深みのある艶をたたえ、宝石の様にも見えた。咲子はトルマリンを思い描いた。

「先生、いらつしやいませ」

静香が立って、奥の応接用ソファに案内した。光雲も慣れた様子でソファに腰掛けた。すぐに静香が用意していたコーヒーを出す。

光雲はそれをうまそうに一口飲んだ。

「今日は、心霊写真の他に、一つ相談に乗って頂きたいことがあるんです」

静香が神妙な面持ちで言った。光雲は静かにうなずいた。

「不幸な霊を呼び出してしまった様ですな」

そう、静かにつぶやいた。

「え？」

咲子と静香は同時に声を上げた。まだ相談もしていないのに。

「降霊術とは、……まあいいでしょう。お話して下さい」

光雲は右手を挙げて静香に発言を促した。彼女がとまどっているのが、傍目にも明らかだった。これまでとは違うのだ。

「ええと、まず、……ある中学校の生徒三人がですね、コックリさんで託宣を受けたんです。最初はそのうちの一人の好きな人の名

前。その恋の行方。でも、その結果は彼女たちの希望に添うものはありませんでした」

咲子は光雲の瞳をちらりと見た。彼は平静のままコーヒークップを手に取り、もう一口飲んだ。

「その中学生の一人が腹いせに、仲間の死ぬ日を当てさせました」

「そうして、その子達に災いが降りかかった。そうですね？」

光雲は断定した。静香はうなずくだけだった。

「霊障と考えて間違いありません」

「霊障？」

咲子は思わず口にした。

「そうです。コツクリさん自体はただの子供の遊びです。しかし、その中に霊能力を持ったものが中に入ると、一種の降霊術となり得ます。その場合どのような霊が降りてくるかにより、災いを起こしたりすることがあるので注意が必要です」

「では、彼女たちの中に霊能力者がいたんですか？」

「多分、本人にも自覚はないでしょう。自分に似た霊を呼び寄せる、霊媒体質のようです。放っておいても本人には問題ありません」

「あの？ 一人死んでいるんです」

「人間、誰しも生まれたときから死ぬ運命を授かっています。死は生とは切り離せないものなのです。たまたまその霊が死ぬ時を言い当てたからといって必ずしもその霊の影響とは限りません」

「そんな、……」

「この霊はまだこの世に彷徨っているでしょう。ですが、まだ私たちと出会う運命にはなっていないようです。そのうち会えるかも知れませんが、そのときにはそうと気づかないかも知れません」

光雲は暗示めいたことを言った。そして、コツクリさんの話はこれくらいでいいでしょうと強引に切り上げられてしまった。本来の仕事である心霊写真の鑑定も山のように残っていたし、来月号の読者相談コーナーもあるみたいだった。

それに何より、光雲先生は意図的に話題を変えたと咲子は感

じていた。熟達した霊能力者でなければわからない何かを知っている様に思えた。

「でも先生、……」

静香はなおも食い下がった。

「これは記事にはならないでしょう。まあ、いつも通りの作業に移ろうじゃありませんか」

「そうですか」

静香はあきらめて、自分の机の上からどっさりと持ってきている心靈写真の束を解いた。光雲はそれを一枚一枚丁寧に見ていった。光の筋が入った写真や、赤く色づいた写真など、たいていのものはそうと見分けがつかないが、光雲が手をかざすと、霊気のあるなしが判読できるらしい。彼は一枚の写真を取り上げた。

数名の男女がこちらを向いている写真であった。

「この中に、この世のものでない顔が写っています」

光雲が指さしたところに、カラー写真の中、白黒の顔が写り込んでいた。言われてみると、輪郭がはっきりしないし、存在感とでも言うものが全然感じられない。咲子のはっきりとそれを見て背筋がぞくりとした。

「この男性の顔は、この女性の友人だった人の霊でしょう。未だに彼女に未練があつて成仏できないようです。お祓いが必要です」

「そうですか」

お祓いが必要と聞き、さっきまでぞんざいに扱っていたのが、急に指先でおそろおそろつまんで扱うようになった。

「次のこの光の筋ですが、これにも何か感じます」

「心靈写真ですね！」

静香は嬉しそうに手を組み合わせた。

咲子が写真に触れたとき、頭の隅に、交通事故の現場が浮かび上がった。凄惨な現場で、バイクに乗った男の人が、首の骨を折り、

即死した。だが、本人の想念はそれを受け入れられず、未だにこの世を彷徨い、元の恋人のもとに行こうとうごめいているのだが、住む世界が違ってしまったのでそれは叶えられない。悲しい話だった。

「お嬢ちゃんも、霊の姿が見えるようだね」

静香が向こうに行っている間に、光雲が咲子に話し掛けた。

「え、いや、そんなことは、……」

「あなたには、お母さんの霊がついていなさる。悪いものから避けられるように、あなたにビジョンを届けてくれているのですよ」

「ビジョン？」

「霊視とも言います。実際に見えるのではなく、あなたの靈魂に直接届く映像のことです。あなたのお母さんは事故で亡くなっていますね？」

「え？ ひよつとしてまだ成仏しきれてないんですか？」

「そんなことはありません。天国からあなたのことを見守っていますよ」

咲子はそれを聞いてほっとした。

でも、……だとしたら、あの十円玉に触れたとき、不吉なビジョンを送ってきたのには何か理由がありそうだった。咲子はそれについて光雲に聞こうとした。

「何かあなたに関わる重要な理由があったのでしょうか。あなたの教え子の不幸であったのも、その理由のひとつかも知れませんよ。でもまあ、霊界のことは霊界で。そのうち、全てが明らかになりますよ」

光雲はそう言い、静香にコーヒーのお代わりを頼んだ。

4・徹夜(前書き)

2	2	2	2
0	0	0	0
1	1	1	1
1	1	1	1
・	・	・	・
0	0	0	0
9	9	9	9
・	・	・	・
0	0	0	0
9	8	7	6
第5節掲載	第4節掲載	第2節掲載	第1節掲載

—

塾の生徒達は、テスト前になると徹夜で勉強するのも平気なようであった。咲子は寝付きが悪いだけで、記憶力が落ちてしまうので、羨ましいかぎりである。もっとも、咲子は附属中学から大学までエリート方式の学校だったので、特に成績に問題がなければ上がることが出来たので、その点、受験らしい受験は小学校六年生の時に経験しただけで、今の大学にしてよかったと思っている。

「そろそろ中間テストの時期ですな」

咲子が塾の授業の準備をして、控え室に一人にいるときに校長の塩野が入ってきて話しかけた。

「そうですね、十月の最後の週だと聞いています」

「彼らは、……普段勉強をしない割にいい成績を取っています。徹夜して、効率が上がるというのもあるのでしょうか、全員が全員そうした傾向があるとは限りません。寝不足で却って失敗してしまうというのもあるでしょうから」

「そうですね。わたしも寝不足だと調子が悪くなります」

咲子の返事に、塩野は何か言おうとしてやめた。と、感じさせた。「今の子供たちは学校での人間関係や、成績など様々なストレスにさらされています。昔の我々の世代とは桁違いと言っていていいでしょう」

受験がストレスなのは当たり前だ。昔だって変わりはないのではないだろうか？

「そう、……受験は昔からあり、これからもあり続ける。ただ、現在はインターネットを始め様々な情報に踊らされる傾向にあるとい

つても過言ではないでしょう」

今日の校長の話はまとまりがなく、その上、何が言いたいのかさっぱりわからない。独り言なのだろうかと思ったとき、ふと塩野は言葉を切った。

「ドラッグ、……中原先生はご存じですか？」

「麻薬とか覚醒剤とか言った類のものですか、あまり詳しくは知らないですが」

「まさか、うちの生徒に限ってそんなものに手を出しているとは考えていません。ですが、万が一、手を出してしまうようなことがあればそこから救ってあげなければなりません。そして、この塾も」

「どうやら、やけにハイな態度と、徹夜しても一向に平気な点とをドラッグに結びつけて考えていたようだった。咲子は言下に否定した。麻薬中毒患者など見たことはないが、そんな薬物のハイな状態と、徹夜で勉強していわゆるランナーズハイになった状態とは明らかに異なると思ったのだ。

「中原先生、どちらも同じ脳内麻薬のなせる技なのですよ」

「わかりません。でも、どうしてそんな話をわたしにするのですか？ 大島先生だって西海先生だっているじゃないですか？ それに、そうした問題には一番不向きです」

「あなたに頼むのには理由があります。それは、あなたが、この塾の出身者ではないからです。大島君や西海君はドラッグをやった経験があるのかどうか知りませんが、こうした調査には不向きでしょう。あなたは、それとなく生徒に探り、あるいはおとり捜査になっても構いませんから、情報を手に入れて欲しいのです。もちろん、発覚したときのフォロワーは全力を持って行きますから」

「ええー」

咲子は即座に拒否の意思表示をした。

その日から、講師の仕事が少し憂鬱になった。教壇に立って文法の解説をしているときも、心そこにあらずといった感じで、ずっと



彼女たちの間にどうやって入っていくかということを考えていた。

前に西海に言われたとおり、最近では板書に夢中になり生徒に背中を向ける時間は極力少なくするようにしていた。そうすると、席の後ろの方でこそそそしているのが結構目につくものだった。

中嶋たちは何やら携帯電話のメールを打っているし、青野裕は週刊漫画雑誌を引き出しに隠して読んでいた。それでいて、彼らの成績は決して下位ではない。中の上という感じで百人中の三十位以内には必ず入っていた。塾が終わって、家に帰ってから必死に勉強しているのは明白だった。

だったら、どうして塾に来るのだ。

あ、だから、校長先生は心配していたのだ。塾は単なる情報交換と、ブツの受け渡し場所にしか過ぎない、そう彼は考えているのだ。やっぱり憂鬱だった。あなたたち、覚醒剤やっているの？ なんてストレートな聞き方はできっこない。

くよくよ悩みながら、三時間の授業を消化し、今日のアルバイトを終えてしまった。職員室では大島と西海がゆっくりと資料の整理をしながらコーヒーを飲んでいる。

「大島先生はこの塾のOBでしたよね？」

何気ない風を装って聞いてみた。

「そうだよ、西海先生もそうだ。割と塩野先生と仲がよかったもんで、大学を出てからも講師を続けたんだ。生徒も優秀だしね」

「席の後ろの方の生徒のことなんですが」

「ああ、やる気のない連中か。でも、そんなに成績は悪くないだろうっ？」

「それが心配なんです。悪いことしていなければいいんですが」

「悪いこと？ カンニングという意味かい？」

急に大島の声のトーンが上がリ、咲子はドキリとした。

「いや、……まあ、そんなわけではないですよね、あはは」

やはり、こちらにも聞きづらかった。

「ふうん、そうだねえ、単に要領がいいというだけかも知れないよ」  
大島はそんな風な見解を口にした。

要領がいいとは、確かにそういう見方はあり得た。テストに出る問題だけを集中してやれば、一晚掛けなくても同じくらいの点数が稼げるだろう。確かに、中嶋たちは絶対、咲子程度の教師に近づき捕まれるようなドジは踏まないし、それでいて、遊びも勉強もほどほどに楽しんでいるようだ。

青野がいつでも読める漫画を授業中に読んでいるのは単に、反抗期のせいかも知れないし、中嶋たちはもともと咲子には反抗的だったし、メールをするには相手のあることだから、時間に関わりなくやらなければならぬのかも知れなかった。

それに、……大島に聞こうと思ったのが、そもそもの間違いだった。塾のOBなのだから、ドラッグに手を出しているなどと間違っても認めるわけがなかったし、それをにおわせるようなへまをするようなタイプでもなかった。

帰りの電車の中、咲子はただぼんやりと左から右へと流れゆく夜景を見ていた。

相談できそうな人を、頭の中であらわして行つた。こういう問題に手を貸してくれて、なおかつ口の堅い人。そんな人はいない、……そう考えたとき、ふと、静香のことを思い出した。

電車の吊り革につかまりながら、片手で携帯電話のメールを打つた。細かいことは書けないが相談したいことがあると。彼女は金曜日の夕方ならいいと返事を返してきた。少しだけホツとした。

## 二

高史は、咲子の焼いてくれたトーストをほおばりながら、新聞を読んでいた。ライオン社に入社したときからずっと経済紙を取って

いる。テレビ欄が見にくいことを咲子が文句を言ったこともあったが、七年来続くとすっかり慣れたようだ。

経済ジャーナル誌の応援に行き、投資銀行がアメリカのベンチャービジネスに多額の投資をしていることに、ずっと、注目してきたが、未だにその全貌が見えないでいる。情報はほとんどが、断片的で二次的のもので直接の情報源が見つからないのだ。

包括的な情報で確かなのは、「炭酸ガス削減のための次世代交通システム」ということだ。

だが、その情報は本当に大ざっぱというか包括的で、どんな方法で炭酸ガス削減を目指すのか、一切明らかになっていないのだ。上司の杉山も最近になり、少し焦りを感じ始めているようだ。

「お兄ちゃん、コーヒーのお代わりいる？」

考え事をしていたときに、急に、声を掛けられ思索の糸がちぎれてしまった。

「ああ、熱いのを頼む」

そう言って、マグカップを差し出した。「咲子は経済紙は読まないのか？」

「政治欄だけ目を通しているわ。あとテレビ欄も」と、答えた。

「何なら、普通の新聞を取ってもいいんだぞ」

「いいわ、無駄になるから」

「俺も別に経済新聞じゃなくてもいいんだから」

「そうなの？」

少しだけ嬉しそうな顔になった。だが、しばらくの間は経済ジャーナル誌の応援に行かなければならない。それが終わったら、読売新聞に変えようと思っていた。

「今の仕事が一段落したら、普通紙に変えるよ」

「やった！」

妹の無邪気な笑顔を見るのは久しぶりだった気がする。

午後になり、高史は経済ジャーナル編集部に置かれている自分の席についた。自分の席といっても正式のものではないからあまり落ち着かないのは確かである。いくら自分の趣味とは合わなくても芸術写真編集部の席は正式なものであるから、静香あたりが心靈写真の束を積んでいてもそう気にはならないものだ。

しばらく書類の整理をしていると、杉山主任がやってきた。

「中原君、今日の定時後、時間は取れるかな？」

「定時後ですか？」

高史は自分のダイアリーを芸術写真編集部に置き忘れていたことを思い出した。もつとも、定時後にスケジュールが入ることは最近ではあまりなかった。それに、経済一部と芸術部では力関係の差もかなりのものがあり、スケジュールの優先度からいうと、嫌という権利はほぼなかった。

「この間、君が調べてくれていた飯星鉄工所だが、それをアメリカのベンチャーに橋渡ししている商社が判明してね。東西物産という東証一部の会社だ。個人的なついでで会って話が聞けることになったんだ。君も同席してくれ」

「はい。わかりました」

飯星鉄鋼所に着目したのは、ほんの偶然だった。

アジア企業でアメリカと取引している会社は山ほどあったのだが、その中でも、日系企業で営業所が東京都大田区にあり、しかも、…妹の教え子の父親が経営している会社だったのでつい、時間を費やして調べてしまったのだ。結果的に、投資資金の大きな流れのうちの一つが判明した形になっていた。

飯星鉄工所は鉄工製品の加工と塗装を行うのが主な品目だ。それだけなら、単に、アジアに一杯成長した工場群の情報に埋もれてしまっていただろう。

「十九時に丸の内、……向こうさんの近所だが、居酒屋系で探しておいてくれないか」

「はい、わかりました」

そんなことは新入社員の仕事だと思った。が、贅沢は言えない。インターネットで東西物産の入っているビルを探し、そこから駅までの近くで、店を探した。話を聞くのが主目的であるから騒がしい店は駄目である。といつてもそんなことまでインターネットではわからないから、お店紹介ホームページから値段帯で検索した。あまりに安いところは、若い人が多いと思ったのだ。若い人が騒々しいというのは一種の偏見だが、自分が飲むときもそうであるから、まあ、間違いないだろうと思った。

杉村が居酒屋系で探せと言ったのにも、他の理由があったようだ。それがわかったのは、実際に居酒屋の近所で待ち合わせをしたときであった。

杉山の紹介で、東西物産の鉄工部営業課、重野久敬主任と会ったときのことである。名刺交換をしながら、重野は東南アジアと中国と北米の往復ばかりしていて、日本の鮮魚とはここしばらくご無沙汰だと言ったのである。

「大体が香辛料の強い肉系が多かったですね。魚は向こうにもあるにはあるんですが、生魚を食べるには少し抵抗がありましたね」  
「そうだったんですか」

高史は、海鮮居酒屋「海鮮丸」を選んでおいて正解だと思った。中には大きな生け簀が置いてあり、ちぬやカワハギなどが泳いでいる。それを板前に注文してその場でさばいてもらう。

「いやあ、贅沢な食べ方ですねえ」  
重野は喜んだ。結構酒もいける口らしく、ビールの中ジョッキが次々空いていった。

「活け作りにしたカワハギは後であら煮にしてみたいですよ」  
「それは有り難いなあ」

高史は手を挙げて、店員を呼んだ。

杉山は、そろそろと思ったのか、東南アジアの方面に話題を移し

つつあった。

「重野主任はベトナムへは？」

「ああ、中国に次ぐ、日本企業の進出地帯ですからねえ、よく行きますよ。ベトナム料理も好きです」

「最近になり、北米向けの輸出が増えたとか？」

「いや、前々からあり、今後も増加していきますよ」

「飯星鉄工所のことなんですが、……お聞きしたかったんです」

もう、重野の顔が真っ赤になり、ストレートに聞いてもいいかという杉村の判断もあつたようだ。重野もすでに警戒のガードは下がってしまっていた。

「飯星鉄工はいいときに移転しましたね。ちょうど、アメリカで需要が高まったときにフル稼働していますよ」

「そのアメリカでの動きが知りたいんです」

「炭酸ガス削減プロジェクトというざくつとした話しか知らないものでして」と、高史は付け足して言った。

「それは、あれですよ。航空機やガソリン車から鉄道に輸送手段を転換しようという現政権の思惑があるんですよ」

それについては聞いたことがあつた。ジョージ・ワトソン合衆国大統領が二十年以内に二酸化炭素排出量を二十五パーセント削減すると宣言し、原子力発電所の建設とともにガソリンエンジンから電気自動車などへの転換を図り始めたのだ。トラック輸送などを鉄道に転換することは当然あり得ることだった。だが、それと飯星鉄工の躍進の結びつきがよくわからない。

高史は焼酎のお湯割りを店員に頼んだ。さらに、重野にお酒を勧めてみる。

「新交通システムはですね、……リニアモーターカーを使うんです」「はあ」

リニアモーターカー自体はそんなに真新しい技術ではない。JR東海が計画を進めているし、また、線路方式のものでは神戸市営地下鉄湾岸線の駆動方式に採用されている。

「ニューヨークからデトロイトまでの実験線を全線地下で作る計画があるんです。地下鉄というのがみそです。密閉性の高いコンクリートを使います」

「地下鉄ですか？」

「はい、車輪との接触のないリニアモーターカーでは、速度を制限しているのは主に騒音問題だけなんです。さらに、空気抵抗を減らす意味もあり、トンネルから真空ポンプで空気を抜き出し、十のマイナス六乗<sup>トル</sup>Torrまで減圧します。これで、列車を走行させると騒音も空気抵抗も発生しません。つまり、航空機並み、いや、それ以上の速度で運転させることが出来るのです」

「はあー」

二人そろってため息をついた。

「実験線ではニューヨーク・デトロイト間を約一・五時間で結ぶことを計画しています」

「で、その計画はどこが推進しているんですか？」

「計画はスーパー・メトロと呼ばれ、新交通システム開発公社が主幹事業者で、スーパー・メトロカンパニーの株式の百パーセントを持っていますよ」

突拍子もない話をすると思った。

だが、高史が子供の頃、宇宙と地球を結ぶスペースシャトルなど夢の話だと思ったのだが、現実に飛んでいる。真空チューブの中を走る夢の列車だって、もう、現実に手の届くところに来ているのかも知れない。とにかくアメリカのやることだ。日本人の想像も絶することを過去に何度もやってきたのだ。

「飯星鉄工はコイルを納入しているのですか？」

「リニアモーターカーは超伝導電磁石で浮上し、磁気で推進することにご存じですよ」

「ええ」

「そのコイル用鋼板を作っています。それと、もっとも肝心な金物ですよ」

「肝心な？」

「真空の線路上を走る列車に乗り込むには、特殊なフランジで作られた出入り口を使うんです」

「フランジ？」

「真空中に置かれた列車の乗降口と、大気圧のプラットフォームとの間をそのフランジで結びます。その間をさらに金属パッキンでふさがります。そこから空気が漏れ出るとせつかく作った真空状態が一気に壊されてしまいますから。そしてそれは、酸素分子一個分の隙間という精密さです。それを作ろうとしているんですよ」

「はあー」

どちらにしてもすごい話だった。最終的には実験線はロサンゼルスまで延伸されるとも予想される。何百キロごとに設置される駅には、列車の乗り口まで人間を真空から保護しなければならぬので、金属パッキンで覆われた乗り口が設置される。その生命線が飯星鉄工の金属パッキンだというわけだった。

数百億ドルの資金の流れも、この規模のプロジェクトなら全然不自然なことではなかったのだ。アメリカは国家プロジェクトとしてこの交通システムに取り組んでいる。

高史が考え込んでいるうちに、重野と杉村は別の話に移り、酒が進んでいた。

そんな杉村の態度に、何となく高史は、この記事をオカルトものとして芸術写真の方に載せてしまおうかと思いい、その思いを振り払いながら、酒を注ぎにまわった。

### 三

亀田は、飯星遥香の遺体から検出された薬物の調査のために、母親、啓子の元を訪れていた。亀田自身、意外な結果だった。

一週間近く川の底に沈められていたせいもあり、無惨な姿に変わ



り果ててはいたが、検死官の司法解剖は的確だった。死因は、アレルギー反応による気道閉塞によって起こされた窒息死だった。クロロフォルムなどの薬物を鼻や口からかがされたことによる、アレルギー反応を起こし、気道粘膜が膨満してただれ、それで息が詰まったという。

「遥香さんには、ハウスシック症候群の傾向があったのですか？」

そう聞くと、啓子はかすかに首をかしげ、記憶をたどるように考え込んだ。

「小さい頃に、そういう病気で小児科に掛かったことがあります。それで、今の家が変わったときには、ホルムアルデヒドというんですか？ そういった、溶剤を使わないタイプの壁紙にしたことがあります。でも、大きくなってからは、……」

「そうですね」

亀田は後ろについてきている山本を振り返った。メモは彼が取っている。

遺体には、他に乱暴された形跡はなかった。傷はすべて死後についたものであり、いわゆる生活反応の認められるものはなかった。遺体に着衣はついていなかったが、犯人が身元の特定を妨害するために、はぎとつたと考えてしかるべきだった。

「一つ気になるのが、……膀胱と髪の毛から検出されたアンフェタミンの成分です。これは、遥香さんが日常使っていた薬に含まれていたと考えられます。何か常用薬はありませんでしたか？」

「いいえ」

啓子は即座に否定した。それに、亀田はアンフェタミンという言葉を用いたが、一口に言うとは覚醒剤である。母親が顔色一つ変えないところを見ると、この言葉自体を知らない可能性もあった。

「ごついうと、語弊がありますが、交友関係なんですけど、……年上の異性関係で心当たりはありますか？」

「さあ、……奥手なもので、中学の女友達しか親しい人はいなかったと思います」

「そうですか」

亀田は彼女の目を見た。

きりりとして、強い女性の瞳をしていた。やましいことをして、隠し立てするような感じの目ではなかった。飯星遥香は単なる被害者なのだろうか？ 刑事としての勘はそう告げていた。

飯星邸を出てから、屋敷の周囲をぐるりと観察した。

「亀田さん。自分も彼女は白だと思えますよ」

山本もそう言った。

犯人はストーカーで思いを遂げるために、クロロフォルムをかがせて彼女の意識を奪い、そして拉致したところ、アレルギーを起こして死に至らしめた。覚醒剤は同じ時期に使用したものであるというのが、今のところの捜査一課の描いている筋書きだった。

だが、釈然としない点もあった。一回だけの撮取で髪の毛から覚醒剤成分が検出されることの不自然さである。髪の毛は毛根細胞から成長し、古いものほど先側になる。だから、覚醒剤の撮取時期が長ければ長いほど、根本からの覚醒剤成分の検出範囲は長くなってくる。遥香の場合については、その辺りは微妙であった。

最初に肝臓からアンフェタミンが検出されたとき、念のためにと、分析官に毛髪が手渡され、長い髪の毛の毛根から十センチ近くの辺りからも同様に検出されたのだ。亀田は、遥香は、拉致される以前からアンフェタミンを常用していたと確信した。

中学生だからといって油断は出来ない。

車に戻ろうとして、携帯電話で捜査一課班長の森から連絡が入った。

「安達容疑者の件だが、弁護士がアリバイを主張してきている。完璧なアリバイだ」

皮肉めいた口調だった。

「まさか」

「あの日、東京にはいなかったと言ってきた。念のため、裏を取っ

てくれ」

「わかりました。それから、被害者から検出された薬物なんです。日常的に使っていた薬はないそうです。やはり友人から譲り受けたなどが考えられますので、交友関係を洗った方がいいと思います」

「わかった。山本と二人で捜査を続行してくれ」

通話が終わると、亀田は携帯電話をパタンと閉じた。先に乗り込んでいた山本がエンジンを掛けて待っていた。

「安達容疑者にアリバイがあると弁護士が主張してきているそう。だから裏を取りに行く」

「アリバイ？」

山本が怪訝そうな声で復唱した。最初に容疑者を絞り込んだときに、付近で目撃情報があったので、最重要容疑者として調べた上で逮捕状を取ったのだ。今さら、アリバイなどということは考えられなかった。それに、自宅にいたなどと、証言の得られない主張を繰り返す輩もいるが、そんなことにとらわれていたら犯人を一人も拳げられないものだ。

「詳しくは戻ってからだ。供述調書に沿って裏を取っていただくだけの作業だ」

「はい」

山本は後方をちらりと確認し、住宅街の中を静かにクルマを発進させた。

#### 四

啓子は、突然の訪問者に辟易としていた。

刑事だけではなかった。会社のベトナム進出に対して、自らの職場を失うことになる<sup>おのまがし</sup>と強行に反対していた労働組合のメンバーである西堀書記長と大曲書記が、刑事が帰った後、すぐにやって来た。まるで、刑事が帰るのを待っていたかのようなタイミングだった。

もつとも、自宅では会社関係の仕事の話は一切受け付けないことにしていた。

娘が小さかった頃からの慣わしになっていた。

どうして急にベトナムに行く気になったのだろう？

彼らが残った社員をまとめ上げて、会社の全面移転に協力してくれるのなら、それはそれで、ありがたいことには違いなかった。

「労働力の安い海外への移転は、長期的に見て労働者賃金の低下につながる」

彼らは徹頭徹尾そう主張していた。

確かにそれは正しい。どんな部品を作るにせよ、材料費以外は全部人件費なのだ。人件費の安いところで最適調達をもくろんでいけば、いずれ、日本の最低賃金は下がっていき、発展途上国の賃金は上昇していき、詰まるところ行き着く先は、それらの平均値に収束していくことは、啓子にだって予想は出来た。だから、彼らがベトナム行きに反対するのは、単に東南アジアでの生活が嫌だと言う以前にそういうイデオロギー的なものもあつたと理解していた。

だからこそ、移転反対派との話し合いも出来るだけ衝突をさけ、行かない人には退職金を大幅に積みます方向で退職の方向へと誘導していったのだ。

そうして、一人去り、二人去っていき、強固だった労働組合も彼ら二人きりになってしまった。

啓子の元にも、嫌がらせめいたこともしてきたことがあつた。

夫、丈太郎の素行調査である。

ベトナムで女を囲っている。海外で一人で暮らす彼に取り、いちばん痛い点をついてきた。

「俺がそんなことするわけじゃないじゃないか」

丈太郎は一言の下に否定した。啓子は夫の言葉を信用した。この噂は、彼らがやった証拠はなかったが、消去法でいくと彼らしかいなかった。探偵を雇ってまで調べさせたと考えられる調査資料が出

てきたのだ。

うわさ話だけなら、……そう、ベトナム人女性とホテルで取った写真というのも出てきたのだ。啓子は気丈に耐えた。会社を守るために。

そして後から聞いた話では、夫の元に、娘の安否を気遣わせるような内容のファックスを送りつけたこともあるらしい。

そこまでして、彼らが日本の飯屋鉄工所にこだわる理由は何なのだろうか？ 労働組合の書記長と書記という役職だけでは到底説明がつかかねた。

もちろん、先代から勤めてきた職人魂というのが一番大きいと思う。だとしたら、今回、急に一転したのはなぜなんだろう？ 啓子は考え込んだ。

刑事が何か言っていたのとの関係があるのだろうか？

段々と不安になってきた。啓子は携帯電話のインターネット機能を使って、アンフェタミンを検索してみた。

「あつ！」

合成系覚醒剤、とあった。

それが娘の体内から検出されたから、常用薬があるかと尋ねたのだ。データベースではADHD（注意欠陥多動性障害）やナルコレプシーの治療にも用いられると書いてあるが、遥香にはそんな疾病はなかった。

もしかして。

友達に勧められてやっていたとすれば、……しかし、今となっては確認のしようがなかった。テスト前にはいくら徹夜しても平気だし、異常なほどの集中力が続いたこともあった。その反動というのだろうか、普段のだから感もそれと言われればそのようにも思われた。

早く遺体を帰してもらわなければ、……遥香の薬物濫用癖を何と

してでも隠蔽してしまわなければならない。

そして、葬儀をすませてあげなければ、……そのときには、夫も日本に帰ってくるだろう。以前から言おうと思っていたことは、すべてこのときに持ち出すしかない。

啓子は、亀田の名刺に書かれた番号に電話した。一刻も早く遺体を帰してもらえよう。

## 五

「何か悩み事があるようね？」

静香は呑気そうな声で電話を掛けてきた。咲子はこここのところ憂鬱な毎日を送っていた。校長の塩野から内偵めいた任務を命じられていたからだ。生徒達の口は元々咲子に対して堅い。そして、禁止薬物に関するうわさ話など、絶対に聞き取ることなど不可能に近かった。

「そうなんですよー」

静香に話したところで、解決には一歩たりとも近づくことなどあり得ないと思いつつも、つい、頼れそうなところには頼ってしまう。自分は弱い人間なのだろうかと反省しつつ、相談を持ちかけた。

「でも、電話では話せないようになっていうか、その、……」

「ああ、わかるわかる。こっちへ来なよ。コーヒーくらい奢ったげるからさ」

「ありがとうございます」

時計を見ると午後三時になっていた。

大学の構内を抜けると、そのまま、電車に乗りライオン社のある西新宿まで行った。いつもの通り東口から降りて歩いていく。結構便利な場所にあるものだ。歩いて十分ほどでたどり着いた。

ビルの一階西側に、芸術写真編集部が入っていた。ドアはもう寒くなり始めているのに、開けっ放しになっている。キャビネットに

向かい、資料を探しているような格好の背の高い女性を見つけ出した。佐伯静香だ。

「こんにちは」

「あら、いらつしやい。早かったのね」

「女子大は西荻窪ですから」

「そうだったね。それで、……悩みつて？ バイト先のこと？ それとも就職先のこと？」

「塾の講師をしているんですが、……その校長から少しやつかいな事を頼まれました」

「ふうん、そうなんだ。……じゃあ、ちょっと静かな所で話そうか。こつちへいらつしやい」

静香は咲子を普段は心靈写真の鑑定に使っていそうな、奥まった会議室に連れて行った。狭いスペースで、会議机が二脚向かい合わせに置いてあり、上に資料が並べられるようにしてある。いすはパイプいすが何脚か部屋の隅にあるのを必要に応じて引き出せるようになっていた。静香は二脚だけ出して、咲子に座るよう勧めた。

「コーヒーでも入れようか？」

「あ、いや、いいです」

咲子は少し遠慮した。相談に乗ってもらうのに、そんなことをさねては申し訳がない。

「いいから、いいから。いつもねたを持って来てくれるから、今日はサービスよ」

そう言い、編集部の横にある食器棚からコーヒーカップを取り出し、据え付けのコーヒーメーカーのポットから注ぎ、持って来てくれた。粉砂糖とフレッシュをくれたので、咲子は両方を入れて、かき混ぜた。

少し飲むと、気分が落ち着いてた。

「それで、どんな悩みなの？」

「ええ、……塩野校長、あ、校長は塩野さんって言うんですけど、最近塾の生徒の行動がおかしいって、いや、最近と言うより前から

気づいていたみたいなんですけど」

「おかしいつて？ キツネが憑いたみたいなの？」

静香は身を乗り出した。

「違いますって」

咲子は即座に打ち消した。あまり取材に関係ないような話なので、入れ込まれると後でがっかりさせることになる。「実は、覚醒剤が蔓延しているって、その、生徒の間で、らしいんです」

まるつきり文法を無視しつつも、文章をちぎるように並べて説明した。生徒のことを考えれば、すらすらと流れるような説明は出来ない。

「覚醒剤？」

「校長は、断定的にはおっしゃいませんでした。ただ、普段、勉強熱心ではない子が、テストで優秀な成績をおさめている。テスト前だけに急に集中力が出ると言っんです。徹夜も平気な様子で、この傾向はずっと昔から続いていると、……その、何か使っているじゃないか。例えば、……そこで、言葉を濁されました」

「はーん。そこで、覚醒剤を使っていると確信したんだね」

「えっと、まあ、そうですね。早合点だったでしょうか？」

「そうね、大人の対応とはいえないわ。もし間違ってたらとんでもないことになるじゃない」

「はい」

「確かに最近、ドラッグの使用は低年齢化の傾向にあるわ。中学生が大麻使用で逮捕・補導されたりした例もここ数年毎日のようにある。合成麻薬や覚醒剤に手を出したりしても何ら不思議はないと思うし、もし、咲子ちゃんの塾でのことが本当なら、是が非でもやめさせなければならぬわ。でも、……」

「はい」

「逮捕者が出るくらいのは覚悟しておいてもらいたいの」

「は？」

逮捕者って塾の生徒のことだろうか、それとも、監督者である教



員側のことだろうか、いや、責任を問うなら双方だろうと咲子は思った。

「でね、過去に取材したことがあるのよ。オカルト宗教でそういうのがあってね。まあ、そのことはさておいて、……中枢神経刺激薬ってカテゴリーの薬があるのよ」

「中枢神経、……」

「読んで字のごとく、中枢神経を刺激する薬物で、重度の睡眠障害、ナルコレプシーなどの治療にも使用されているわ。医薬品としても日本、海外で使用されているけど、医師の処方がなくては使えないの」

「つまり？」

「中学生が勝手に買えるものではないということ。大人の介在が不可欠よ」

「そうですね」

咲子は金髪の容疑者を思い浮かべた。

「その中には、覚醒剤として法律で取り締まられているものと、薬事法で医師の処方ので使えるものと二種類あるわ。ひどい例を挙げると、戦後の日本では疲労回復剤として、ヒロポンなる薬物が市場に出回ったこともあるわ。これは、塩酸メタンフェタミンという種類の向精神薬」

静香は古そうなファイルを繰りながら説明した。一九五一年に覚醒剤取締法が施行されるまで、使われていたようだ。

塩野が言っていた、徹夜しても平気、というのは実際に本人も経験があるのかも知れないなと思案を巡らせた。

「やっぱり、使っちゃいけない薬なんですよね？」

「そうよ。中毒性があるのと、精神異常をきたす恐れがあるからね。それでも、手を出すのは、無知なのか、好奇心が強いのか？」

咲子の疑問をよそに、静香は手にしていたファイルをパタンと閉じた。

「あの、それ、もっと見せてください」

「いいけど」

咲子は資料にざっと目を通した。

この資料は、元々はオカルト宗教で使われていた覚醒剤について調べていたもので、実際にその団体は検挙されていた。中枢神経を刺激し、活性化させる作用が主なもので、その団体は儀式の中で一体感を醸しだし、メンバーの意識を昇華・高揚させる手段としてこれらの薬物を使用していたようだ。中学生たちが徹夜勉強をするために使うのとは少し用途が違っていた。

「実際にこれらのクスリを手に入れるのって可能なんでしょうか？」

「取り締まりが厳しいのは、それだけ、日本に入ってきている反動なんですよ。手に入れようと思えば、不可能ではないと思うよ」「例えば？」

「……咲子ちゃん、夜中の繁華街に行ったことない？」

静香は知っているけど、言いたくないような顔をした。当然これらの薬物の取材をしたときに、覚醒剤の売人にも会っていたはずだ。知っていて知らない顔をするのは、取材源を秘匿する意図があるのに他ならない。兄なら調べられるはずだが、咲子からこんな話を持ち出すわけにはいかなかった。

しかし、咲子の行動力を無視すれば、入手可能なものであることは間違いないようだった。どのようなネットワークが存在するのか、これから少しずつ攻めていくのか、あるいは一切タッチせず彼らが卒業していくのを見送るのか、自分の中で覚悟が必要だった。

5 渡米（前書き）

2011.09.11	第3節掲載
2011.09.10	第1、2節掲載

## 5・渡米

—

十月三十日、月末になり、出勤記録を整理している高史の所に森野編集長がやって来た。

「ちよつといいか。少し相談がある」

「何でしょう？」

「経済一部の丸山編集長から、君をしばらく借りたいという要望があった。大体の内容は君が知っているな？」

「いいえ」

確かに、ウィークリー経済の仕事が楽しくなりつつあったのは事実だが、自分を引き抜いてくれるという話は聞いたことがなかった。それに、飯星鉄工所の件もこの間のレポートを杉山主任に提出したことですでにすんだことと知っている。

「ふうん、そうか」

森野は分厚いめがねを外し、右手で顔の脂をぬぐった。はあつとため息をつきながら。

「アメリカに渡り、飯星鉄工の取引先の取材をやって欲しいそうだ」

「ああ」

「何だ、知っているじゃないか」

「それは困ります。うちには、妹もいるし」

高史としては、英語も出来ないし、単身アメリカに乗り込んで取材対象を見つけ出し、交渉して情報を引き出すことなど、まるで自信がなかった。そして、単身アメリカに渡れば、妹の咲子を一人残していくことになる。

「いいじゃないか。妹と言っても、もう大きいんだらう？」

「大学二年生ですが、……」

「じゃあ、一人でも大丈夫だよ。頑張つて来いよ。この編集部から海外出張など初めてなんだ。期待しているぞ」

「どうやら、森野は向こうでも経済一部の仕事をしながら、オカルト取材をさせるつもりの方だった。そりゃあ、アメリカにも幽霊はいるだろう。しかし、自分の貧弱な語学力でそこまでの取材が出来るとは到底思えない。幽霊の出る個人宅を訪れて話を聞き取り、場合によってはカメラを回すこともあり得るのだ。」

「これまで海外に行った経験はあった。学生時代は咲子の学費を稼ぐために大学の講義をサボり空いた時間をアルバイトに回していたくらいで、海外旅行など夢の夢だったのが、入社した一年目に研修みたいな短期出張を経験させてくれたのだ。もともと、指導役の中堅社員と一緒にだったので、語学が出来なくても安心だったし、任務もレポートを書くことだけだったから気楽なものだった。しかし、入社して八年も経つと、それだけではすみそうにないのは確かだった。」

午後一番に、経済一部の自分の席に行くと、杉山主任が待ちかまえていた。

「森野さんから話は聞いているだろう？ 本当は僕と一緒に行って欲しかったんだが、ホー・チ・ミン市の工場を取材しに行かなくてはならなくなつてね。それで、アメリカの方は君だけに任せたいと思っている」

「そんな無茶ですよ。経験もないし、つてもないし」

「おいおい、君、海外経験があるじゃないか？」

「いや、あれは、……」

入社一年目の研修みたいなものだったと言おうとして、通じないと思つてやめた。

「とにかく頼むよ。人手がないんだ」

「それでどの位の期間ですか？」

「それは、君の記事の出来次第だよ。特集記事が組みれば一週間で

もいいし、出来ないなら出来るまで帰って来てもらっては困る」

何だか、嫌がらせのような出張に思えた。

航空券の手配とホテルの予約は、一階にある総務課窓口で全てやってくれる。ただし、帰りの飛行機便の予約は、予定がわからないので向こうに渡ってから自分で取らなければならぬ。ロサンゼルスやホノルルなど日本人観光客の多い空港では日本語の通じる窓口もあるが、これから行く予定のニューヨークでは多分駄目だろう。一週間後にしてしまおうかなと杉山の方をちらりと見た。しかし、命令だけ下すと後はすぐに他の仕事に掛かってしまい、こっちに振り向いてもくれなくなった。

しぶしぶ、高史は、自分のパスポートを手に一階に下りていった。総務課の窓口では、慣れた感じで事務処理を終えられた。

「明日の午後には、旅行社から航空券が届きますのでお越し下さい。ホテルはインターネットで予約確認が出来ます」

「そう、ありがとう」

後は渡航準備だった。スーツケースや着替えの類を用意しなければならぬ。とはいえ、こんなことで早退するわけにもいかない。咲子に電話して、帰るまでに用意しておいてくれと頼むしかなかった。

「それと、中原君。行った先での取材相手に心当たりはあるかい？」  
あくまでも念のためという感じで杉山が声を掛けてきた。そんなもの、あるはずがない。「スーパー・メトロの関係者リストを一応渡しておくよ。非公式なものだから、扱いには気をつけてね。それと、空港での客引きタクシーには気をつけるように、と、そんなことは言うまでもないよね」

「ええ、ありがとうございます」

高史は、彼から手渡された一枚のメモにざっと目を通した。アメリカ連邦交通局や、新交通システム公社の幹部の名前が列記されていた。こんなものを与えられたまでにはいいが、どうやって取材のア

ポイントメントを取って、どうやって会いに行けばいいのだろうか？  
一人腕を組んで考え込んでしまった。

二

六時を回って、高史が芸術写真編集部に戻ると、静香が調べ物をしていた。真剣な顔でパソコンのディスプレイに向かっている。こっちはこっちで色々忙しいのだ。この会社では色物扱いされているが、売り上げ部数八千部の月刊雑誌を作り出しているのだ。それなりに苦労はあるというものだ。

「中原君、アメリカに行くんだって？」

ちらりと、こちらに視線をやり、すぐに手元に戻った。浮かない顔だ。

「ええ、お土産は何がいいですか？」

「そうねえ、……」

彼女はぼんやりと天井を眺めて、手のひらを頬へやった。本気で土産がもらえると思っているのだろうか？ それに、派遣期間はどれくらいになるのか自分でも想像もつかないが、土産物を買いに街に繰り出すなど考えられない。せいぜい、空港の免税ショップで化粧品を買ってくるくらいのものだ。

「で、今何を調べているんですか？」

「こつくりさんも、却下されちゃったのよ。取り敢えず、来月号は別の記事を載せるんだけど、……他に読者の気を引きそうな都市伝説はないかな？」

「都市伝説ですか？ ううん」

高史はふと、アメリカで開発されている夢の超特急のことを思い浮かべた。オカルトではないが、十分読者の気を引くことは間違いないだろう。

「お墓つてあるじゃない？」

「ええ」

「よく、有名人のお墓が盗まれたり、砕いてかけらを持ち去られたりする事件があるじゃない。例えば、清水の次郎長のお墓がギャンブル好きの人の標的になったり、……これは何か運にあやかるうとしてらしいけど、そうした行為は果たして何か祟りめいたことに結びつかないのか。どう思う？」

「はあ、お墓の話ですか。確かに、祀り方が悪いだけでも不運を呼び込んだりとか聞きますもんねえ。何らかの悪影響はあると思いますよ」

しかし、以前、こういった特集を組んだことがあった。高史はそれとなく、彼女がそれを思い出すよう誘導した。

「そうだっけ？　じゃあ、また別のを考えなきゃ」

「少し休んだ方がいいですよ。コーヒー入れましょつか？」

静香はうつんと言う声を出し、背もたれに体重を掛けて座ったまま背伸びした。

「悪いわね。ブラックで」

「はい、はい」

高史はキャビネット横のコーヒーメーカーから注ぎ口として、ポットが空になっているのに気づいた。時間が掛かるが、フィルターを取り替えてコーヒー豆を入れ、水を足して加熱ボタンを押した。こぼこぼという音を立ててコーヒーの甘い香りが漂いだした。本当に美味しいのは一杯目だけだなと思った。

時間を掛けて、コーヒーを入れて持って行くと、静香はもう気分が切り替わったようで、別の資料を調べていた。あまり心配はないようだ。

「ありがとう」

静香は高史の入れたコーヒーを受け取って一口飲んだ。ほっと小さく息をした。

「それで、他のテーマは見つかったんですか？」



「伊豆の廃病院で、写真に幽霊が出るそうよ。蓮見君と一緒に取材してこようかな」

静香はカメラマンの蓮見の名前を挙げた。もうすでに、メンバーとしてはカウントされていないみたいで寂しかった。

「廃病院に幽霊って、また、編集長にありきたりだと言われないうすかね？」

「皮肉を言わないで。やっぱり、取材記者は現場に出てなんぼのものよ。インターネットで探している間は、あまりいいネタにはぶつからないものよ」

「そんなこともないと思いますけどねえ」

「例えば？」静香は少しむっとした顔で反論した。

「うーん、例えばコックリさんでも、最近ではデジタルなものもあるですよ。ネット上の誰かとながり、タッチパッドの上でこ託宣を受けたりするのもあるそうです。調べてみては？」

「タッチパッドでコックリさん？」

タッチパッドはノートパソコンについている入力ツールのことである。静香は自分の手元にあるタッチパッドの上に何気なく手を置いた。

「お！確かに引つかかるものを感じるわ。ありがとう！」

嬉々として、インターネット上の情報集めを開始した。高史はそれだけ見届けると、机の引き出しから、名刺や電子辞書など出張に必要なものを出し、整理し始めた。

心残りなのは、咲子を一人だけにしてしまうことだ。静香などに相談しても、もう大学生なのだから心配ないと、人ごとのように言うが、両親を事故で亡くしてからというもの、親代わりになって面倒を見てきた高史に取り、娘以上の存在であるのには違いはない。いつまでも、子供なのだ。

だが、いつかは手元を離れるときが来るのかも知れない。それが今回の出張なのかもと、ぶつぶつつぶやいていると、静香に聞かれたのか、大声で笑われた。

「きゃはははは、心配性ね。そんなんじゃ、妹さんに彼氏も出来ないじゃない」

高史はむっとした。

「まだ早いですよ。学生ですよ。彼氏なんて社会人になってからでいいんですよ」

「ふっるー！ あたしだったらぐれちやうかも」

ふざける静香をよそめに、自分の仕事を進めた。

総務課で取ってくれたのは、ニューヨーク市街地のホテルだ。連邦交通局などの官庁街はワシントンにあり、バスか地下鉄で行かなければならない。高史の英会話力では、途中で誰かに道を尋ねるなど想定外である。先にしっかりと調べておき、地下鉄の番号やホーム番線メモしておくのだ。メモと行き先表示板と見比べることくらいならたやすいことだ。

「お、あつたわよ。これかしら？」

「ええ？」

うっとうしそうな声で返事する高史を置いて、静香は嬉々としていた。

見つけたホームページはタッチパッドでコックリさんをやる方法について書かれていた。適当な情報だったが、意外と当たるものだ。ルールではネット上で三人以上で実施、一人が質問者になり、残りの二人ないし三人がタッチパッドに指を乗せる。このサイト上では十円玉と方陣が表示され、見えない力によって十円玉が誘導されるというものだった。

静香がちらりとこちらを見た。

「駄目ですよ。僕は時間がないし、それに、三人以上必要でしょう。四人はいるかな」

「そうねえ、やった人の記事はないのかしら？ 調べておきましょう」

そう言って、再びパソコンに向かいだした。こうなったら、夜十時頃まで作業を続けるだろう。ちなみに彼女は自動車通勤をしてい

て会社と契約している月極駐車場にとめている。この会社では基本的に自動車通勤は認めていないのだが、雑誌記者として、郊外の廃屋や病院跡地、墓場などに出向くことが多いので漫然と認められるにいたっていた。高史たち経済一部からの出身者はもちろん認められていない。

「さて、と」

高史は腕時計で時間を確かめた。午後八時前になっていた。

明日の午後の便で成田を発つのだ。それまでに着替えや下着の買い物にも行っておきたかった。

「では、お先に失礼します」

「えー？ もう帰るの？」

「明日の便で渡米するんですよ。買い物やなんかが必要なので、早めに出がらせてもらいます」

「そうね、でも、どのくらいいるの？」

「わかりません」

「じゃあ、下着なんかどうするのよ？」

割と小うるさいところがあった。

下着なんかはホテルのランドリーサービスを使う気である。最低一週間分あれば、それ以上は洗って使い回ししなければ、荷物は際限なく増えていくだろう。それに、静香の言うとおり、何週間の滞在になるのか、自分でも皆目検討がつかないのだ。

「あのさ、すぐに食べ物で困ると思うから、これ持って行きなよ」

静香は机の引き出しから、即席味噌汁の素を取り出した。普段はコンビニエンスストアで買ってきたおにぎりとこれを昼食にしていた。

「いや、別に困ってないからいいですよ」

「そんなことないって、あたしも海外に行ったら絶対味噌汁が恋しくなるもん」

「海外に行っただんですか？」

「三年前の夏休みにハワイにね」

「へえ」

静香がハワイとは意外だった。それに、彼女のことに関しては、そんなに昔のことは知らなかった。ずっと、オカルト雑誌記者をやっているのかも謎だ。まあ、そんなことはともかくとして、言い争うのも時間がなかつたので、受け取って鞆の中に入れておいた。

三

兄を東京駅の成田空港行きリムジンバス乗り場まで見送ってから、咲子はひとりぼっちになってしまった。数週間もしないうちに帰っては来るだろうが、不定期で孤独になるのは初めてだった。何となく不安になり、友達に電話したりしてみたりするが、切れるとすぐに不安になった。そんな折、兄の同僚の静香からお誘いの電話があった。

「今週の金曜日、開いてる？」

「はい、予定はないですけど」

「伊豆に行くのよ。一緒に行かない？ 気分転換になるわよ」

「えー？ お仕事でしょう？ お邪魔になるんじゃないかと」

「そんなことないわ。他にカメラマンの蓮見君というのがいるんだけど、一人ぐらいゲストがいたって構わないわ。それに、中原君から妹のことをよろしくと言われてるし」

「そうだったんですか」

兄がそんなに気にしてしてくれたとは知らなかった。蓮見のことは前に編集部に行ったとき、紹介された記憶があった。二十代後半の背の高い男だ。大阪芸術工科大学映像学科卒のカメラマンの玉子らしい。もつとも、玉子と言うには少し年が行き過ぎているだろう。取り敢えず、OKの返事をして電話を切った。

木曜日、大学の講義を終えてから、徒歩でアルバイト先である英

進塾へ向かった。

「先生。捜査は進んでいるのか？」

廊下を歩いていると、突っ慳貪な態度で、生徒の一人が声を掛けしてきた。青野裕だ。中学の制服を着ているが、校内ではないせいかわたんとホックを外している。今気がついたが、彼は飯星遥香の通っていた中学の制服とデザインが異なっていた。

「さあ、警察で調べているんでしょう。青野君ってば、飯星さんとはどこで知り合ったの？」

「余計なお世話」

彼は子供っぽく横を向いた。

「この塾で？」

「ああ」

「ふうん」

「何だよ？」

「別に」

咲子とはぼけて、彼を振り切り職員室に入ろうとした。青野が飯星のことを好きだったのが、その態度でありありとわかってしまう。ドアノブに手を触れたとき、彼の意図がイメージとして伝わった。

このままでいいのか？

「何が？」

咲子がつぶやくと、青野はきよとした顔になった。

「俺、何にも言ってるねえぜ」

「あ、ああ、ごめんなさい。空耳かな？ ねえ、青野君、飯星さんのことで何か手懸かりはないのかな。先生、力になれないかも知れないけど」

「あいつら、……何かやばい連中とつきあっていたんじゃないかって、……あくまでも憶測だけど、……他の連中には言うなよ。そいつらがやばくなって飯星を拉致したんじゃないかって思うんだ」  
「そいつらって、暴力団みたいななの？」

「わかんない」

それだけ言うと、青野は教室の方に行ってしまった。気がつくとも他の生徒達が廊下に出て、こちらの方を見ていた。何だか感づかれるとやばいことなのかも知れなかった。違法なドラッグがどうかという、あの話のことが絡んでいるのだろうか、気になった。

職員室には幸いなことに、大野と西海はいなかった。外でタバコでも吸っているのかもしれない。

普段なら次の授業の準備に余念のない彼らのことだ、すぐに戻ってくるだろう。咲子は、彼らに見つからないようにこっそりと職員室のキャビネットを開けて、塾生名簿を繰り始めた。以前、青野から聞いたアヤノ、サヤカという名前を探してみようと思ったのだ。

全くとりとめのない情報に過ぎないが、もしも、卒業生の中にその名前を見いだすことが出来れば、一気に彼の情報は現実味を帯びてくるような気がした。

が、ここ数年の生徒の中にアヤノ、アヤカ、サヤカと言った名前は複数いた。みんな、Aクラスの難度の高校に進学している。まさか、生きたまま霊になって出てくるとは思えないから、飯屋遥香のコックリさんに出てきたのとは違う人物だと考えていいだろう。

十年前くらいになるとさすがに、この手の名前は減ってくる。二十年前のものとなると子のつく名前が主流となる。と、同時にパソコンが普及する前の時代のものとなり、紙のファイルに手書き文字というデータとなって、判読するのが難しくなってきた。

「中原君何をしているの？」

背後から西海が呼び止めた。咲子はドキリとして振り向いた。

「あの、卒業生で亡くなった方っていらっしやいませんか？」

「何だって？」

西海は怪訝そうな目で咲子を見た。「何を調べようと言うんだい？」

「ええと、……飯星さんがいなくなった当日、コツクリさんをしていたんです。そのときに呼び出した霊でアヤノとかサヤカとかいう名前の子がいるらしいんです。もしかしたらこの卒業生なのではないかと思って」

「コツクリさん？ 馬鹿馬鹿しい。飯星遥香はストーカー男に誘拐されて殺されたんだろう。犯人も逮捕されたじゃないか。今更何を言っているんだ。君おかしんじゃないか」

「だって」

「それに、うちの卒業生に物故者がいてもおかしくはないぜ、校長がこの塾を始めてから四十年も経つんだ。一人や二人はいても不自然じゃないさ」

西海は咲子の言うことに真っ向から反論した。言われてみればその通りなのが悔しいところである。

「では、アヤノかサヤカという名前に聞き覚えはありませんか？」

「今時、どこにでもいる名前じゃないか。一学年に二、三人はいそうだぜ」

「その中に、卒業前に亡くなった方は……」

「俺の知る限りはない」

「そうですね」

コツクリさんに否定的な西海相手に議論していても仕方がない、そう思った咲子は名簿を元あったところに戻し、授業の準備を始めた。もうまもなく六時からの一時間目が始まる。

授業が終わって、咲子が教室の後始末をしていると、塩野校長に呼び止められた。

「卒業生の物故者を調べていたそうですね？」

「はい」

西海が告げ口したに違いない。

「何の意図ですかな？」

「えーと」

「わたしがそれとなく探ってくれと頼んだのは、中嶋たち素行不良の生徒がよからぬことをしてないかどうか確認することだけです。この塾の問題を洗い出すことではありません。その所をはき違えてもらっては困る」

塩野のこめかみには血管が浮き出てい、顔色は紅潮していた。握った拳がぶるぶると震えていることから興奮しているのが読み取れた。

「もちろんです。わたしもそんな大それたことを企んでいるわけはありません」

咲子も言下に否定した。校長に変な言いがかりをつけられ、講師の職を首になつてしまつては元も子もない。ただ、中嶋たちの素行がただ単に悪いと言うだけではなく、塾の組織がらみの悪行があるように思えてならないのだ。コツクリさんで呼び出した霊が、この塾のOBである様な気がしてならないのもそのためだった。関係のない人に取り憑いて悪さをする悪霊も聞いたことがあるが、大抵の場合、何らかの縁があつた人の所に出てくるものだ。だから、中嶋や飯星たちがコツクリさんをやつたときに出てきたのも彼女たちに何らかのつながりがあつたものと考えられる。それがこの塾だった。「あの子たちが授業中にコツクリさんをやつていたのは、注意不行き届きであることは言うまでもありませんが、そのときに呼び出した霊がこの塾のOBである様な気がしたんです。それで、この塾の名簿で物故者となつている人の名前を探そうとしたんです」

「ほう、それで見つかりましたかな？」

塩野は嫌みめいた口調で尋ねた。

「いいえ。この三、四年ではありませんでした」

「まあ、調べてみるなら調べてみるがいいでしょう。何も出てきやしないだろうがね」

「調べます」

咲子は言い切つた。

「勝手にせい！」



塩野は不機嫌になり、ドアをばたんと開けて出て行った。

ああ、どうしよう。

即座に後悔の念に捕らわれた。校長を怒らせてしまったのは、たちまち、自分の身が危うくなる。余計なことに首を突っ込んだばかりに、アルバイトをクビになってしまいそうだった。と、同時に中学校教員を目指していたのも、もう無理かもと思い始めていた。たった三人だけの塾でも人間関係がうまくいかないのだ。大勢の教員と生徒との間で自分がうまくやっていける自信はもうこれっぽっちもなかったのだ。

言い出した以上、仕方なしにまた古い名簿を調べ始めた。

「アヤノ、アヤノ、どんな字だろう？」

一九九〇年度の生徒名簿をめぐったとき、女子の一番最初にその名前はあった。

「綾野沙也加！」

アヤノか、サヤカかという名ではなく、フルネームで綾野沙也加だった。

しかも、彼女は卒業をまたずに塾を辞めている。成績は上位だった。

「何があっただらろう？」

三学期までの成績表があるだけで、それ以上のことはわからなかった。咲子は住所と生年月日だけメモして名簿ファイルをキャビネットに戻した。

チャイムが廊下に流れていた。ピンポンパーンパーン。

咲子は腕時計を見た。

「行かなきゃ」

国語の教材を抱えて教室へと小走りで急いだ。

6 地下鉄に乗って（前書き）

2011・09・13	第3節掲載
2011・09・12	第1、2節掲載

## 6・地下鉄に乗って

—

高史は、マンハッタン島の外れにあるホテル・モーリスのツインルームでスーツケースの中から普段着を取り出し、スーツから着替えていた。成田から、ロサンゼルス経由でニューヨークまで飛び、バスで市街地入りし、休暇もなくホテルに直行した。おまけに機内ではエコノミークラスで十数時間もいたものだから、すっかりエコノミークラス症候群になりかけていた。

「恐ろしく狭かったな。路線バスのシートくらい固かったし」

窓の外の車の渋滞を見下ろしながらつぶやいた。でも、着いたのはほんの始まりに過ぎない。これからが本番なのだ。顔も知らない相手に取材を申し込んで、英語で聞き取りをしなければならぬのだ。どうなることが自分でも皆目見当がつかなかった。

ベッドの上に倒れ込んで、ぎゅっぎゅっとしなるバネの感触を楽しみながら仰向けになると背中が伸びて、気持ちがよかった。目をつぶるといつの間にか深い眠りに落ちていた。

目が覚めたとき、日本から持って行った携帯電話の呼び出し音が鳴り響いていた。おそらく大分前から鳴っていたと思われる。日本の杉山からだった。

「もしもし」

「こんばんは、というべきか、おはようというべきか迷うが、大丈夫かい？」

「ええ」

「無事に着いたなら着いたと、ちゃんと報告を入れておくべきだよ。」

余計な仕事が増える」

「すみません」

「それで、今はホテルかな？」

「ええ」

「先方とのアポ取りなんかは、してあるのか？」

「これからです」

「ほとんどの相手はニューヨーク事務所だから、ワシントンに移動することは無いと思う。それに、スーパー・メトロの始発はニューヨーク市だ。しつかり、街を観察するといい」

「ありがとうございます」

「じゃあ、困ったことがあったら、日本時間の九時から六時の間に電話してくれ」

「わかりました」

身勝手なことを言うと思った。

あれ、確か、杉山はベトナムに飛ぶと言っていたはずだった。この電話はどこからしたのだろうと不審に思った。

部屋の時計を見ると午前八時を回っていた。日本との時差はマイナス十六時間だから、日本では翌日の午前0時ということになる。やはり、こちらの身を案じて夜遅く掛けてくれたと解釈するほかないのだろう。

シャワーだけ浴びてスーツを着ると、取材グッズを入れた鞆だけ持ち、ホテルを出た。時差ぼけのせいか、急に眠たくなってきた。近くにマクドナルドがあったので、そこで朝食を注文する。絵の描いてある表を指さして言った。

「デイス、ワンセット、プリーズ」

これ一つ下さい、と、簡単な英会話ですむのありがたい。出てきたトレイを持って席に移動した。

ハンバーガーをほおばりながら、これからのことを考えた。クリファイルに綴じ込んだある名簿を全部当てるのは不可能だし、出来れば、取れる情報料の大きな人物一人に絞り込めればと思った。

だとすると、闇雲に政府高官を狙うのは必ずしもいいことではない。細かいことを知らない可能性もあるからだ。今回の取材ではベトナムの飯星鉄工所の納める線路用コイル鋼板と、真空気密フランジがメインだから、運行面に詳しい人物でないと、そこら当たりのことを聞けないかも知れなかった。

冷めてしまったホットコーヒーをぐいっと飲み干し、トレイの中身だけゴミ箱に投げ入れ、高史は店を出た。店の中にいるときはあまり実感しなかったが、すでに十一月となり秋のニューヨークは結構寒かった。ぶるるっと背筋が凍え、両の手で、コートの襟をぎゅっと握りしめた。手袋も持ってくるんだったと後悔した。

三十丁目駅の入り口を見つけ、そこから階段を下りていった。

日本の地下鉄と異なるのは、深度が浅いことだ。少しだけ地面を掘り下げて、上からふたをするような方式で地下鉄が縦横に走っている。だから、入り口も上り線と下り線とでは異なる場合があり、慣れるまでが大変だ。高史はガイドブックに載っている通りに進んでいった。

改札の横に券売機があり、磁気カード式の回数券を買うようになっている。料金は一律二ドルだった。高史は十回分の二十ドルを入れて券を買った。

改札は磁気カードを読み取り機にこすってから、ピツと言う音がしてから、手動式の回転バーを回して構内に入ることが出来る。が、タイミングが合わないと、がちやつと途中でバーが止まってしまう。高史は誰に文句を言っているのかわからず、仕方なしにもう一度磁気カードを読み取り機にこすった。ぴっ。

がちやり、と回転バーを回した。二ドル損をした。

これからブルックリン地区にあるスーパー・メトロ幹部に会いに行くつもりだった。昨日の晩、パソコンを駆使して行き道だけはいさつきり調べてあった。不慣れな地下鉄で不安があったが、取材記者の身故仕方がない。車両に乗り込むと、くたびれた白い皮膚をした、

中年男がじつとりと下から上までねめつけるような視線でこちらを見た。反対側の席には黒人の四十代の男と、同じくらいの女性が座って早口の英語で話していた。何を言っているのか聞き取れないが、あまり楽しそうでないことだけは直感でわかった。

高史は席に着くことも出来ず、かといって席を替わることも出来ず、動物園の熊のように、うろろろしながら吊革につかまっていた。車内放送がないことに違和感を抱きつつ、ガイドブック上の地図で駅数を数え、車両を降りた。

駅から出て、地上に出てみると、やはり、全く土地勘がないことにとまどいを覚えてしまう。どっちへ行けばいいのかすらわからない。

「エクスキューズミー？」

道行く人に声をかけるが、面倒なことに関わるのはごめんだよという風な顔をされ、誰も相手にしてくれない。

そうこうしている間に、時間は過ぎていく。

## 二

ホテルとマクドナルドと、そして地下鉄巡りばかりをしながら、三週間ばかり経った頃、ある出会いがあった。どこの街にもある小さな教会の前で、ピラを配っていた男と仲良くなったのだ。

男の名はロナルド・ヤマダ。年は七十くらいで白髪、体格は平均的な日本人のおじいさんと言ったくらい。彼は日系三世のアメリカ人と自己紹介した。

「わたしのおじいさんは日本から来たね。わたしはパン屋を営んでいる。教会には毎週通っている」

ピラを見れば、毎週日曜日には教会に通いましょうといったことが書かれてあった。どうやら、熱心なクリスチャンらしい。それに、日本語の通じる人が恋しくなりつつあった。高史は彼に誘われるま

ま、このプロテスタント系の教会にしばらく通うことになった。行って何をするわけでもない。ただ、このコミュニティーには色々な人が出入りしていて、大企業の経営者や、あるいは弁護士、医師、市議員などロナルドを介して紹介してもらえば、話くらいは聞けるようになったのだ。ロナルドの日本語はどちらかというと、たどたどしい部類に入る。ことわざや四字熟語は駄目だし、しかし、おじいさんから習っただけにしてはよくできる方だと考えざるを得ない。

それに、ロナルドが朝持って来て教会で配っているパンは美味しかった。

「どうやら、小さなパン屋でなく大きな製パン会社であるみたいだった。」

「明日からバターも持ってこようか？」

「いや、結構ですよ」

「ふおおおお、パンとバターというと、英語では生活の糧を意味するのだよ。ジョークが通じなかったようだな」

ロナルドはそう言って、嬉しそうに笑った。

高史は、彼に相談してみようかと言う気になった。

「ロナルド、ここに来る人で、アメリカ交通局の人はいないかい？」

「さあねえ、色んな人が来るけど、仕事の話はしないからな。何なら牧師に聞いてみるといい」

ロナルドに間に入ってもらえれば、自分のたどたどしい英語に頼らなくていいと、少し大胆になった。

いつも日曜日に来る大柄の白人男性が興味を持ったのか、話しかけてきた。

「お前さんが中国人が聞いているぞ」

ロナルドが通訳した。どうやら、東洋人と見ると中国人だと思われるらしい。それほど、多くの中国人がこちらで活躍しているということだ。

「アイム、ジャパニーズ。ハウ・ドウ・ユウ・ドウ？」

「ありがとう、元気だと答えている。以前はそれほど教会に来たことがなかったが、孫が生まれてからよく来るようになったと言っている」

白人の頭髪はロマンスグレイで、シャツにジャケットとラフな格好だったが、どこことなく気品を感じさせた。貴族制度はこの国にはないが、もしヨーロッパで出会っていれば、そのように思えたであろう。あいにく、彼の話す言葉は全然と言っていいほど聞き取れない。ロナルドの通訳はほぼ直訳に等しいから、英語特有の言い回しがあったとしても、当意即妙に訳してはくれない。

「わたしは、日本のオカルト雑誌の記者です」

「それで教会に来たのか？ 興味深い、と彼は言っている」

「もしよければ、一冊贈呈したい」

鞆の中から、芸術写真のバックナンバーを取り出し、彼に見せた。日本語はロナルドも読めなかったし、彼にも通じない、だが、心靈写真など、おどろおどろしいものは雰囲気だけでも楽しめる人には楽しめるものだ。

「これが日本の幽霊か？」

ロナルドが聞いた。

「もちろん、眉唾、いや、疑う人もいる。科学的に証明できる現象だと言う意見の人たちだ。だが、この雑誌自体は、幽霊の存在を肯定的に考えている」

「そうか、どちらにしても興味深い、と彼は言っている。それに眉唾とは何だ？」

「ああ、眉唾とは、……眉に唾をつけるのだが、……ああ、キツネに化かされたときに眉に唾をつけるおまじないをするとキツネの霊力が解けると言われている」

「キツネが人を化かすのか？ と彼は聞いている」

白人男性は興味深げになってきた。高史は変なところで興味を持たれて少し閉口していた。

「キツネはキツネでも動物のそれではなく、魔物のキツネです。昔



から人をだましたり、あるいは信仰の対象にしたりと、神格化された存在です」

高史は自分でも、どこからどこまでが真実なのかわからないまま日本語でロナルドに説明した。普段、日本の編集部にいるとキツネというと、魔物のキツネと相場が決まっているのだが、こちらではFOX以外の何者でもない。ましてや、キツネを拝むなどとはどうてい信じてはもらえそうになかった。

「アイ・ハブ・ハード・アバウト・コックリサン」

「コックリさん？」ロナルドが白人男性に聞き返した。彼の辞書にもなかったようだ。

白人男性はコックリさんというのを聞いたことがあるらしかった。キツネの霊のご託宣を受けて占ったりするものという認識があるらしい。

「そのコックリさんについていま調べて記事にしたいと思っているんです」

「アメリカにはウィジャ盤という子供の遊び道具があるが、それと同じようなものか？」

ロナルド自身が質問した。

「ええ、基本的には同じです」

白人男性は牧師の姿が前方に見えると、会話を打ち切った。何か用事があるらしい。

「もう少し話してみたいのだが、あいにく今日は用事がある。もしよければ、後日オフィスに尋ねてもらっていいと言っている」

「喜んで。あ、名前を伺っていなかったですね。わたしは、中原高史です」

「アイム・ジョン・スミス」

彼はジョン・スミスと名乗った。英語の教科書に出てきた典型的なアメリカ人を思い出した。まさか、偽名ではないだろうかとロナルドを見た。

「彼はジョン・スミスという名前だそうだ」

そうして、ジョンから名刺を受け取った。どこかで聞いたことがあると思つたら、連邦交通局の係官だった。

「あの？　もしかして、スーパー・メトロ計画にかかわっておいでですか？」

「日本のオカルト雑誌は新世代交通システムも取り扱うのか？　と彼は言っている」

「同じ出版社で経済ジャーナルという雑誌で特集を組んでいるんです」

高史は、もう一冊の雑誌を出した。日本語ばかりで理解できないよという顔で、高史はロナルドに頼るしかない。

「タカシ・ナカハラ。残念ながらわたしは日本語の文字は読めない」

高史は簡単に自分のつかんでいる情報をロナルド経由でジョンに伝え、取材に応じてもらえるよう頼み込んだ。

「この計画に日本の資金が入ってくるのは大歓迎だ。元々巨額の費用がかかり、税金だけでは遂行は困難と考えられている。だが、こちらも、簡単に説明するのは難しい。時間を作るから後日取材に来てもらいたい、だそうだ。それでいいか、若造」

「ええ、ありがとうございます」

少しだけホツとした。ある程度の地位の人物から、計画概要を伝えてもらえればそれで今回の取材は大成功と思うからだ。それに、日本ではわからない問題点の一つも付け加えることが出来たなら、大きな顔で帰国できるに違いない。この出会いを作ってくれた教会とロナルドに心から感謝した。

### 三

西堀健二はテレビニュースで、先日逮捕された女子中学生誘拐事件の被疑者にえん罪疑惑・誤認逮捕の疑いが出てきていることに不

安を感じていた。

十八歳で飯星鉄工所に入り、一人前の溶接工になるまで修行した後、大曲聡らと労働組合運動に精を出し、会社の海外移転に異を唱えてきたことに少し自信をなくしかけていた。もう四十五歳になり、いま、会社を辞めたら他に行く当てなどなかったのだ。

「そもそも、どうして死体が見つかったんだ。見つからないはずじやなかったのか？」

西堀は大曲を責めた。

「なんで見つかったんか、わいにもわかれへん。裸にしてロープでぐるぐる巻きにして石を抱かせて川に沈めたんや。長雨で増水するやなんて、想定外やった」

大曲は、高校を卒業してから上京して、二十年あまり経つのにちつとも抜けない関西弁で言い逃れしようとした。

「これだけじゃない。社長のベトナムの愛人のことをかぎつけて、探偵を雇って写真を撮って、奥さんに送りつけたときも、何の効果もなかった」

「あれも想定外やった」

「あれも、これも、みんな想定外か？ 策士が聞いてあきれる」

あのととき、ベトナムで女を囲っているという情報を伝え聞き、探偵に高額な費用を払って、現場の写真を撮って奥さんに郵送したのだ。そうすれば、奥さんは日本から離れてベトナムの夫の元から離れなくなるか、逆に社長を日本に呼び戻すかして、少なくとも日本で組合つぶしをしている奥さんの戦力を割くことになると思ったのだ。

策は大曲が考えた。

こうした陰謀が根っから好きらしく、案を次から次から考え出すことに長けていた。西堀は根は工員である。大曲のやり方は好きではなかったが、自分の居場所である鉄工所が日本から消えてなくなる現状に耐えられず、こうした労働組合の裏工作に従事していた。だが、策士策に溺れるということわざ通り、大曲の策は机上の案で

しかなかった。

社長の奥さんは自分たちが考える以上に、賢く、会社を愛している女性だったし、自分たちのやることなすことうまくいかないのは、想定外のことが起こっているのではなく、自分たちの現状認識が甘すぎるという一点に尽きることによろやく気づき始めていた。

十月二十日の夜、社長の娘が塾に入ったことを大曲が知らせてきた。聞くもおぞましい策略だった。娘をレイプし、それをビデオに撮影する。ビデオをインターネットに流されなくなったら、会社の海外移転を即刻取りやめよと、要求する計画だった。いくら社長でも娘の名誉には代えられないだろう。西堀はこの計画を聞いたとき、吐き気がするほどおぞましい気持ちになった。

だが、一週間前に奥さんに呼びつけられ、来月からのベトナム・ホー・チ・ミン工場への転勤か、一ヶ月以内の解雇かどちらかを選べと言われたとき、考えを保留したままずっと悩み続けていたのだ。結論の出せないヤツに批判する資格はないと、大曲にけしかけられもした。

そして、ついに決断した。とはいうものの、自称策士の大曲の書いた作戦通りの役割を演じるだけだった。十月二十日の八時四十分、塾が終わった後、娘の遥香は友人の中島裕美果の母親の車に便乗して帰ってくる。そこに、急用で母親がベトナムに行くことになったからと、空港まで行くので乗ってくれと、西堀のホンダ・フィットに乗せて、会社の近くの空き倉庫へと連れ込むのだ。

「本当に、母は急用だと言ったんですか？」

そのとき、遥香は疑い深い目で西堀を見た。今まで、会社に敵対的な立場であったことから、容易に信用されない可能性はあった。

「ええ、ベトナム工場でラインが止まる事故があり、専務もサポートのために急遽現地に飛ぶことになったんです。それで今日はお母様の代わりにお迎えに来ました」

どうぞ、と、西堀はドアを開けた。遥香は心配そうに、母親達が

迎えに来ている友達の方をちらりとみたが、普段仲のいいはずの中島裕美果も今日は別行動らしく、誰も邪魔には入らなかった。彼女是不承不承、フィットの助手席に座った。

怪しまれないよう、シートベルトを締め、じわりとアクセルペダルを踏み込んだ。

すーっと、住宅地の中を人目につかないように、一方通行の道ばかりを選んで進んだ。

会社の近くまで来ると、遥香は不審に思いだした。

「本当にお母さんの指示なの？」

「ええ、本当ですよ。まだ事務所にいらっしゃると思うのでそちらに」

「本当？」

西堀は、もう大曲のプログラム通りに動くしかなかった。

大田区にある会社営業所の近くの空き倉庫の扉はあらかじめ、鍵が壊され、大曲が潜んでいるはずだった。きよるきよると見渡すと、大曲が手配したレンタカーのボンゴが止まっていた。ビデオ機材や照明なんかを積み込んでいたはずだ。

倉庫前まで来ると、西堀は急ハンドルを切って、強引にクルマを寄せた。

「きゃっ、何をするんですか！」

咎めるような声で、遥香がわめいた。

西堀は、クルマから降りると反対側に回り込み、ドアを開けて、遥香の手首をつかんで引きづりおろした。子供のような細い手首だった。抵抗しているように見えたが、まだ、現状をよく認識していないようで、大声を上げようかどうしようか迷っているように見えた。

「声を出すな。こっちへ来い」

低い声で威圧しながら、彼女の肩を抱き抱えるようにして、倉庫の中に押し込んでシャッターを下ろした。

「ええタイミングで来よったな。ビデオの準備が出来たとこや」大

曲の声がした。見ると、スタンドに照明器が据え付けられ、その横にはビデオカメラが固定されていた。

目の前には薄汚れたマットが敷かれていた。

遥香を大曲の手に託した。

「あなたたち、何をやる気なの？ ママにいつつけるわよ」

「ふん、せいせい、毒づくがええわ。いえんようにしたるからな」

大曲は力づくで遥香の体をマットの上に押さえつけ、スカートをたくし上げた。ビデオは回っている。青白いぷるんとした太ももがなまめかしく見えた。遥香はばたばたと手足を振り回しもがいた。

そして、口を押さえようとすると大曲の指にかみついた。ぎゃつと言つてふりほどき、反対側の手で彼女の頬をはたいた。

大曲はポケットの中から注射器を取り出すとキヤップを外し、彼女の腕を押さえつけ、ごしごしとこすり、浮き上がった静脈に慣れた手つきで針を突き立てた。

「お、おい、大曲それはなんだ？」

「ふふ、じきにええ気分にしたるさかいな」

大曲の唇がいびつにゆがみ、黄色い歯が見えた。

覚醒剤か？

遥香の手から力が抜け、目がとろんとしてきた。大曲は彼女の上着を脱がせるために、腕を取り筒袖から抜き取った。そしてブラウスをはがすと、彼女の白い上半身があらわになった。そして、スカートをまくり上げパンティーに手を掛け一気に脱がせた。

「あぐう」

突如、彼女の口から異音が発せられた。ぐぐう、うう、ううう、

……

そして、口から胃液がはき出され、上半身がエビのように反り返り、けいれんし始めた、びくん、びくん、手足を広げたまま、びくびくとけいれんし続ける。

こないたいけな少女に何と云うことをするのだ。西堀は目をそらした。

「どうなっているんだ？」

「あかん、急性中毒や、……おい、しつかりせい、おい！」

大曲は右手で彼女の頬を何度も叩いた。が、意識はますます遠のいていく。

二時間が経過し、彼女の体は動かなくなったまま段々と冷たくなっていった。

「おい、死んだんじゃないか？」

西堀の問いに彼は答えなかった。わいせつなビデオを撮って恐喝するだけのつもりだったのが、過失致死になってしまった。いや、悪くすると殺人罪に問われかねない。

「死体を始末せなあかん」

「まさか、お前こんなこと、慣れてるんじゃないだろうな？」

「あほか、初めてや。俺ら同罪やぞ。ええな」

後は二人して彼女の死体を川に沈めることしか意識になかった。遺体から衣服をはぎ取り、素っ裸にしてコンクリートブロックを腹に抱かせて手首と足首をロープでしばる。そうして、深夜になるまで倉庫で隠れ、夜陰に乗じて荒川の土手から川の中に転がり落とした。暗闇での作業だったから、どの位の深さにまで沈んだのかは不明である。しかし、水の濁り具合から言って、岸から見つかることは考えられなかった。

衣服や鞆は、河川敷でドラム缶に入れて燃やし、証拠は全て隠滅した。

事件以来びくびくしていた西堀だったが、警察は早期に彼女の身辺でうろつろしていた大学生をストーカーと見なして逮捕してしまった。しかも、彼は覚醒剤の所持もしていた。これで、一安心だと思っていたのだ。だが、世間はそう甘くはない。

捜査が自分たちの身辺に回る以前に、海外に逃亡しようか、今なら、ベトナム行きという格好の名目がある。西堀は大曲にそう話を

持って行った。



7・エイアーノ(前書き)

2	2	2	2
0	0	0	0
1	1	1	1
1	1	1	1
・	・	・	・
0	0	0	0
9	9	9	9
・	・	・	・
2	1	1	1
0	9	8	7
第4節掲載	第3節掲載	第2節掲載	第1節掲載

## 7・エイアーノ

—

十一月十五日、咲子は静香と一緒に伊豆に来ていた。

海岸に面した廃屋の探検に誘われたのだ。普段なら兄の許可なく遠出など出来なかったが、ここ数週間の間、アメリカに行ったきりたまに電話があるくらいで何の監督もなかった。しかも、向こうは時差を気にしてか、こちらが朝の八時きっかりに掛かってきていた。だから、今日の朝も、普段通りに大学に行くというと、電話を切ってしまった。

静香の会社のクルマはシルバーのハイエースだ。運転席と助手席の後部にいすが一つだけあり、残りは荷物スペースになっている。撮影用のカメラやレンズ、照明器具や発電機といった道具がひとそろい載っていた。

「きれいな景色ですね」

後部座席から、助手席の静香に声を掛けた。運転手はカメラマンの蓮見だ。慣れた手つきでハンドルを切り、曲がりくねった国道をスムーズな動きで走り抜けた。積み荷のカメラに気を配っていることは咲子にも感じ取れた。

「咲子ちゃん、伊豆には来たことないの？」

「はい、こつち方面だと鎌倉くらいまでしか」

「ふうん、そうなんだ。もっと、中原君にせがんで連れてってもらいなよ」

「忙しそうだから」

確かにいつも忙しそうだった。

「佐伯さん、ここらです。一旦止めますね」

蓮見はハザードランプを点灯させて、クルマを道路の左側の広くなっているところに止めた。他に走っているクルマもないようだ。

静香は手元の地図と、オーディオコンソール前に付いているナビゲーション画面と照合した。地図は、編集部にメールで寄せられた、幽霊の目撃情報から割り出した、廃病院の位置を示したものだ。走ってみると実際の地形とは若干の誤差があるみたいで、ナビゲーション通りにはたどり着けなかった。

静香が助手席のドアを開けて、降りた。

「ちょっと、走ってみてくるわ」

「ばたん、とドアを閉めて走って行ってしまった。」

「この森の向こうに建物らしきものがある。地図上ではね」

蓮見はそう言った。

二人きりになると、何だか、居心地の悪い空間になってしまう。

咲子はあまり場を持たせるのが得意な方ではない。仲良しである近藤朋香と一緒に、少しはしゃべれるが、三十くらいの男性と二人きりになると何をしゃべっていいのか皆目検討が付かない。

「蓮見さんは、プロのカメラマンなのですか？」

「ありきたりなことしか言えない自分に失望しながら言った。」

「まあ、プロと言っちゃプロだけど、……これで食っているという意味ではね。でも、芸大出身でこんなことしているのは、むしろ落ちこぼれ組だろうね」

「そうなんですか」

「俺の出た芸大の映像美術学科を出たら、大体は関西のテレビ局に入っている。そんで、カメラマンになるか、あるいはディレクターの道をすすむかだ」

「そうなんですか。でも、今の仕事もいいのでは？」

「まあ、好きにやらせてもらっているからな。あ、でも、これは俺の能力を買われているんじゃないやなくて、編集長が変人なだけだ。他の人が上に来たら、真っ先に解雇されちゃう」

蓮見はそんなこと言った。静香の話では、東京芸術祭写真部門で奨励賞を取ったことのある実力らしい。それがどの程度のすごさなのかは、全然知識のない咲子にはわからないが、蓮見がかなり謙遜

していることくらいは察知できた。

しばらく待っても、静香は帰ってこなかった。

「佐伯さん遅いね」

「見てきましたよか？」

「待って、君が行っても危ないだけだ。もう少し待ってしよう」

「はい」

咲子はただ漫然と、静香の帰りを待った。「あー、ここって心靈写真が撮れると聞いたんですけど、本当なんですか？」

「そう言う噂があるのは、確かだけど、僕は信用していないな」

蓮見はぶっきらぼうに言った。

「蓮見さんは写真が専門なんですよな？」

「そうだよ。ほとんどの心靈写真と呼ばれるものは、トリックか、あるいは、偶然の産物でちゃんと、科学的に説明が付くものばかりだ。もつとも、編集長にこんなことを言っても取り上げてもらえないから、神妙にこんな記事につきあっているんだけどね」

その割に、真剣に、専用機材を抱えて、こんな所まで来ているのは仕事のためだからなのだろうか？ まだ、社会人ではない咲子にはその所の、一線を越える行為がよくわかっていない。

「あ！ 戻ってきました」

静香が慌てた表情で、クルマに戻ってきた。

「こっちよ。こっち」静香は手を大きく振った。

「何か見つかったみたいだな。よし、降りてみようか」

「待って、この先までクルマで入れるわ。その方がいいでしょ」

静香は、クルマに駆け寄って来、助手席のドアを開けてどっこいしょと乗り込んだ。蓮見は素早くキーを回しエンジンを掛けた。

「廃病院が見つかったんですね？」

「そうよ。でも、鍵が壊されててだいぶ荒らされているわ」

「じゃあ、日が暮れないうちに、撮影をしましょう」

方向指示器を道路側に点灯させ、後続のクルマがないことを確認しながら、静かにバンを発進させた。うっそうと茂っていた蔓草の

枯れたやつが、クルマのドアをこすってさらさらという音を立てた。それでも、躊躇せずに進んでいく。しばらく進むと、ツタに覆われた木造三階建ての廃墟が姿を現した。窓ガラスはかつてはあったようだが、全て割られ、ドアの鍵も壊され、あちこちにラッカーで書かれた落書きが残っていた。

「何の病院だったんでしょね？」

咲子はつぶやいた。

「さあ、噂では、結核の隔離病棟があったとか、天然痘だったとか、色々説があるわ」

がらがらと、音を立てて、後部シートのスライドドアを開けると、蓮見はビデオカメラを取り出し、肩に担いだ。静香が先頭に立って、内部に侵入する。

床は幸いなことに腐って抜けていなかった。

ぎしりぎしりと音を立て、三人が進んだ。昼間とはいえ、中は暗くじめじめとしていた。本当に病院だったのだろうかと疑うくらいの気持ち悪さだ。機材の類は何も置かれていなかった。廃業したせいののだろうか。

病室の一つに、静香が反応した。

床上に木のボードが落ちていたのだ。ボードにはアルファベットが描かれてあり、こすられた跡があった。

「何だろう？」

静香が首をかしげた。

「ウィジャ盤ではないでしょうか」咲子は朋香から聞いていた西洋版コックリさんを思い出した。なぜ、伊豆の廃病院にこんなものが落ちていのかわからなかったが、患者が置き忘れていったのか、それとも、後から入り込んで悪さをしていったものたちが置いていったのかもしれない。

「あら、傷が付いているわ。A・Y・A・N・O。タブレットが引っ掻いた痕があるわ」

「綾野？ まさか」

咲子には信じられなかった。塾でたまたま目にしたコツクリさんの方陣に關係のある霊が自分についてきたのかと思うと気持ちが悪い。

「咲子ちゃん、心当たりはあるの？」

「いえ、前に塾の生徒がコツクリさんをしていたときに呼び出した霊の名前が綾野沙也加というんです。どうしてここに現れたんだかわかりませんが、……」

「あなたに憑いてきたんだわ」

静香は興味深げにそう言った。冗談ではない、……だが、この霊は自分に何かを伝えようとしてこうして現れたと考えられなくもない。咲子は、目を閉じて神経をとぎすまし、指先でウィジャ盤にそつと触れた。

遥香ちゃん？

この世からいなくなった彼女の気配が伝わってきた。綾野沙也加は遥香のことを伝えようとしたのか？ 不意に意識が怪しくなり、ぼうつと立ちくらみがした。

「ちよつと、しつかりしなさいよ！」

静香に肩を揺すぶられて、我に返った。本気で、悪い霊に取り憑かれたんではないかと、心配してくれている目をしていた。

「それにしても、妙ですね。これだけ置いてあるなんて」

「夜中に誰か入り込んで、肝試しでもやったんじゃない？」

「あの、わたしはもう大丈夫です」

「そう？」

咲子は脚に力を入れてよろよろと立ち上がった。

「ここにいる綾野さんが、遥香ちゃんの事件の真相を教えてくださいな気がするんです」

「ええ？ まさか、コツクリさんを通して？」

さすがの静香も半信半疑そうな顔になった。それならば、契約霊能力者の高山光雲先生に霊視してもらった方がましだと言わんばかりである。

「でも、先に仕事の方、片付けちゃってください」  
「ごめんね、時間が掛かりそうだから、撮影だけ先にやっちゃおうわ」  
静香と蓮見はビデオカメラを持って、病院の中を撮影しに回った。  
廃屋マニア、というのがいるらしい。オカルトの一分野というわけでもないのだが、人の手から離れて、長い間放置され、荒れ果てた家屋のなれの果てというのが、妙にそう言った人たちの心をいやすらしい。芸術写真でもよく取り上げているテーマらしいが、今回の伊豆の廃病院もその一つだった。  
咲子に憑いてきた霊は別にして。

二

マンハッタン九十六丁目近くのオフィスに、ジョン・スミスを訪ねてきた高史は、待合室で少し待つように言われ、一人つきりで手持ちぶさたになっていた。比較的大きな法律事務所のような所で、待合室には、新聞や雑誌が置いてあったが、いずれも、英語かスペイン語のものばかりで、手に取る気にもなれなかった。

前の客との話が長引いているのか、大柄な浅黒い肌をした彼の女性秘書がコーヒーを入れてくれた。

「サンキュー」

紙コップのコーヒーだった。けれど、日本のインスタントのとは違い、ちゃんと豆から入れているものだった。もつとも、ここ三週間、マクドナルドに入り浸りでコーヒーばかり飲んでいる高史にとっては少し食傷気味ではある。舌の上に苦みが残った。

「やあ、待たせてすまない」

ジョン・スミスが目の前に立っていた。グレイの背広に紺のネクタイをきちんと締めている。この間はラフなスタイルだったが、こうしてみると、余計に威厳に満ちて見えた。

「こちらこそ、お時間を取らせてしまって、申し訳ありません」

教科書レベルの英語で、高史は受け答えしていた。だが、今でき

る精一杯の所だ。

ジョンは片手で、高史の背に手を回し、オフィスへと案内した。中はきれいに整理整頓が行き届いていて、机の上は定規で測ったかのように、きちんと置かれていた。彼の性格なのだろうかと、高史は一瞬思った。が、オカルトに興味を抱くのはまた異なる気がする。

「まあ、掛けたまえ」ジョンがソファの長いすを指さした。ソファは高価そうで、機能的なデザインのものであった。

「長年陸軍にいたんだ。軍人氣質が抜けないと部下からばやかされてね」

「そうだったんですか」

「それで聞きたいことというのは、新交通システムのことだったかね？」

ジョンは身を乗り出して、指を組んだ手をテーブルの上に置いた。高史は内ポケットから手帳を取り出し、ヒアリング能力のなさを補うために、同時にポケットの中に入れていたICレコーダーのスイッチを入れた。彼にも気づかれたかも知れない。

「どこから話そうかな。まず、日本の国土交通省が新幹線売り込んできているが、新世代のものはそれを上回るレベルのものにしたという目論見がある。我が国は日本と違って街と街の間の距離がべらぼうに長いからね」

「なるほど」

「君が言っていた、リニアモーターカーだが、あれも飛行機のライバルとはなり得ない。ただ、定時運行が出来る点は、大いに評価できる。飛行機だと雪や嵐ですぐに欠航してしまうが、リニアモーターカーならその心配はない」

そして、速度の縛りとなっているのは、騒音の問題だが、これは地下鉄方式にして、さらに真空に引いてしまうことで解決するつもりだと述べた。現在、シミュレーションをNASAの研究者がやっている最中だという。



残る問題は、……。

「コストなんだ」

ジョンは深刻そうに言った。

「もちろん、日本での開業より安いコストで実現は可能だ。だが、今の航空輸送に比べると高いものになる可能性が強い」

「しかし、電気だけで走るリニアモーターカーは現政権が進める脱炭酸ガス政策に乗っ取ったものとなりますよね」

「その通り。多少の差だけならば、政権はリニアモーターカー方式を推進するだろう」

そう自信たつぷりに述べた。

「これは記事にしてもいいんですか？」

高史が心配になって聞くと、ジョンはにやりと笑みを漏らした。

「政権はこの計画を進めたい。だが、現在の財政状況では困難だ。

だから、日本から資金を提供してもらいたい。その方向で記事を書いてもらいたい」

はめられたと思った。だが、聞いたとおりの夢物語を記事にしたとしても、問題はないだろうとも思った。アメリカ政府がやると決めたのだから、やるのに違いはない。それを妨害してもいいことはないのだ。

「いいでしょう、スミスさん。出来る限り日本の財界に宣伝しますよ」

そういうと、高史はジョンに握手を求められた。がっしりした手をしていた。

その後の対談は楽だった。重要な資料を印刷物としてくれたからだ。現在の地下鉄が、ニューヨークの地表すれすれを通っているのと異なり、地下百メートルの深度を走ること、トンネル内は真空にして空気抵抗をゼロにすること。騒音問題も同時に解決する。そして、駅の乗降口と列車とは真空状態を壊さないように酸素分子の半分の精度で仕上げたフランジで接続すること。これは国際宇宙ステ

ーションとスペースシャトルの技術を応用することで解決する。

停車時間は必然的に長くなるが、航空機よりは遙かに短い。想定速度は時速八百五十キロと航空機並みとすること。これらの資料をゴツゴツといただくことが出来た。しかも、PR資料として使ってもよいと言う。これ以上の申し出はなかった。

とにかく、いい話ばかりだった。

リニア・モーターの技術は日本のJRのものを導入するし、真空トンネルの技術はNASAの宇宙技術、すなわち宇宙船の技術を流用することで容易に解決する。後は資金面での課題だけだった。

「はあー、なるほど」

ジョンは、高史にもわかるくらいの易しい単語を選んで説明しようで、後で聞き返すこともないほどスムーズな説明だった。「それで、問題点や課題はないのですか？」

記者としてはこのくらいは押さえておかなければならない。

「無論、各要素がそれぞれ革新的なものだから、課題だらけだと言えるだろう。だが、必ず解決できると信じている。ただ、……」

少し言葉を濁らせた。

「君はオカルト記者でもあったね？」

「はい？」

「この真空トンネルと各駅の乗降口で使われる、精密フランジを日本の飯星鉄工所という会社に発注しているのだが、少し、品質が落ちてきている。それに、悪い噂もね」

飯星鉄工所の方は、杉山が調べているはずだ。

「それとオカルトとどういつながりがあるのですか？」

高史は何だかからかわれている気持ちになってきた。一見の客である自分にここまで詳細にインフォメーションを教えてくれるのも何だか怪しいこともある。

「ウイジャ盤を知っているかな？ 日本にも同じようなゲームがあるはずだ」

「コックリさんといいます。知っています」

「孫娘がよく一人遊びをされていてね。彼女がイイボシという名前を知っていた。わたしはベンダーリストを家に置いたりはしないし、ジャーナリスト向けの説明はするものの、まだ五歳の孫に仕事の細かい話などしたことがない。だから知っているはずがないんだ」  
それで問い詰めていったら、ウイジャ盤で降りてきた「女の子」が教えてくれたという。

「まさか？」

「気になるのは、イイボシが危ないという彼女が言うことなんだ」「危ないとは？ その、経営危機とかそういう問題を抱えているんですか？」

「こちらの商務省筋によると、そのような心配はなさそうだ。だが、孫娘の予言は、以前にも、わたしの家内の交通事故を未然に防いだ実績があるんだ。迷信と言ってしまえばそれまでなんだが、今回は大きな仕事だ。日本円にして二十兆円にもなるだろう。小さなつまづきで全体を壊すことだけは避けたいと思うんだ。君の意見が聞きたい」

どうやら、高史をつり上げて、重要な情報を与えてくれたのは、コックリさんについてのオカルト記者としての見識を買ったことだったらしい。

「日本の同僚に相談してみます。それから、降りてきた霊、つまり彼女というのには心当たりはあるのですか？」

「ボード上の文字からだが、エイアーノと名乗っている」

「エイアーノ？」

聞いたところ外人の名前のようだが、日本語のローマ字も英語読みになると全然違う単語になったりするものだ。「つづりを教えてください」

「いいだろう。えい、わい、えい、えん、おつ」

「アヤノ？」

どこかで聞いたことのある、名前だった。もっとも、最近の女の子の名前にはよくありがちなものだが、日本を発つ前にどこかで接

している。だが、記憶が呼び戻せなかった。今晚あたり、日本の佐伯静香に電話して聞くか、光雲先生の鑑定をお願いするかして、明日またジョンに報告すればいいと思った。

それにしても、飯星鉄工所に霊つながりで関係するとは思っても見なかった。

### 三

翌日の朝、高史の携帯電話に、東京の杉山から連絡があった。彼の方はもうとつくに取材を終えているらしい。昨日聞いたばかりの情報を伝えると、一蹴されてしまった。

「先方は、日本の新幹線方式を却下したと言うだけの話だろうか？」

「リニア方式なら、JRのものと、ドイツのジーメンスのものがあるはずだ。日本方式に絞り込んだという確証がないじゃないか」

「でも、飯星鉄工所の真空フランジを使うんでしょう？ だったら、日本製に、……」

「リニア方式はどっちでも使えるんだよ。それに、真空フランジ自体まだ試作段階だ」

「そうだったんですか？」

「少しばかりがっかりした。」

「あの、それで、飯星鉄工所なんですけど、何かよくない情報があるとか聞いたんですが」

「よくないって何だよ？ 業績は好調この上ないぜ。日本に残った工員の吸収が出来ていないということは言われているが、今のところ大した懸念はない」

「そうですか」

何となく、杉山の期待を裏切っているような感じが、受話器を通して、ひしひしと伝わってきた。「では、引き続き、裏取りします」

ピツという音を響かせ、電話を切った。

引き続き、今度は静香に掛けてみる。

「あら、中原君、まだ起きているの?」

彼女はあくびをしながら電話に出た。

「こつちはちよつど朝なんですよ。少し聞きたいことがあって電話したんですけど。今、いいですかね?」

「うん、大丈夫よ。それより、どうよ、何かオカルトネタは拾えたの?」

「オカルトと言えば、オカルトなんですが、ウィジャ盤ってご存じですよ。あれで、こちらの女の子の所に霊がおりてきたと言っんですよ」

「へえ、偶然ね、あたし達もこの間、伊豆の廃病院に行つて、ウィジャ盤を見つけたのよ。コックリさんじゃなくてウィジャ盤だよ。珍しいでしょう?」

「本当に偶然ですね。それで、降りてきた霊が、アヤノと名乗つたそうなんです。日本人の女の子の名前ですよね」

「うそ! こつちも、アヤノ。それに、咲子ちゃんが通っている塾の卒業生に綾野さんって言つ子がいたんですって、物故者なんだけど」

「ええ? 咲子が?」

高史は自分でもわかるくらいに嫌な顔をしたことに気づいた。妹には絶対に関わらせたくないのだ。

「心配ないよ。単なる偶然だろうから。でも、飯星鉄工所の社長の娘さんが失踪して、死体で見つかったんだよ。そのことと関係あるじゃないかしら」

「飯星鉄工所?」

「やっぱり絡んでいた。よくない噂があるそうなんです。調べてもらえませんか?」

「あら、経済ジャーナルで取材したんじゃないの?」

「いや、こつちは経営面でしか会社を評価しないから。ほら、オカ

ルト雑誌と取り上げ方がまるつきり違うじゃないですか。それに、優秀な探偵さんもいるでしょう?」

芸術写真編集部でよく、失踪人調査などを頼むので、お得意さんになるくらいの付き合いの探偵社があった。棚田という男で、素行調査から、浮気、失踪、何でも調べてくれる。今回の飯星鉄工所のよくない話というのは、経営面のことではなく、社長一家のスキヤンダルになるようなことだと何となく察しは付いていた。

「光雲先生にも一度見てもらおうかと思っているの」

「コツクリさんのことですか?」

「そうよ」

ますます心強い。

「明日以降になると思うけど、探偵の棚田さんと、光雲先生にも依頼してみるわ。やばい情報が手に入ればいいけどね」

静香は嬉しそうに笑った。

次の日、高史は再び、ジョン・スミスの事務所を訪ねていった。

もうこれで最後の取材になるだろうことは念頭にあった。杉山に言われた、ドイツの会社との競合になるのかどうかと言うことの確認と、飯星鉄工の悪い噂の具体的内容を問い詰めたらそれで終わりにしようと思っていた。

もう、アメリカに来てから四週間弱になる。いくら何でも、この程度の結果を出すには長すぎる出張であった。生活費は社のコーポレートカードで決済しているから、いくら長くなっても困らないが、記者としてのメンツというものがある。

もっとも、ロナルドに出会わなければ、ジョンにも出会えなかったと言えるから、今回の結果はいずれにしても、幸運な偶然にすぎないことも事実だった。

「もう日本に帰るんだってね? 会って間もないというのに、残念だよ」

本気で寂しそうな顔をしながら、秘書に入れさせたコーヒーを持

つて来てくれた。高史は黙礼して受け取った。「リニア・モーターだが、日本製ではば間違いはないよ」とも付け加えた。もうすでに計画はかなりの部分まで進んでいるようだ。

「ウィジャ盤に現れたアヤノという女の子ですが、日本で、正体がわかりました」

「ほう？」

「二十年ほど前に事故で亡くなっています。交通事故です」

「それで飯星鉄工所との関係は何かわかったかね？」

「飯星社長の娘さんが誘拐事件で亡くなっています。その予言をしていたそうです。その、……コツクリさんで」

「それだけかい？」

ジョン・スミスは疑い深そうな目で、高史の顔をのぞき込んだ。

緑青色の瞳が冷たい光を放ったように感じた。経営に関わるようなスキヤンダルってどれほどのものだろう？　それが、高史の意識に浮かんだ。社長令嬢の誘拐殺人事件が影を落としているのだろうか？

「社長令嬢の誘拐殺人事件を予言したことがあったそうです」

「誘拐殺人？　未成年者かね？」

「はい、中学生でした」

だが、未成年者にせよ、会社は単なる被害者だ。経営を左右するほどのスキヤンダルにはなり得ないだろう。

「ふうむ」

ジョンは太い手で大きなあごをさすった。「まあ、ウィジャ盤の指摘だから信憑性は薄いのかも知れないな。気にしなくてもいいのかも知れない。それだけ分かれば十分だよ。……ところで、アメリカにはいつまでいるんだ？」

「今日の午後の便で立つことを考えています」

「そうか、夕食に誘おうかと思っていたのだが、残念だ」

高史としては、一刻も早く帰らなければならぬ理由もなかったのだが、長くいればいるほど、それだけ、結果を求められるという、

会社会的な事情があった。もらった資料以上の情報が得られないなら、即刻帰った方が、賢明といえるだろう。

#### 四

咲子は、兄がいない間、割とのんびり生活していた。

普段うるさいことを言う兄がいないだけで、遅く帰っても叱られないし、電話で長話していても小言も言われない。自由ってこういうことを言うんだなと改めて感謝していた。それだけに、明後日の夕方、成田に着くと連絡が入ったときには、少しがっかりした。

「それでね、咲子ちゃん」

電話口の向こうで静香が熱心に語り始めた。

「伊豆の廃病院にあった、ウィジャ盤でアヤノって出てたじゃない。ひっかき傷が」

「ええ。塾のOBの綾野沙也加さんと一致しているって言い出したんですよね？」

「それがね、……アメリカでも出たんですって！」

嬉しさのあまり声のトーンが一オクターブ上がった。

「どういうことですか？」

「取材先の人だね、孫が遊んでいたんですって。飯星鉄工所と綾野っていう名前を出したそうよ。日本語の知識が全然なのに、ローマ字で示したんですって。偶然にはできませんだよね」

「静香さんってば、霊の介在を信じ込んでないですか？」

「あら、オカルト記者が靈魂を信じないで、誰が信じるって言うのよ？」

「それはそうですけど」

「まあいいわ。問題は、綾野さんという子と、飯星鉄工所、遥香ちゃん、この三者を結びつけているのが、今のところコックリさんとウィジャ盤のご託宣ということなの。飯星鉄工所の経営内容とかは、



こちらでも調べられるんだけど、プライバシーに関わる点になるとちよつと微妙なんだな、これが」

「あ、わたしに調べると？」

「遙香ちゃんの本当の死因を探って欲しいの。その、……水死とか心不全とかいう意味じゃなく、なぜ彼女が襲われたのかってこと」

「ああ、……」

探るまでもないと思った。答えは、最初に教室の隅に置き忘れられていた十円玉に触れたときに、イメージとして受け取っていた。

ただ、それを理解するだけの容量がなかっただけのことだ。誰か強力な霊媒が必要だと思った。だが、自分にその種の霊能力があることは誰にも秘密にしているから、軽々に持ち出すことははばかられた。真面目に受け止めてくれる人もいるだろうが、静香みたいな人だ。ほとんどの人からは変わり者、悪くすればおかしい人と取られる可能性もあるのだ。中学生の時、兄から変なことを言うなと叱られてからは人前で言ったことはなかった。

「静香さん、もしわたしでよければ、塾のクラスの中で何か起こっていないか、尋ねてみます」

「それはどうかなあ？ 何かやってたら、咲子ちゃんじゃ聞き出せないわよ。見た目は子供でも十分、しぶといんだから、最近の若い子は」

「わたしも教師志望ですから」

「そう？ じゃあ、頼もうかな。中原君には内緒でね？」

「言われなくても、そうします。お兄ちゃんは、わたしがあまり仕事のことに関わるのをいやがってますから」

「その姿勢はいただけないけどね。まあ、頼んだわよ」

電話は切れた。

咲子はリビングでスリッパも履かずに、立っていたことに気づいた。兄はまだ帰ってこないから、夕食を急ぐ必要はない。この何週間かは手を抜いて、というより、五合炊きの炊飯器でも大きすぎてご飯を炊くのも二日か三日に一度にしていた。それを小分けにして

冷凍しておいて、必要なときにレンジでチンして食べるのである。おかずは冷凍食品を多用していた。

水曜日、塾の三年生の小林のどかに接触を試みた。

遥香や中島裕美果とは別の中学で、席も前の方にいて授業には熱心な子である。それだけに、先生と生徒という関係がうまくいくと思っただのだ。遥香の死については、大変な事態であり、あの一件以来、全員保護者が迎えに来るようになったりして、また、三年生全員が遥香の家に弔問に訪れたりしていた。

「のどかちゃんは、遥香ちゃんとはあんまり親しくはなかったのよね？」

塾のあるビルの入り口で彼女を呼び止めて聞いた。短い時間だが、こんな時間が一番手っ取り早いし、後腐れもない。

「そんなことないですよ。同じ高校に行こうねって言ってたんです」丸いめがね越しに鋭い視線を感じた。

「ねえ、彼女、本当にストーカーに殺されたのかな？」

「警察はそう言ってますよ」

「でも、犯人の弁護士はアリバイを主張しているし、検察も起訴には及び腰だわ。わたしもあの犯人は少し頼りないと思う」

咲子がそう言うと、のどかは向こうをむいた。電車の高架沿いの道路にクルマが渋滞の列を作っていた。彼女のまつげがびくんと動いた。咲子は反射的に彼女の視線を追いかけた。白いセダン、車高が低くて太いタイヤをつけていた。運転手の姿は見えない。まさか、彼女たちに限って、あんな連中と付き合いがあるとは考えられない。咲子は疑念を打ち消した。

「先生は受験の時、悩みつてなかったんですか？」

「のどかは唐突にそんな質問をぶつけてきた。」

「そりゃあ、いくら勉強しても不安で、夜遅くまで勉強したわ。でも、ただけしても、友達はもつと頑張っているんじゃないかってびくびくしてたわ。小学校の六年の時だけどね」

「あ、中高一貫校だったんですね」

「うん。でも、悩んだのは一緒だよ。回数が少ないだけで」

「もし、一日が二十四時間フルに使える薬があったとしたら、どうします?」

「そんな魔法の薬があったら、わたしも欲しいな。今だってそう。大学のレポートが忙しいときなんか徹夜しちゃうときもあるけど、それでも時間が足りないことってあるもの」

「やっぱ、先生でもそうなんだ」

「やっと、同類を見つけたと言わんばかりの笑みをこぼした。

「でも、……睡眠時間は適当に取らないと、却って効率が落ちるから、徹夜は駄目だよ。それに、お肌にもよくないしね」

「あはは」

立ち話している間に、五、六人の生徒が横をすり抜け教室へつながらる階段を駆け上がった。そろそろ、一時間目の授業が始まる時間だ。咲子とのどかも、ここで別れて、それぞれ、教室へ向かった。

職員室には西海と大島が授業の準備をしていた。塩野も何かあるらしく、コピー機でプリントを刷っていた。彼は咲子の姿を認めると、こつちへ来いと目で合図した。咲子はバッグを机の上に置くと、そのまま校長室に入っていった。

「中原先生、何か手懸かりは見つかりましたかな?」

「いいえ、というか、彼女は誰からも恨みを買うような性格ではありませんでした。唯一の例外が、中嶋裕美果と、死ぬ直前に仲違いをしていたくらいです。それも他愛のない理由で、手懸かりと言うほどのことはありませんでした」

「そう」

少し期待外れの様だった。「生徒達についてはどうでしたか?」「すみません。やましい点はない様です」

ただ、何となく、柄の悪いクルマに乗った金髪男が気になっ

だが、気になる理由が見つからなかった。

「生徒達は、いつも徹夜していると言っていないませんでしたか？」

「は？」

「毎日、毎夜、遅くまで勉強していると言っていないませんでしたか？」

「え、ええ、確かにそう言っています」

「文字通り取つたら、大変なことです。勉強がはかどらない、努力はしているよという恨み節なら、大したことはありませんが、本当に毎晩徹夜しているなら、……」

「まさか」

校長は何を心配しているのだろうか？

そう思ったとき、先ほどの小林のどかの言ったことがフラッシュバックした。二十四時間フルに使える薬があったらどうします？ 彼女は確かにそう言った。薬と。

「塩野先生。薬ですか？」

塩野は瞋目してうなずいた。眉間には深い皺が刻み込まれ、表情は苦渋に満ちていた。

「以前、渋谷で逮捕された大学生がいました。どこかで聞いたことのある名前だと思って、記憶にとどめていました。あるとき、古い在籍者名簿の中に彼の名前を見つけたのです。その学生は大学を除籍され、今はどうしているかわかりません」

悲しそうな目をして淡々と語った。

「まさか、でも中学生がそんなものに手を出せるでしょうか？」

「いや、中原先生、欲しいと思う心さえあれば、それに手を貸す人が必ず存在するのです。目の前にぶら下がっても、断じて要らないと断る勇気があればよいのですが」

塩野は首を横に振り振り、断言した。

「でも、一体誰がそんなものを？ あ、中学生に買わせているんですか？」

「わかりません。わたしも出来れば警察沙汰になどして欲しくはないし、かといって、そんな大人を野放しにしたくもありません。生

徒達を傷つけずに事態を收拾することが出来ればそれに超したことはないのですよ」

欲張りすぎ。と、咲子は思った。

「あの、わたし、そう言ったことに全然詳しくなくて、……」  
「それはそうでしょう。そんなことに詳しいのは一部の不心得者だけでしょうから。しかしですね、……」

塩野は戦時中と戦後間もなくのことを引き合いに出した。当時、ヒロポンという名前の覚醒剤（塩酸メタンフェタミン）が、こともあろうに、疲労回復剤として広く出回っていたというのだ。咲子にはにわかには信じられなかった。

「中原先生、これが覚醒剤として、問題化し、すなわち、依存性や中毒性のために禁止されるようになったのは一九五二年に覚醒剤取締法が施行された後からです。それまでは薬局でも買えたのですよ」  
「あの？」 言っている意味が段々と分からなくなってきた。

「わたしも長い間、そんな時代のことは忘れ去っていました。もちろん、わたし自身、経験したことはありません。しかし、……あの学生が逮捕されたとき、その衝撃がわたしの心に突き刺さりました。きつと、塾に通っている間から悪の萌芽が出ていたに違いありません」

「まさか？」

「そうです。それで、西海君達にはあえて調査を頼まなかったのです」

やっと、本心を明らかにしたと思った。

でも、論理が飛躍している。その大学生が覚醒剤所持で捕まったのは事実としても、塾にいる間から規範意識が低かったかどうかなんてわからないし、塾内でそうした、薬物が広まっていたとは、まさか、考えられない。

二人の間に沈黙が広がった。

「まあ、いいでしょう。引き続き、生徒の間に不穏な動きがないか気を配っておいてください。他の先生達には内密でね」

塩野は腕時計を身ながらそう言った。もう、授業開始時刻を五分ほど過ぎてしまっていた。

8 ドミツケ(前書き)

2	2	2
0	0	0
1	1	1
1	1	1
・	・	・
0	0	0
9	9	9
・	・	・
2	2	2
2	1	0
第3節掲載	第2節掲載	第1節掲載

—

十一月二十日、咲子は帰国した兄のためにご飯の用意をしていた。さすがに、口うるさい彼がいては、レンジでチンなどということはやっておれない。毎日、ご飯を炊き、洗濯をし、掃除もしなければならぬ。

四週間弱もアメリカで暮らしていて、何を食べていたのか知らないが、少し体臭が変わっていた気がする。きつと、スパイスのききすぎた肉類を取っていたに違いない。

「それで、変わったことはなかったかい？」

兄がシャワーを浴び、ジャージを着ながら、リビングに戻ってきた。まだ、エコノミークラスシートで痛めた腰が痛いらしく、しょつちゅうストレッチをしている。

「ええ、……」

このところの出来事といえば静香に誘われて、伊豆の廃病院に行つたくらいだったが、そのことは秘密である。

「実はオカルト記事も集めるよう言われてさ、どこからそんな情報を聞き出すか、困ってたんだが、運良く向こうから情報がやって来たんだ」

「へえ、どんな？」

「コックリさんって知ってるだろう？ あれのアメリカ版で、ウィジャ盤というんだが、孫が遊んでいるうちに霊が降りてきたというんだ。その真偽は眉唾だが、佐伯さんの記事にはちょうどいいだろう。とにかく収穫の多い出張だった。本業の方はばっちりだったしな」

えらく上機嫌だった。咲子は冷蔵庫に冷やしてある缶ビールとコ



ツプを持ってリビングでくつろいでいる兄の所へ持って行った。

「ありがとう」

缶ビールを片手で開けて、グラスに注いだ。そして、目をつぶって飲み干し、うまいと叫んだ。向こうではよほど禁欲的な生活をしていたに違いない。「ぷはあっ！」

「お仕事うまく行ったんだ？」

咲子も少し嬉しい。

「ああ、最初は一人つきりで、言葉も通じない街ん中に放り出されたみたいでとまどうことばかりだったが、親切な人に会えてな。日本語を話すおじいさんがいたんだよ」

「へえ」

「その人の紹介でたまたま出会えたのが、新交通システムの関係者だった」

「ふうん、そういうこともあるもんだね」

「さらに、ウイジャ盤の話もその人からなんだ。おかげで日本でも少し調べ物が増えたんだ。けど、恩義がある以上、こちらも働かないとな」

兄はそういい、ご飯の用意が出来ているのに、電話をかけ始めた。気安そうに喋っていることから、静香のところだと何となく予想は付いた。

「じゃあ、お兄ちゃん、出かけてくるね！」

ご飯の用意だけ終わると、咲子は塾講師のアルバイトと称して出かけることにした。火曜日には自分の授業枠はないのだが、他の科目を受けている中学生達に用があった。

普段は馴れ馴れしい女の子達も、いざとなると、口が堅いのは小林のどかで懲りていた。後は当たって砕けるしかない。「先生、今日は授業はないんじゃないですか？」と、不思議そうな顔で声を掛けてくる生徒もいたが、ほとんどは、興味なさそうである。

そんな中、青野裕だけは違っていた。

「先生まだ調べているのかよ？」

ぶつきらぼうに、吐き捨てるように言った。

「そうよ、まだ、何も解決してないもん」

「飯星のことなら、俺は何も知らないぜ」

「本当に？」

咲子は、彼の手を取り両の手のひらで挟んだ。精神を集中すると、イメージが浮かんだ。暗黒のイメージと、葛藤、克服、至高への道。「何すんだよ。はなせよ！」

彼は粗っぽく咲子の手を振り払った。抽象的な情報しか伝わってこなかった。あんまり有能な霊能者ではないのだから、当たり前かも知れない。だが、何のことだろう？ ドラッグ？ いけないもののような感じが強かった。彼までそんなものに染まっているのだろうか？

「来月初めから期末試験だよね？」

咲子は問い詰めようとした。

「どこの中学でも一緒だぜ」

「眠らなくてもいい薬って知ってる？」

彼は急に無言になった。

「知ってるのね？」

「みんな使ってるぜ、そんなもの、もっと効果の高いものが欲しいくらいだ。先生知っているんだろう？」

「おおよそ予想はしていたわ。どんなの？」

彼はコンパクトな形状のピルケースを制服のポケットから取り出した。白い錠剤がシートから取り出された状態で入っていた。大分使っているようで残りは二、三錠といったところだ。

「一回当たり一錠なの？」

「ああ」

「高いの？」

「ああ」

「誰から買っているの？」

「それは言えない」

「なぜ？」

「その人が逮捕されちゃったら俺が困るから」

みんなが困るからとは、言わなかった。本人さえよければどうでもいらしい。咲子は錠剤に入っているメーカーのマークと番号を記憶した。後でインターネットで検索してどんな薬なのか調べなければならぬ。

一時間目の時間が終わった六時五十分、教室の後ろの席で菓子パンを食べていた中嶋裕美果を見つけた。咲子はすたすたと歩いて近づいていった。彼女は反抗的な視線を送ってきた。

「何か用ですか？」

「正直に答えてもらいたいんだけど。あなたも使っているの？ あれ」

「はあ、わかるように話してください」

「眠らなくてもいい薬よ。誰から買っているのか知りたいんだけどな」

「知りませんよそんなこと。言いがかりはやめて下さい」

ふりほどこうとするのを無理に彼女の手を握った。青野と同じようなイメージが伝わってきた。葛藤、克服、希望への道。こんなものに希望を見いだす若者の気が知れない。咲子はさらに意識をその中に進めようとした。大人、大人、大人。無責任な大人の姿がイメージとして写った。

「もういいわ。じゃあね」

薬を常用する中学生の廻りに、彼らを食い物にしている大人たちの姿が垣間見えた。これが、誰なのか具体的に突き止めるすべは自分にはない。

八時をまわり、とぼとぼと家路につきながら誰に相談したらいいか考えながら歩いた。

行動力があって、なおかつ秘密の守れる人でないと全てがぶち壊

しになることは容易に想像がついた。静香しかいないだろう。

電話を掛けると、まだ仕事らしく、受話器の向こう側でがやがやという雑音が入ってきた。忙しそうだ。朝、兄を送り出したままどういう状況なのかわからないが、しばらくは深夜までの勤務が続くと言っていた。アメリカ行きが二週間以上も伸びたせいで、仕事が大いぶんたまってきたらしい。

「もしもし、聞こえないよ！」

静香は叫ぶような声で言った。

「あの、コツクリさん失踪事件の続報なんですけど！」

「ああ、中原君もアメリカで興味深い話を聞いてきたらしいんだけど、もう少しため込んでから、一気に特集記事にしようと思うの。何なら、近くまで来てよ。ファミレスでいいなら晩ご飯おごってあげるからさ」

「ありがとうございます」

歩きながら、携帯電話を切り、パタンと閉じた。

自動改札を通り抜け、電車に乗ろうとしたとき、ふと、背後に視線を感じた。何気ない風を装って振り向いたが、大勢の乗客に紛れて誰のものか分からなかった。気のせいかも知れない。

「ごおっ」という音を立てて上り線ホームに電車が滑り込んで来、咲子は目の前の乗降口から中に入った。手近なつり側につかまった。

西新宿のライオン社ビルの玄関には守衛がいた。昼間は自由に入りできるが、一般社員の勤務時間外は、許可がないと入れない。咲子は来訪者リストに名前を書き、身分証明書として、滅多に提示したことのない大学の学生証を出した。守衛はちらりと学生証の写真と咲子の顔を確認すると、中に入ることを許可してくれた。

「これを訪問先に出して、担当者の判子をもらい、帰るときにここに出してくださいね」

一枚の書類と、来客用バッチをくれた。これをブラウスの胸の所

にとめて、中に入った。

芸術写真編集部では、もうもうとタバコの煙が満ちあふれていた。手でまとわりつく煙を払いながら、静香の席に近づいていくと、彼女はパソコンに向かい、記事を書いていた。兄の姿はここにはなかった。

「中原君つてば、アメリカですごい情報を得たらしくて、昼からずっと経済一部に詰めつきりなんだよ。どんなすごい記事がよくわからないけど、日本中が大騒ぎになるほどのニュースなんだって。おかげで、こっちは、倍の記事を書かなきゃならない羽目になってしまったのよ」

「そうだったんですか」

兄からはアメリカでの出来事を何も知らされていなかった。生活面での不自由を除いては。

「毎日、マクドナルドで食事していたとか言っていただけですから、よく知らなくて」

「へえ、そんなことしてたんだ。まあ、家で仕事の情報を漏らすよりはいいけど、家の人にも少しくらいは状況を説明しておかないと、いざというとき、困るじゃないよねえ」

「それで、コツクリさんの話なんですが？」

「ああ、アメリカ人の所にも出たんですって、アヤノとか言っていたわ。アメリカ人の女の子が一人で遊んでいるときに、そのアヤノという霊が降りてきて、日本のそのビッグニュースに絡んでいる会社かやばいとかいうご託宣を述べて帰って行ったらしいの」

「アヤノ？ アヤノと言ったんですか？」

これまで、中学生の周りに取り憑いている霊はすべて綾野沙也加の関係だった。アメリカにまで飛んでいく、霊に距離感があればであるが、そんなものはないであろうから、関係者の所に降りていったのだろう。

まさか、と思った。

アメリカで経済一部の仕事からみだつたら、多分、飯星鉄工の経

営面での話のときにそれが出たんだと思う。飯星鉄工の経営が危ないのだろうか、日本の新聞を読んでる限りではそんな話は一切聞こえてこない。もっとも、一部上場の大手会社ではないから、咲子の情報網に引つかかるような情報はないのだとも言えた。その筋では有名な話と言うことは十分にあり得る。

「飯星鉄工が危ないと、ウィジャ盤に出たんですか？」

「ううん、そんな具体的な情報が出るわけじゃない。中原君が調べていた巨大プロジェクトに日系企業が絡んでいて、スキャンダルが何かでプロジェクト本体に飛び火するかも知れないと言うようなことを彼は言っていただけ。もっとも、詳しくは経済ジャーナルの方でしかわかんないけど」

「あ！ パソコン借りてもいいですか？」

「何よ突然に？」

「中学生が薬を持ってたんです」

咲子は銀色のパックに描かれていた記号を思い出し、検索エンジンを入力欄に打ち込んでみた。リタリン。塩酸メチルフェニド。中枢神経刺激薬の一種と出た。この間、塩野が言っていたヒロポンと種類は違うが、似たような作用を持つ成分らしい。一昔前までは重症鬱病の治療にも用いられてきたが、乱用者が出たため、適用の幅が狭められた。現在ではナルコレプシー（睡眠障害：日中でも無意識のうちに眠りに落ちてしまう病気）に限られている。

「ちよっと、それどこから手に入れたの？」

静香が横から不審そうな目で咲子を見た。

「わかりません。言っと、二度と入手できなくなるから言わないと言われました」

「いや、そうじゃなくて、その情報よ。記号の記憶間違いとかじゃないでしょうね？」

「そう言われれば、……」

薬学部の学生じゃないから、薬の記号などそれほど詳しくない。見間違えと言われればそれまでのことだ。

「佐伯さん、回覧」

蓮見が黒いボードに挟んだ文書を持って来た。上部に判子を押し欄があり、読んだ人はサインして次ぎに回す。

「ふん、ふん、ふん、また、組合の集会？」

「佐伯さんが委員なんですからちゃんと出席してくださいよ」

「やれやれ」

蓮見は静香が目を通すのを確かめて行ってしまった。

「組合って何なのですか？」

「この会社にも労働組合というのがあるのよ。企業内組合と言っただけど、咲子ちゃんも就職したらわかるわよ。社員が強制的に組合員になるの。そして、会社に協力して労働し、利益を上げて、こちらは賃金とボーナスをいただく。それだけ」

「組合って入らないと駄目なんですか？」

「そうよ。あ、管理職になると脱退出来るわ。経営者サイドと見なされるからね」

「はあー」

静香は集会の期日だけメモすると、それを持ち、別の部署に歩いて持って行った。

## 二

咲子が家に帰って、一足違いに兄が帰ってきた。少し慌てた。

「何だ、今帰ってきたとこなのか？」

「え、ううん」首を振って否定した。「一回帰って、近所に出かけていたの」

「そうか。じゃあ、飯の支度はまだ出来てないんだろ？ どこか

食べに行こうか？」

「ああ、冷凍食品ならすぐに準備できるから、おうちで食べようよ」

「そうか？」

家計は厳しい。

咲子はさつと手を洗うと、ご飯を炊く用意をし、冷凍庫から、唐揚げチキンや総菜を取り出し、電子レンジに放り込んだ。兄は自分で冷蔵庫からビールを出し、先に一杯飲み始めた。

「ねえ、ライオン社にも労働組合があるんだね」

「ああん？」

「今日、静香さんから聞いたの」

「今時、どこの会社でもあるさ。戦後間もなくの頃は、本気でストライキとかしていたみたいだが、最近では会社側と迎合している」

「組合の費用って誰が出してるの？」

「そりゃあ、組合って言うからには、組合員の組合費からに決まっているじゃないか。会社からもらったんではメンツが立たない。それに、組合活動期間中の給与も組合から支払われる。専従というやつだ。俺も、一回やったことあるけど」

「世間で言う闇専従ってというのは何なの？」

「会社勤務の名目にして会社から給与をもらいながら、実際は組合活動をしている場合をいう」

「ふうん。あのさ？」

咲子は飯星鉄工所の労働組合の実態が少し気になったのだ。

「そう言えば、飯星鉄工東京事務所には労組が残っていたんだっただな」

兄はビールをぐいっと飲み干し、また注いだ。口の周りに白い泡が付き、美味しそうな顔になった。

「どうということなの？」

「ああ、飯星鉄工は、ベトナム移転にかかり、現地に新会社を作り、そっちに、従業員を再雇用する形で異動させている。だから、現地の会社にも労働組合があるが、東京の会社の労働組合とは無関係なんだ。だから、東京に残ったのはごくわずかだと聞いている」

「二人だそうよ。奥さんから聞いたの」



「だとすると、活動費はどうしているんだろうな。賃金はもらっているから、組合費を出し合っていたんだろうか？ それとも、何の活動も出来ないかだ。何か聞いているか？」

「何だか、……探偵を雇って、家庭不和を煽ったり、色々嫌がらせをしていたみたい。大変だったって、相手をするのに」

「そうなのか？ 探偵ねえ」

兄はそう言い、残ったビールを全部コップに注いで飲み干した。

「探偵って高いの？」

「そうだなあ、うちでも、オカルト部門の方では雇っているけど、大人の男を一ヶ月拘束するんだぜ、それなりの金額がいるわな。ましてや、二人だけの組合でそんなの雇えるもんか」

「じゃあ、そのお金の出所が気になるわ」

「それが、スキヤンダルにつながるというわけか。まさかと思うが、こちらでも一度調べてもらおう」

チン、と唐揚げの温まった知らせがした。

咲子は電子レンジから、おかずを取り出し、ビールを飲んでいる兄の前に出した。ご飯はあと二十分ほど待たなければならぬ。咲子はビールが飲めないで、そのまま待っていた。

次の朝、咲子は飯屋啓子に時間を取ってもらうことにした。昨日沸き上がってきた疑惑の真相を確かめるために、少し話を聞いておく必要があると思ったのだ。兄は兄で、また、静香と調べてくれるだろうが、自分としても、塾の生徒を守るために動いておきたい。

「どうぞ、上がってください」

啓子は咲子にスリッパを勧めた。咲子は靴を脱いでそろえておいた。そしてスリッパに足を通し応接間に招かれ、入った。

しばらく一人きりになり、部屋の調度品に触れたとき、不意に、この家に男性の存在がないことに気づいた。もう長いこと家を空けている。そんな感じがした。

「紅茶でいいかしら？」

啓子がお盆に載せたティーカップとポットを持って来た。

「あ、おかまいなく。すぐに帰りますから」

「うっん」

彼女は首を横に振った。「娘の思い出を共有するもの同士、一緒にいたいだよ」

しみりとした言い方だった。気持ちは理解できた。

「あの、今日、お邪魔したのは会社の労働組合のことなんです」

「組合のこと？」

不思議そうな顔になった。

「企業内組合というんですか？ 社員が全員入っているという」

「ああ」

やっと腑に落ちたかのような顔になった。

啓子の話によると、やはり、創業時からある組合は会社と共に一度解散になり、新会社をベトナムで創業した形態を取っているため、組合も新たに加盟する体を取ることになったという。

「その東京の営業所の数名というのは、新しい組合なのですか？」

「いいえ、古い会社の組合をそのまま引き継いでいます」

「それって、合法的なものなのですか？」

「さあ、私どもにはわかりかねます。ただ、事実として、二人きりの組合だろうが、存在する以上は相手にせざるを得ないので」

「そんなものなのですか？」

「ええ」

啓子はカップに視線を落とした。

「ちなみに、組合の活動資金は誰が出しているんですか？」

「それは、……組合員の組合費からでしょう。昭和三十八年から続いている組合ですから、徐々に力を失いつつはありますが、剰余金の積み立てがあるはず」

「そんなものなのですか？」

敵の戦力がよくわかっていないという状況だった。三十人かそこらの従業員がやめたと以前言っていた。それだけの人間が過去十

年か積み立ててきた金額があつたということだ。二人きりになつて納める人間がへつたものの、使う人間も減つたのだ。

「でも、そんなに潤沢な資金があつたとは思えません。仕事をしていない割に、賃金の増額ばかり要求してきていましたから」

「やっぱり」

「中原先生、きれいな髪をしていらつしやるのね、本当に真つ黒で、くせがなくて」

「あ、いえ」

啓子は咲子の髪に見とれていた。あるいは、亡くなつた娘の姿を投影していたのかも知れない。いずれにしても、気の毒な女性であることに違いはなかつた。この後、どうするのだろうと、少しだけ気遣つた。夫に従つて、東京の営業所を閉じ、ベトナムへ移住するのだろうか？ もう日本では工場をやつていけないのだろうか？

「私、娘を殺した犯人が社内の人間ではないかと疑っていましたが、不意にそんな言葉を漏らした。「散々脅迫めいた言葉を聞かされてしまったものですから」

「でも犯人はストーカーの学生だつた、ですよね」

「ええ、少しだけほつとしたのも事実です」

「ただ、……マスコミが冤罪説を流しているでしょう？ 私も少し気にしてはいるんです」と、咲子。

「冤罪？」

確かに、捕まつた男の弁護士がアリバイを主張していたのも事実だつた。が、その時間、電車に乗っていたというかなりあいまいな主張だつた。

被害者、飯星遥香、十五歳、西荻窪中学三年生。被告人は帝北大学経済学部四年生、安達靖、二十六歳。事件は十月二十日八時四十五分過ぎに西荻窪の英進塾前道路において自動車にて拉致、監禁し、翌二十一日薬物中毒により死に至らしめた。罪状、傷害致死罪。

当番弁護士として、警察での取り調べに呼び出されてからこの方、山崎等は彼のアリバイ探しに躍起になっていた。

取り調べ担当刑事の亀田は素っ気なく調書を開示したが、ほぼ最初から犯人と決めてかかっていた。それに、本人も軽いストーリーカー行為に近いことはやったことがあると認めていた。

でも、殺してないです。信じてください。

面会したときに、彼はそう言ったが、山崎は内心、半分半分だと思った、いや、八割方有罪確定だと確信していた。彼の暗い目、おどおどした態度、そして、何より自身、飯星遥香を遠くから観察していたと認めたのだ。

しかし、弁護士としては依頼人の言い分を信じないわけにはいかなかった。

「十月二十日の午後八時四十五分です。君は何をしていましたか？」  
拘留所のアクリルガラス越しに彼は尋ねた。念のためだ。

「その時間は東京にはいませんでした」

彼の話では、就職活動のために、山梨県に行っていたと言っただ。その日だけ金髪ではなく、黒染めにしたと、ぼそりと言った。その言い方は山崎には言い訳にしか聞こえなかった。しかし、山崎は裏を取るため、いや、裏は警察でも取っているだろう、さらに細かい見落としがないか、確認のために、証言者を訪ねることにした。

東京駅から、特急に乗れば、甲府駅まで最短で一時間四十五分で行くことが出来た。彼の受験した会社、甲府ボイラー販売株式会社は駅からタクシーで十五分ほどの距離だった。山崎は時間を確かめながら彼の足跡をたどって行った。

会社の事務所で、当日のアリバイを尋ねた。

「後藤といます。人事関係の事務を担当しています」

四十歳くらいの女性職員が現れた。

「今年、十月二十日にこちらに面接に訪れた、安達靖さんのことについて伺いたいのですが」

「どうぞ、こちらへおかけ下さい。今ファイルをお持ちします」

事務職員だけで百人くらいいる職場だった。結構大きな会社だ。山崎は隅に置いてあるソファに腰掛けて、黒の革靴を横に置いた。早速、分厚いファイルを取り出した。

しばらく待っていると、若い女性事務員がお茶を出してくれた。

「ありがとうございます」

「お待たせしました。今年は特に受験生が多かったので、……」  
時間がかかった言い訳をした。

「そんなに多く？」

「今までは、春の時期に二、三人採用して終わりなんですけど、今年は特に多くて、秋にも三回面接を行ったんです。百人近くです」

「へえ、それで、採用は？」

「二人です」

「厳しいんですね」

「それについてはコメント出来ません」

「すみません。それで、安達さんは？」

「はい、十月二十日の午後一時からテスト、これは、一般常識と適性試験です。これを三時まで受けて、その後、面接を受けていらっしゃいます」

「何時から何時かわかりますか？」

「すみません。これは終わった順に行われるので、前から五番目の組ですね。五分程度の面接ですから四時前くらいには終わっていたかと思われませう」

「証言してもらえますか？」

「いや、記憶が定かでないので」

さらに言うと、彼はこの会社の試験に落ちていた。落ちた人間のことを細かく記憶している人はいないだろう。ここからタクシーにでも乗っていれば、もしかしたらと思っただ。

「この会社の出入りのタクシー業者はいますか？」

「ええ、でも、当日は乗り合わせで甲府駅までピストン輸送でしたから」

会社の受験なら、おそらく紺のリクルートスーツの若者ばかりだろう。証言は少なくとも、この会社に四時までいたことだけだ。特急に乗れば、十分七時前には東京に帰ることが出来たはずだ。

帰り際、駅長室にも顔をのぞかせた。

まさか、安達がどの列車に乗ったと証言してくれるわけではないと思っていた。

それでも駅員は親切にも、当日の列車状況などを調べてくれた。

「中央本線上り線が、人身事故で二時間の遅れが生じています。十八時五分甲府駅発の便から終日遅れています」

「それは確かですね？」

一筋の光明が射した気がした。どこかの駅で、接触が飛び込み事故でもあり、遅れたに違いない。が、四時に試験が終わり、そのすぐ後に帰っていれば、この遅延には無関係に七時前には東京駅につくはずだ。

彼の証言ははっきりしない。

試験が出来なく、面接でも上がってしまいうまく行かず、ぼんやりしながら、帰ったという。甲府の会社を受けに来たのは、彼の実家がこの町にあるからだ。だが、実家にもよらず、昔の友人宅にもよらずに帰ってしまったている。試験がうまくいったのなら、誰かと酒でも飲んでいたのであるが、この就職氷河期に、落ちた試験の後で気分の落ち込まない方がどうかしていると思っただ。

もし、特急が二時間遅れても、ぼんやりとしていたなら、東京駅

に何時に着いたか、記憶にないという彼の証言にも信憑性があるが、それも、悪意を持って見るならば嘘だと言われてしまう。どうしても、甲府市内に六時までいたという証言がないと彼の有罪は確定的だった。

「何で、延着証明をもらわなかったんでしょうね？」

誰に向かつてともなしに口にした。

「通常は着駅で発行しますが、会社や学校の遅刻を回避するためだけの書類ですので、一般のお客様はお受け取りになりませんね」

駅員は丁寧な口調で説明した。

確かに、アリバイを作る気がなければ、そんなもの、わざわざ、東京駅の駅長室まで行って発行してもらうメリットはない。事件のことを知らなければ、とっとと家に帰ってビールでも飲んで寝る方がよほどいいだろう。

山崎は甲府での調査をあきらめて、東京に引き返した。

後は、何時の便に乗ったか、証明できなければ、こちらの負けである。

きつかけはひょんなことからだった。彼はモバイルSuicaで乗車券を購入していたことがわかった。逮捕時に所持していた携帯電話のアプリケーションで、甲府発、東京行き特急券を購入していた。特急スーパ―あずさ28号に指定券で乗っていた。彼自身、特急が遅延していたことに気づかなかった。車内でビールを飲み、すっかり寝込んでいて記憶がないという。

JRに問い合わせたところ、検札の記録もあつた。甲府駅の駅員の証言通り、人身事故で二時間の遅れが生じていた。東京駅には午後十時着となっている。これで、彼のアリバイを証明できそうだった。

9 ・ロックリさん(前書き)

2011・09・25	第3節掲載
2011・09・24	第2節掲載
2011・09・23	第1節掲載



## 9・コックリさん

—

捜査一課の亀田は、班長の森からこつてりと搾られた。

列車の乗車記録などと言う、初歩的な指摘を弁護士から受け、公判維持困難という検察の判断で、被疑者安達靖の無罪釈放が決まった。森は課長と一緒に、安達に頭を下げて謝罪し、逆告訴されないように頼み込む始末となった。

「どうして、彼を被疑者リストの筆頭にくわえたんだね、まったく」  
釈放後、森は不機嫌そのもので亀田を問い詰めた。

「被害者の日記にあったストーカー被害から、彼の関与が不自然だとは考えられませんでした。現に彼もストーカー行為自体は認めています。ですが、本官の失態でした。すみませんでした」

上層部が釈放と決めたことに逆らうほど、若くはなかった。主張すべきは主張し、謝るべきは謝っておく。それが処世術というものである。

「話は元に戻るが、被害者の飯星遥香に他にストーカーがついていなかったか、それから、彼女自身でなく、彼女の両親に敵がいなかったか、逆恨みも含めてもう一度洗い直せ」

「わかりました」

亀田と一緒に捜査していた山本に声を掛け、警視庁を後にした。

クルマのハンドルを握りながら、少しだけぼやいた。最初に、ストーカーに関する聞き込みで安達容疑者の人相を報告したのは山本からだった。

「少し初動捜査で、思いこみ過ぎたな。なぜだろう？」

「最近、ストーカーが殺人事件にまで発展するケースが多くあり、

今回もそれだと、思いこんだのかも知れませんが。彼女の日記にもストーリーカーにおびえる文面がありましたし、近所の人の目撃証言もそれを裏付けるものでした。それに何より、安達容疑者にも非がありません。もしも、彼女が殺されずに、ストーリーカーとして告訴していれば、安達容疑者は今も檻の中のはずです」

山本は自分のミスをかばうかのように一気に喋った。そう言う点には気に入らない。非は非として素直に認めるべきだが、今回は同じように引っかけた。最初からうまく行き過ぎたのだ。おかしいと思うべき先輩がうまく手綱を絞めなかったことに今回のミスの根があるのだ。

「飯星さんの母親を当たろう。逆恨みの線から順につぶしていこう」「そうですね」

山本に電話で確認させると、今日は大田区にある営業所にいるということだった。早速、クルマをそっちに向かわせた。

事務所は鉄骨二階建ての簡素なものだった。中をのぞくと、スチール製のデスクとその上に乗っている電話だけである。がらがらと音を立てて引き戸を開けると中から、四十代の男が出てきた。

「いきなりお邪魔してすみません。警視庁の亀田と言います」

亀田が身分証を提示すると、男の顔が一瞬引きつったように見えた。

「何か？」

後は突っ慥貪な返事だった。大抵の反応はこんなものだ。

「飯星啓子さんと会う約束がありましたね」

「ああ、専務なら今、その先のコンビニに行っていますよ。じきに戻りますから、中で掛けてお待ち下さい」

中にはついたてがあり、その向こうには、さらに机があり男が彼も含めて二名いることがわかった。

ときどき、電話がかかってきて、その男が取ったり、もう一方が出たりする。しばらくして、私用の電話らしく、もう一人の男が携

携帯電話で喋りながら、表に出て行った。

「あ！」

亀田と山本は同時に叫んだ。

男の人相、風体が、最初に手配したデータと合致するのだ。身長百七十から七十五センチ、やせ形、髪型、髪の色、髪を除き同じだった。ただ、年齢は一回り上だが、夕暮れでの目撃証言だからややあいまいだ。

「すみません、彼もこの従業員ですか？」

「え、ええ。何か用事ですか？」

急におどおどした態度になった。

「いつから勤めていますか？」

「高校を卒業してすぐに就職してますから、もう、二十年になりま  
すかね」

「名前は？」

名前は大曲総司、三十八歳、出身地は大阪市。機械工として働いていて、組合活動には西堀が強引に誘い込んだ格好になっている。

亀田は、建物の表に出て、人目につかない位置から、電話をかけ、彼に尾行をかけるよう森に要請した。

「馬鹿か？ 最初に調べなかつたのか？」

「すみません、灯台もと暗しでした」

「動機は十分なんだろうな？」

「工場のベトナム移転に反対するグループの一員です。だからといって、社長の娘を誘拐するのは馬鹿げていると思いますが、誘拐しやすい、いわば顔見知りでもあります」

「わかった。別働隊をつけて行動を監視する」

「お願いします」

電話を切ったとき、ちょうど、飯星啓子が会社に戻ってきた。コンビニ二袋を右手に提げていた。お茶とサンドイッチが入っているのが、外からわかった。夫が日本にいないから、弁当も作らないのかなと思つた。

「今日は会社にまで押しかけて、申し訳ありません」

亀田は慇懃に頭を下げて挨拶した。

「いいえ、従業員が中にいませんでしたか？」

「はい、一人はすでにソファに座って待っていますよ」

「どうぞ」

啓子が先に歩いて中に入った。彼女はさっきの大曲には何の疑いも抱いていないようだ。

しかし、もう一人の男、西堀が事務所を出て行くと、彼女の声のトーンが変わったことから、彼らのことを内心警戒しているのはわかった。

## 二

咲子は今日は大学の講義をさぼり、ライオン社一階の芸術写真編集部に来ていた。兄は、朝から経済一部に出向いていて、今日一日こちらに戻ってこないことを静香から知らされていた。

奥まった会議室スペースにいるのは、契約霊能力者高山光雲と、静香、そして咲子の三人だけだった。オカルト現象に懐疑的な蓮見はスタッフであるものの、静香の配慮でわざと外していた。これから行う、降霊術に邪魔になるといけないからだ。

目の前にはコックリさんの方陣を描いた紙と十円玉。横には、一部始終を記録に収めるためのビデオカメラとそれを載せる三脚が置いてあった。すでに録画は始まっている。

「さて、今回降霊をお願いするのは、綾野沙也加さんの霊ですな」  
光雲は数珠をじゃらじゃらと音を立ててこすり合わせた。

「よろしく願います」

「これがなくとも、降霊は可能ですが、ある方が出やすいでしょうから、この方式にしますよ」

そう言い、方陣を指さした。一同コックリとうなずく。

「かんじーざいばーさつぎょーじん……」光雲は経を唱え始めた。不意に部屋の照明が一段暗くなった気がした。咲子は静香の方を見た。彼女はうなずいた。霊気が漂っていた。不安になった。

紙の上に置いてある十円玉がすーっと右に十センチ動いた。どきり、とした。

「さまよいし、綾野沙也加の霊、ここに現れたまえいつ、えいつ」光雲は目の前で印を切った。

十円玉は起き上がり、くるくるとまわった。そして、からんと横たわり、そのまま静かになった。

「指を重ねて置いて下され」

静香と咲子は人差し指を十円玉に乗せた。

「綾野沙也加さんの霊ですか？」

十円玉はすーっと、YESと書いてある点に移動した。

「霊が現れたようですな。あなたが死んだときの様子を教えてくださいな」

その瞬間、咲子の脳裏に、トラックとその下敷きになり血まみれで横たわっている女の子のイメージが現れた。十円玉はひらがなの上をあつちに行ったりこつちに来たりしている。

「どうやら、交通事故で命を失ったようですな」

「どうして成仏できないの？」

静香が聞いたとき、またも咲子の脳裏にメッセージが送られた。

一九九一年三月十八日、公立高校の合格発表の日、朝から沙也加はそわそわしていた。中学の担任の先生は大丈夫だよと太鼓判を押してくれていたが、何だか自信がなく不安だった。友達の中には、眠くならない薬とか使って一週間徹夜の勉強をした子もいたようだが、そんなのは不正行為だと思って自分は絶対にそんなものには手を染めないでいた。

「沙也加、行くんでしょ？ 見に」

母が呼びに来た。

「はい」

今日までは中学の制服だ。いそいでブラウスに腕を通し、リボンを結び、ブレザーを羽織った。コートはいるかな？ 少し迷って着ていった。暑かったら脱げばいい。

高校までは歩いてたどり着いた。どきどきしながら、午後一時に張り出される合格者の番号を心待ちにした。

周りにも同じような生徒が一杯集まっていた。そんな中に、同じ塾の子もいた。彼女は例のクスリに手を出したと聞いていた。そんな子にだけは負けたくなかった。

がやがやと、周りが騒然となってきた。試験委員の先生だ。白い紙を丸めて持っている。

やがて、掲示板に張り出された。どきどき。

沙也加は受験票を握りしめ、自分の番号を探した。……あった。その瞬間、この三年間の努力が一気に報われた気がした。

「嬉しかったのね？」と、静香。十円玉はYESに動いた。

その子は残念ながら落ちていた。自己採点ではギリギリだったらしい。口先では残念だったねと慰めておいたが、本心ではざまあみろと思っていた。

うきうきしていた。校門の周りでは、早速新入生を捕まえようと、部活動の先輩がパンフレットを配ったりして勧誘に動いていた。

「すみません。もうやりたいことがあるんです」

沙也加は中学ではバスバンド部に入っていて、高校に入っても続けようと思っていた。だから、他の部の誘いは全部断った。その姿を、その子は恨めしそうに見ていた。そんなクスリに手を出すからいけないのよ、と心の中でつぶやいた。

帰り道、公衆電話から母に合格を伝えたら、喜んでいた。赤飯を

炊かなくちゃとすつかり浮かれていた。沙也加は足取り軽く、道を渡ろうと車道を横切った。

路上駐車されていたトラックの向こう側から、ライトバンが猛スピードで迫ってきた。あ、と思った。

気がついたら、地面に血まみれになって横たわっている自分の姿を、空から眺めている自分に気づいたのだ。痛みも何にも感じなかった。自分は死んだのだろうか？ それすらわからなかった。

「成仏できないでいるのは、死んだという自覚がないせいでしょう」  
光雲が数珠をじやららと鳴らして言った。

「いや、他にも理由があるようです」

咲子はずぶやいた。十円玉に触れた指先から、新たなメッセージが伝わった。

その子が喜んでいる？

「どういうこと？」

静香が怪訝そうな顔でのぞき込んだ。

「補欠で、その子が合格したんです。繰り上がりで」

「えー？」

確かに悔しがる理由はよく分かる。咲子だって、同じ立場なら死んでも死にきれないだろう。でも、もう二十五年前のことだ。いい加減、怒りを静めてもよさそうなものだ。

「その補欠の子って、十五歳プラス二十五年だから、四十歳？ 中学生のお母さんくらいの年よね」

かたん、と十円玉がひっくり返り、咲子は口から心臓が飛び出るほど驚いた。静香も同様だ。

「ええいつ」

光雲が印を切った。本気で霊を怒らせてしまったらしい。こうなると、彼に頼るしかない。霊力でもって封じ込めてしまうのだ。

この後、香を炊き上げ、編集部内を抹香のにおいで充満させ、部屋にいた全員にお被いをし、この儀式を終了させた。

「いやあ、強い霊でしたね。今回は」

静香が頭をかきながら、応接用のソファに腰掛ける光雲と咲子に「コーヒーを持って来てくれた。」

「佐伯さん。くれぐれもこの霊をあなどってはなりませんぞ。二十五年間崇り続けているのではなく、今回たまたま誰かが目覚めさせてしまった霊なのです。それだけに、霊障も強く、また、悪質です。あなたはこのビデオを付録につけようとか思っただけでいらっしやるでしょうが、それはやめた方がいい」

「え、そうなんですか？」

「代わりにいくらでも、心靈写真が届いているのではないですか。無難なものだけ載せておきなさい。この霊には今後、二度と関わり合いを持たないことです」

「はい」

静香にしては、せつかくの特ダネの記事なのに、やけにあっさりと引っ込んでしまった。

「あの、先生。今回目覚めさせてしまったというのは、教室でのコツクリさんが原因なのですか？」

「ふうむ」

光雲は瞑想状態に入ってしまった。「それもあるでしょう。でも、教室で除霊をしたからといって静まるものでもありません。もっと、根本的な因果がこの問題の背景にあります。そう、御大師様は告げています」

御大師様というのは、光雲が教祖をしている新興宗教の初代教祖で、神格化されている人のことである。密教の弘法大師とは関係がない。

「崇ると言えば、彼女をひき殺した犯人に向かうのが当然の様な気がしますが？」

「さよう。苦んで死んだのなら、その通りでしょう。しかし、彼女の恨みは、死んだこと自体より、それにより奪われた彼女の名誉、



プライドの方によりウェイトがかかっています。それよりも、今後、この霊により霊障を受けないことの方にあなた方が気を配るべきです」

「あたし達ですか？」

「そうです。もう呼び出した人たちと同じくらいに彼女に関わっています」

咲子はそれを聞き、嫌な予感がした。コックリさんをしていた十円玉に直に触れてしまったし、この霊とも交流している。

何となく、この霊との対決は避けられそうにないと思いつつあった。

### 三

高史はすっかり経済一部の経済ジャーナル編集部に融け込んでいた。もつとも、元々この部署にいたのだから、融け込むも何も、元通りに戻っただけだ。高史がいない間にここに入った人の顔を知らないくらいで、後は何もかも普通りにやっていける。そして、仕事に対する自信も少しはついてきた。

「何だか大変な計画だね」

杉山が高史の持つて帰ってきた資料をめくりながらつぶやいた。新交通システム公社のジョン・スミスからもらい受けた計画資料だった。はじめて聞く高史ですら驚嘆したのだから、ある程度予備知識のある杉山ならもつと驚いたに違いない。

計画ではニューヨーク市とデトロイトを二時間弱で結ぶ、交通の基幹となるシステムだ。しかし、本当に真空に引いたトンネルの中を時速八百キロでリアモーターカーが走るなどと言うとんでもない計画が実現するのだろうか、杉山の疑念ももつともだった。

仮にこれを記事にするととなると、もし間違っていたらというリスクを当然負わなくてはならない。

爆弾級のスクープであることは、同時にそれなりの代償が必要だ。  
「ダブルチェックが欲しいね」

「それが、わたしの渡米であったのではないですか？ ベトナムの飯屋鉄工との動きと併せて見れば、ダブルチェックになると思いますが」

高史はジョン・スミスを疑う気にはなれなかった。

毎週日曜日に教会に通う熱心なクリスチャンであることもさておき、彼自身の誠実な対応を考えればマイナス要素はひとつもない。

「ベトナム工場では、意気盛んだよ。大型の長期にわたる受注を得たことで、経営陣は沸き立っている。もっとも、表面上はまだ穏やかだがね。鉄骨一本の調達もまだなんだ」

杉山は最初から冷めた見方をしている。高史を渡米させたのは、この情報が嘘であることを確かめさせるためだったという気もしてくる。

「君の所の雑誌とは次元が違う。こちらの購読者は経済界に影響を与えるクラスの人も多いんだ。心霊写真みたくあやふやな状態で記事には出来ない」

「それは言い過ぎです。こちらも、一生懸命やっています。心霊写真もちゃんと同じ現場に行き、同じ条件で写真を撮り、偶然か霊的なものかちゃんと検証しているんですよ。馬鹿馬鹿しいかも知れませんが、それがジャーナリストの良心です」

「ふむ、悪かった。とにかくダブルチェックの方法を検討してくれ。スクープはそれからだ」

「わかりました」

取り敢えずは引き下がったものの、高史も、少し懸念材料があるのを感じていた。それは、ニューヨークの事務所でジョン・スミスが語った話の中で、飯屋鉄工に関するスキャンダルのようなもので、計画が頓挫するのではないかという件だ。彼自身、確信があったわけでもなく、単に孫娘がやっていたウィジャ盤のご託宣でそのような

ことを告げられたと聞いただけに過ぎない。

だが、同時期に、日本でも、静香からコツクリさんの話を聞いた後だっただけに、偶然として片付けられないところがあった。

それにも関わらず、ベトナムから掛かってきた杉山からの電話では、飯星鉄工の経営は至って順調この上ないと言っていた。

日本に帰ってから、パソコンで株価や四半期決算を調べてみたが、経営は至極安定しており、どこにも文句の付け所がなかった。

もし、新交通システムのニュースが流れれば、株価は一気に上がる可能性を秘めていた。それだけに、いい加減な情報は流せない。もし、……

高史は机の上の内線電話の受話器を取り上げ、芸術写真のナンバーを押した。

「はい、芸術写真、佐伯です」

「ああ、俺俺」

「オレオレ詐欺？ 社内で馬鹿なことしないでよ」

お昼の眠たい時間帯につまんない冗談はやめると言わんばかりの口調だった。

「ふざけるなよ。佐伯さん、前にコツクリさんを調べていたじゃない」

「ああ、あれやめた。危ないんだって」

「危ないって？」

「悪い霊が降りてきたの。ほとぼりが冷めるまでしばらくは御法度よ」

「もう、あのさ。飯星鉄工のことで調べていたんだけど、そっちで何か情報はない？」

「ああ、飯星鉄工の社長の娘が殺された事件があったじゃん。それを予知した霊なの」

「このくらいの情報なら、新聞にも載っていた。」

「ああ、クスリっていつの？ ドラッグがらみの話も出てたわ。こ

「つちは確証はないけど、いま、探偵の棚田さんに、飯星鉄工の日本の労働組合のこと調べてもらっているの。今日の夕方くらいに第一報が聞けそうよ」

「俺も行つていいか？」

「ウエルカム！」

芸術写真編集部では、独自の記事をまとめるために、専属の霊能力者やカメラマン、探偵などと契約を結んでいる。不審なものが写つたら何でも心靈写真というのでは底の浅い記事しか書けないため、同じ場所、同じレンズでカメラマンの蓮見が出来る限り忠実に再現実写を撮る。カメラ的に心靈写真ではないことが証明できればそれはそれで記事になるが、それでも判明しないときは、霊能力者の助けを借りる。これも、長年の実績を持つ宗教団体の教祖である高山光雲が担当する。

「万が一、行方不明者、失踪者が出る場合もある。」

「霊障だと考える前に、探偵に人捜しをお願いするのである。大抵は本人ゆかりの地でひっそりと過ごしている場合が多い。その場合、本人の承諾を得て記事にするかしないかを決める。棚田はこれまでの三年間、かなりの実績を積んできた。」

「夕方、五時に棚田はやつて来て編集長の森野に挨拶していた。」

「ちよつと、棚田さん。忙しいんだから挨拶は後々」

「静香が強引に会議室に引つ張つてきた。」

「いやあ、佐伯さん、あそこはとんでもない会社ですよ」

「十一月の冷える季節だというのに、額に脂汗を浮かべていた。働き盛りの四十代である。」

「とんでも会社？」

「静香は棚田にパイプイスをすすめ、自分も真向かいに座つて取材ノートを広げた。高史もその横に座つた。」

「普通労働組合つて、組合員の組合費から成り立ちますよね？」

「ええ」

「あそこは、ここ十年間の労使対決でかなりの人数がやめているんです。これを見てください」

棚田は表計算ソフトでまとめたような表を取り出した。グラフを見ると横が年数で縦が人数だ。

「これは？」

「十年前に社長がベトナムのホー・チ・ミン市に移転を決めてから、反対する従業員三十名が抵抗活動をはじめました。でも、スト中の給料は会社からは支払われず、それを指揮する組合の内部留保から切り崩されて給与が支払われます。でも、この会社にそんなに長い間抗争を続けるだけの内部留保はなかったんです」

「ベトナムに移ったのは約百名ほどと聞いています」と、高史。

「はい、その通りです。ベトナムの飯屋鉄工は日本とは別会社の形態を取っていきまして、一旦解雇したものを再雇用しています。強硬な組合員をはじき飛ばす方策です」

「なるほど、じゃあ、日本の組合はどうやって資金を集めていたんです？」

「それが、今回の調査の肝でした」

そう言って、棚田は間をおいた。静香のボールペンを握りしめる手に力が入ったと、横にいても感じ取ることが出来た。

「ドラッグですよ」

「はい？」

労働組合とドラッグというのが結びつかなかった。静香だけは、ああ、と納得したような雰囲気だった。予備情報があったのかも知れない。

「場所と名前は伏せてくれというので、わたしも申し上げられませんが、探偵としての守秘義務というやつです。都内の緩いメンタルクリニックがあります。そこで、自己申告でナルコレプシーというリタリンという向精神薬を処方してくれます。必要な日数をいうといくらでも処方してくれます」

リタリンは覚醒作用のある向精神薬で、最近では規制が厳しくな

り、滅多なことでは処方されない薬である。

しかし、確かにそんな医者を探せばいそうだった。患者はそんな医者をありがたがって、共存共栄というのだろうか、絶対に告発したりはしない。事故でもない限りは。

「飯星鉄工の西堀と大曲という従業員がその手口で、リタリンを仕入れていました。そして、進学塾や予備校のルートで受験生などに売りさばきます。クスリに無知な中学生あたりがターゲットになっていたと思われませう」

「そんなこととして、活動資金を稼いでいたの？」

静香があきれたように吐き捨てた。

本当だとしたら、全くもってけしからん話ではある。そして、飯星鉄工の泣き所になるだろう。

静香がこちらの顔を見た。

「何にせよ、ベトナムの会社とは別会社だ。経営に支障はないだろう、と思う」

「犠牲者が出ない限りはね」

「え？」

「すでに一人亡くなったわ、飯星遥香さん、十五歳。薬物による急性中毒よ。リタリンかどうかはわからないけど、従業員が関わっていたのなら、十分経営に影響するスキャンダルになると思う」

棚田は続けた。

「今のところ判明しているのは、西荻窪の英進塾、西海講師と、

…」

「待って、彼らが売人だったの？」

「ええ」

「信じられない、塾の先生が生徒にそんなものを売りつけていたの？」

「クスリは差額が大きいから利益も大きいんでしょう。それに、彼らが学生の頃から自身で使っていたと思われ、クスリの種類は変わ

れど、ドーピングと呼ぶのが適切かどうかわかりませんが、ほぼ常態化していたと推察されます」

静香はボールペンを取り落とした。もはや、オカルト雑誌で記事に出来るレベルではない。社会問題として追及すべき時が来たのだ。しかるべき媒体を探してそっちに記事を流さなければならぬだろう。

10・スキャンダル(前書き)

2011・09・26	第1節掲載
2011・09・27	第2節、第3節掲載



—

咲子は、気がせいいていた。

大学の講義を途中で抜け出し、塾での授業が始まる前に、調べた  
いことがあった。

この間の、静香と光雲先生とで行った降霊実験で現れた綾野沙也  
加の言っていることが本当なのかどうなのかを確かめるには、実際  
に過去の記録を調べる必要があった。

一九九〇年度の英進塾の塾生名簿だ。

塾での出席番号、名前、住所、成績、志望校、合否判定などが細  
かに記載されていた。過去のデータを大切にしないで進路希望を指  
導することなどあり得ないからだ。最近になり個人情報保護法が出  
来てから、名簿が作られなくなってしまっているが、それでも、デ  
ータとしてのファイルは存在する。

この当時はパソコンが普及してはいたが、紙のファイルで残って  
いた。

綾野沙也加の志望校は、ここの学区のトップ校である桜ヶ丘高校  
でA判定となっていた。まず合格するであろうということだ。彼女  
の霊の話では繰り上がりで誰かが入ったという。咲子は同じく桜ヶ  
丘高校を志望していて、B判定以下の生徒を順に捜していった。

ぱらり、ぱらりとページをめくることに赤茶けた紙の古ぼけた色  
が目についた。

「山田啓子」という名前が見つかった。B判定であり、彼女の成績  
では桜ヶ丘高校への入学は微妙な範囲だと思われていたが、結果は  
合格であった。多分、ぎりぎりのラインで合格したのだと思われる。

彼女が綾野さんを蹴落として合格した子なの？

心の中で綾野の霊に呼びかけたが、すでに結果は分かっていた。

え、遥香ちゃん？

脳裏に反射したのは、遥香の生きているときの姿だった。山田啓子と飯星遥香の間に何か関係があるようだ。

その日の授業が始まる午後六時前に、警察が塾に踏み込んできた。「警視庁覚醒剤取締課の青森といいます。西海健太さんはいますか？」

咲子と大島は西海の方を見た。

刑事達六人がつかつかと歩み寄っていった。西海は椅子から腰を浮かせ、一瞬逃げようと試みたが、がっしりと肩をつかまれ動けなくなってしまうた。

「向精神薬取締法違反の容疑で逮捕状が出ています。逮捕します。十八時一分、身柄拘束。連行します」

青森と名乗った刑事は淡々と令状を読み上げ、西海に手錠をはめて外に止めてあった車両に連行されていった。

「あの、やっぱりいけない薬を扱っていたのですか？」

咲子は大島に聞いた。

「僕は知らない。が、……」

塩野が駆けつけてきて、大島は口を閉ざした。

「何事です？」

出て行くこうとする刑事に掴みかからんばかりの勢いで問い詰めた。「リタリンという薬物を第三者に販売する意図で所持していた容疑が掛けられています」

「もしかして、飯星鉄工もからんでいたのですか？」

刑事はちらりと咲子をにらんだ。

「よくご存じで。こちらにも捜査員が向かっていますよ。もっとも、向こうはそれだけじゃないですがね」

咲子は慌てて、飯星啓子に連絡を取った。

「お母様！ 大丈夫ですか？」

「中原先生？ 今大変なことに、……」

啓子は泣き声になっていた。

案の定、従業員の二人が先刻逮捕されたらしかった。誘拐殺人事件の犯人としてである。彼女もよりもよって、従業員が犯人だとは信じたくないと言った。だが、彼女の話をかいつまんでいけば、以前からベトナム行きを嫌がったの、ストライキや嫌がらせが相次いでいたと言うことでもあり、十分動機はあったと考えて良さそうであった。

塾は、もう今日は休校である。

咲子は急ぎ、啓子の家に直行した。嫌な予感がしたのである。

## 二

高史は午後になり経済ジャーナル編集部に行くなり、杉山に呼びつけられた。

飯星鉄工に関して新たなニュースが飛び込んできたという。芸術写真での降霊実験の結果を知っている高史にとってはさほど驚きではなかったというのは嘘ではない。それよりも、高山光雲の霊力に驚いたと言う方が正確だろう。

「飯星鉄工が危ないかも知れない。殺人事件の犯人がベトナム行きを拒んでいた旧組合のメンバーだったと言うことと、ドラッグの密売までやって資金を稼いでいたらしい。どちらにしても、アメリカの新交通システム会社はこうしたスキャンダルを抱きかかえてまで採用はしないだろう。どう思う？」

「どうと言われましても」

高史は口ごもった。霊障のせいだとはここでは口が裂けても言えない。言ったが最後、おかしいやつと思われるに決まっていた。

「君の個人的見解なんてどうでもいいんだよ。アメリカでのコネクションがあるじゃないか。電話で問い合わせさせてみてくれないか？」

「はあ？ 電話でですか？」

さすがに、電話で細かいニュアンスを聞けるほどの英会話力はなかった。相手がロナルド・ヤマダなら何とか話になるかも知れないが、一対一で話したのは最後の一日だけだった。

「さあ、早く！」

杉山にせかされ、高史はおずおずと電話を取り、外線発信番号を押した。後はもらった名刺の番号に掛けるだけだ。留守であることを祈った。

「は、ハロー。デイス・イズ・タカシ・ナカハラ・スピーキング」  
がちがちの発音だった。帰って二週間ほどでこれほど語学力は低下してしまう。

だが、相手は前のままだった。

「OK、イージー、イージー！ ジョン・スミスだよ」  
幸いにして覚えていてくれたようだ。

「飯屋鉄工所の今回のスキヤンダルの影響について聞きたいのですが？」

「ああ、その件かね。やはり、ウィジャ盤のお告げの方が正確だったようだね」

すでに、スキヤンダルの影響は海を越えて伝わっているようだった。

「どうやら、殺人事件とドラッグの違法販売のスキヤンダルです」  
「こつちもその情報は得ている。多分、このままの計画では予算が議会を通らないだろう。同業他社に発注が変更されると考えていい。これは日本企業とは限らないと言うことだ。JRは文句を言うかも知れないが、クリーンと低コストは最重要条件だ」

「わかりました」

受話器の向こう側で、杉山が耳をくつつけて聞いていた。気持ち悪いが文句は言えない。

高史は夜中にも関わらず情報を提供してくれた礼をいい、電話を切った。

「これで、記事にはなるな。飯星鉄工の箇所だけ切り捨てて、そのまま載せよう」

「え？ いいんですか？」

「JR方式は間違いないんだろう？」

「あ、ええ、……はい」

強引だとは感じたが、記事にまとめなければこの仕事は完結しないのだ。高史はパソコンに向かい、ワープロソフトを起動させた。

原稿の下書きを杉山に提出して午後六時頃、コーヒーを飲み、廊下の自動販売機の前まで来て、小銭を探していると携帯電話がけたたましく鳴り響いた。不吉な感じがした。

「お兄ちゃん！」

咲子の泣き声でした。

### 三

咲子は飯星家の門前でおたおたしていた。午後一度だけ電話がつながっただけで、後は何度かけ直しても本人がつかまらないし、こうして、家の前まで来ても、閉じこもったきり出てこようとしないのだ。会社の方は、すでに警察の捜索が及んでいて、そちらにはいないことはわかっていた。

しばらく待っていると、シルバーのセダンに乗った静香に乘せられた兄と一緒にやって来た。

「どうしたのよ？ 咲子ちゃん」

静香がかばうように肩を抱きかかえてくれた。

「わかったんです。あの意味が」

「わかったって、何よ？ はっきり言ってちょうだい！」

静香は厳しい言い方をした。

「綾野さんを蹴落として繰り上げ入学した子の正体です。あれ、山田啓子という生徒だったんです。塾の同級生で、B判定でした」  
咲子の説明は少し要領を得ないものだと思分かった。

「その山田さんがどうしたのよ？」

「飯星啓子さんの旧姓が山田だったんです。つまり、遥香さんが綾野さんの霊を呼び出して、霊障があったのは飯星啓子さんの娘だからだったんですよ」

「ええーっ！」

静香は大げさに驚いた。

「つまり、つまり、……本当の霊障はお母さんの啓子さんに向かうべきものだったんです。でも、もう、向かっていると言っても代わりはないのですが」

「そんなことないわ。中原君！」

静香は兄をけしかけた。

「不法侵入ですよ。これって」

そう言いながらも、兄は鉄製の門柱に足をかけると、ひらりと向こう側に飛び越した。着地のショックで膝を丸める。そして、門にかかっていた鍵を解いた。そろそろと、三人で庭の方に回り込んだ。

「結構広いおうちよね」

静香が冷静な感想を述べる。

「おい、こつち！」

兄が部屋の中をのぞき込んでいて、こちらに手招きした。どうやら、中に人がいるらしい。咲子ものぞき込んでみると、カーテン越しに床の上に人が倒れているのが見えた。非常事態だった。

兄は静香の方をちらりと見た。彼女がうなずくのを見てから、庭先に落ちていた大きな石を拾い上げて、窓のロックの部分にぶつけて割った。手を切らないように気をつけて破片を取り除いて、ロックを解除した。がらがらと音を立ててサッシを開いた。

「啓子さん！ 大丈夫ですか？」

三人が同時に叫んだ。

テーブルの上には睡眠薬の箱が二つ置いてあった。百錠入りの箱が二つで二百錠になる。致死量がどのくらいになるのか知らなかったが、いずれにしても尋常な量ではない。

「胃洗浄が必要だ。救急病院に行かせるしかない」

兄は携帯電話を取り出して一一九番通報した。

静香は上半身を抱きかかえて、のどに指をつっこみ、何とか吐かせられないか頑張っている。しかし、意識のない人に嘔下反応は期待できなかった。咲子は二人の対応を見守るしかない。

十分ほどで救急車が不吉なサイレンを鳴らしながら到着した。救急隊員は啓子の首筋から脈を取り、生きていることを確かめると担架に乗せ、車両の中に搬送した。ここからが、長かった、救急隊員が受け入れ先の病院を探すのだが、中々見つからない。

「決まりました。近くの病院ですよ。一緒に来ていただけますか？」

「わたしが行きます」

咲子が手を挙げた。

「咲子ちゃん、身内の方に連絡した方がいいよ」

「駄目なんです。ご主人はベトナムだし、娘さんはこの間亡くなっているし、……」

「そうなの？」

救急車は発進した。

救急車の中で、意識が混濁している啓子の手に触れると、綾野の心配を感じた。彼女は、啓子をあの世へ連れ去ろうとしていた。

来ちゃ駄目。咲子は念じたが、そんなことに動じる綾野ではなかったし、咲子の能力はただ単に霊の存在を感じるだけで、払いのける力はなかった。

救急隊員は、病院の医師に何度も状態の変化を伝え続けた。脈拍、血圧、意識度、……

「どうなんですか？」

咲子が聞くと彼は難しい顔をした。

中枢神経が麻痺してしまうと、自力での呼吸が止まり、生命が維持できないと言った。

交差点に差し掛かる度、救急車はスピードを落とし、スピーカーから警告を発しながら進んだ。その度に、咲子はいらいらした。

市民病院救命救急センターに到着したとき、受付の時計は七時を示していた。

啓子は担架に乗せられたまま、中央処置室に運び込まれて行った。後から、兄と静香もクルマで駆けつけた。

誰に祈るともなく、手を合わせて待合室の長いすに腰掛けていた。「結局、これも霊障だということか？」

兄が皮肉気な口調で言った。静香はさっきから黙っている。

咲子は兄が静香と情報を共有していると思っていたから、黙ってうなずいた。

「おい、どこまでが霊障なんだ？」

「どこまでって、どういう意味？」と静香が切り返した。

「飯屋鉄工所の工員が不届きな犯罪に手を染めたあげく、殺人事件にまで発展した。これら一連の事件が悪霊の仕業というんだろ？」

「待って、順序が逆だよ。元々、お母さんが綾野沙也加の不慮の死とは関係ないけど、反感を買っていたのよ。それが、たまたまあの塾でコツクリさんをやったがために、この世に迷い出てきたの。霊障はそこからよ。娘さんは誘拐殺人の被害者となり、お母さんは自殺未遂をした」

咲子は、まくし立てる静香の声をよそに、懸命に啓子の生命が助かることを祈っていた。綾野沙也加だって、そんなことをすれば本当に悪霊となってしまう。どうにか、思いとどまらせる方法はなかったのだろうか。



しばらくして医師が出てきた。

「ご家族の方ですか？」

「いいえ、知り合いなんですけど、他に近親者がいないので」

「そうですか。今し方お亡くなりになりました。九時十五分です」  
「急激に疲労感に襲われた。たった今まで努力していたのは何のた  
めだったんだらう。」

気がつくとも兄がいなかった。きよろきよろと見回すと、ロビーの  
隅で電話をしていた。仕事途中で抜け出てきたから、何か急ぎの  
連絡があつたのかも知れない。

「ベトナムから成田に向かうアジア航空の旅客機が落ちたらしい」

「え？」

「こんな時に仕事の話？」 静香は文句を言う。

「乗客名簿に飯星丈太郎氏の名前があつたそうだ」

「うそ！」

綾野の怨霊は啓子だけに向かつたのもではなかったのか？ 咲子  
はさらにわからなくなった。まるであの会社を標的にしたような、  
いや、あの会社ではない、飯星家の家族だけに向けられているかの  
ようだ。

咲子は病室に入っていった。

啓子の遺体は看護師が清拭をしている最中だった。何か触れるも  
のがあればいい。すでに役目を終えて電源が切られているバイタル  
メータの金属部分に手を触れた。

クルマにはねられる瞬間の綾野の姿が見えた。

ドライバーはひき逃げなどしていない。その場にとどまり、無駄  
だったが救急車を呼んでいた。

11・その後(前書き)

2011・09・28 掲載

咲子はあれ以来、英進塾でのアルバイトを辞めてしまった。塩野は口止め料も込めてか、規定より多くのアルバイト料をくれたが、頼まれなくても喋る気はなかった。

辞めるとき、青野裕だけが、教室から出て言葉を掛けてくれた。

「何で辞めるんだよ」

「大学が忙しくってね。ゼミとか色々あるのよ。最後までつきあえなくてごめんね」

「ふうん。……まあ、いいや。先生だけが、他の先生より違っていたからな」

「それより、あのとき見せてくれたクスリ、あんただけは絶対使っちゃ駄目だからね」

「本当言つと、使つてねえよ」

「本当？ 約束だよ」

そう言つと、青野はにやりと笑った。分かっているのかどうか分からないが、使わないという言葉を信用するしかない。

後日、静香から興味深い調査結果を知ることが出来た。

ライオン社近くの喫茶店で落ち合った。

「咲子ちゃん、何にする？」

「静香さんと同じものを」

「じゃあ、コーヒー二つね」

店員にブレンドコーヒー二つを注文すると、いつものように、興味津々という顔になり、バッグの中から取材ノートを取り出した。間に挟んであった新聞のコピーを見せてくれた。

「これが、綾野沙也加さんが事故ったときの新聞記事。それによると、高校での合格発表後すぐに事故しているわ。場所もすぐ近く。見通しのよい直線道路だったんだけど、トラックが駐車されていて、それがドライバ―の視界を遮ったらしいわ」

「ドライバ―は、……あ！」

「びつくりでしょ？」

「同姓同名ってことはないですか？」

「年齢からしてびつたりなのよ。一応、探偵さんにも調べてもらっただけど、やっぱり同一人物なのよ。その後はね、業務上過失致死罪で書類送検されるんだけど、違法駐車が原因と言うことで、ドライバ―は不起訴になるの。この事故はそれでおしまい」

飯星丈太郎、二十四歳。今は四十九歳だから同じか？

「じゃあ、霊障は本当にこれでおしまいなんですね」

「どうだろう？　また、コックリさんなんかする人が現れてうっかり呼び出しちゃうと、危ないかも」

店員が、コーヒ―をトレイに載せて持って来た。二人分、目の前に起き、どうぞごゆっくりと挨拶して行ってしまった。請求書はすつと静香が引き取る。

「ごちそうさまです」

「いいえ」

咲子がコーヒ―カップに手を触れたとき、自分たちを見ている異界の住人達の視線を感じた。了

## 11・その後（後書き）

最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2453w/>

---

呪いの十円硬貨

2011年10月4日03時30分発行